

佐藤春夫

改作

田園の憂鬱

或は病める薔薇

「やぶちゃん注…私は既に

[ブログ・カテゴリ「佐藤春夫」](#)

で全十八回分割で、マニアックな詳細注を入れた形で、まず以って電子化されることがないのであろう大正七（一九一八）年十一月二十八日刊行の作品集「病める薔薇」の天佑社の初版に載る未定稿『病める薔薇或は「田園の憂鬱」をマニアックに電子化注している（未定稿及び本篇の改作決定稿に至る経緯は、私の「[佐藤春夫 未定稿『病める薔薇（さうび）或は「田園の憂鬱」](#)（天佑社初版版） 始動（その1）」の私の冒頭注を見られたい。なお、五月蠅い注の一部を外した

[サイト版横書ルビ化一括版](#)

もある。

今回の本底本のブログ版（全十八分割）作成に際し、未定稿のブログ版は改めて正字修正を行い、注の追補も行った。

今回は、未定稿のブログ分割版に対応させる形で、「国立国会図書館内図書館・個人送信限定」で「[国立国会図書館デジタルコレクション](#)」の「[佐藤春夫全集 第一巻](#)」（昭和六（一九三一）年十月二十日改造社発行）を底本とした。[当該本文はここから](#)。しかし、この全集、驚くべきことに、三段組で甚だ字が小さい。見落としのないよう、拡大して視認したが、拡大しても、字体が判明しない箇所では（かなりある）、正字を採用した。また、底本では恐らく行末に読点があった場合、禁則処理が版組上、出来ないようになっていたものと推定され、他の項では読点がある箇所が、有意に、ない。しかし、では、他の稿から、そこに安易に読点を打つことは出来るかと言えば、それは校訂上、出来ない仕儀であるので、無しは無しのままにしてある。また、不審箇所及び難読漢字の読み注では、所持する新潮文庫昭和五一年五月発行の三十七版を参考にした。なお、加工データとして「青空文庫」の新字旧仮名版（底本／筑摩書房「日本文学全集27 佐藤春夫集」昭和四五（一九七〇）年十一月一日発行・入力／阿部哲也氏・校正／津村田悟氏・二〇一八年三月二十七日公開）の[こちら](#)にあるテキスト・ファイルを使用して戴いた。ここに御礼申し上げる。

私の電子化の意図は、既電子化マニアック注の未定稿との対比に専らがある。従って、未定稿版電子化注と対応させて、対照出来るようにリンクも張った。こちらでは、特に必要と認めた物以外は注は附さなかった。語注はそれぞれの旧ブログ版の注を参照されたい。

これは、ブログ版のための原稿を縦書一括ルビ付きPDF版に作り直したものである。

以下の標題の頭の【改作】は右から左に小文字で割注風に配されたそれを、読み替えたものである。

【二〇二三年二月八日公開 藪野直史】

【改作】田園の憂鬱

或は病める薔薇

I dwell alone

In a world of moan,

And my soul was a stagnant tide,

Edgar Allan Poe

私は、呻吟の世界で

ひとりで住んで居た。

私の靈は澱み腐れた潮であつた。

エドガア アラン ポオ

その家が、今、彼の目の前へ現れて來た。

初めのうちは、大變な元氣で砂ぼこりを上げながら、主人の後になり前になりして、飛びまはり纏はりついて居た彼の二疋の犬が、やうやう柔順になつて、彼のうしろに、二疋竝んで、そろそろ隨いて來るやうになつた頃である。高い木立の下を、路がぐつと大きく曲つた時に、

「ああやつと來ましたよ」

と言ひながら、彼等の案内者である赭毛の太つちよの女が、片手で日にやけた額から滴り落ちる汗を、汚れた手拭で拭ひながら、別の片手では、彼等の行く手の方を指し示した。男のやうに太いその指の尖を傳うて、彼等の瞳の落ちたところには、黒つぽい深緑のなかに埋もれて、目眩しいそはそはした夏の朝の光のなかで、鈍色にどつしりと或る落着きをもつて光つて居るささやかな萱葺の屋根があつた。

それが彼のこの家を見た最初の機會であつた。彼と彼の妻とは、その時、各この草屋根の上にさまようて居た彼等の瞳を、互に相手のそのの上に向けて、瞳と瞳とで會話をした――

「いい家のやうな豫覺がある」

「ええ私もさう思ふの」

その草屋根を見つめながら歩いた。この家ならば、何日か遠い以前にでも、夢にであるか、幻にであるか、それとも疾走する汽車の窓からでもあつたか、何かで一度見たことがあるやうにも彼は思つた。その草屋根を焦點としての視野は、實際、何處でも見出されさうな、平凡な田舎の横顔であつた。而も、それが却つて今の彼の心をひきつけた。今

の彼の懂れがそんなところにあつたからである。さうして、彼がこの地方を自分の住家に撰んだのも、亦この理由からに外ならなかつた。

廣い武藏野が既にその南端になつて盡きるところ、それが漸くに山國の地勢に入らうとする變化——言はば山國からの微かな餘情を湛へたエピロオグであり、やがて大きな野原への波打つプロオグでもあるこれ等の小さな丘は、目のとどくかぎり、此處にも起伏して、それが形造るつまらぬ風景の間を縫うて、一筋の平坦な街道が東から西へ、また別の街道が北から南へ通じてゐるあたりに、その道に沿うて一つの草深い農村があり、幾つかの卑下つた草屋根があつた。それはTとYとHとの大きな都市をすぐ六七里の隣にして、譬へば三つの劇しい旋風の境目に出来た眞空のやうに、世紀からは置きつ放しにされ、世界からは忘れられ、文明からは押流されて、しよんぼりと置かれて居るのであつた。

一たい、彼「やぶちゃん注」ルビがあるが、「かれ」には見えず、判読不能。」が最初「やぶちゃん注」新潮文庫版では「最初に。」こんな路の上で、限りなく樂しみ、又珍らしく心のくつろいだ自分自身を見出したのは、その同じ年の暮春の或る一日であつた。こんな場所には「やぶちゃん注」新潮版では「は」はない。」これほどの片田舎があることを知つて、彼は先づ愕かされた。しかもその平靜な四邊の風物は彼に珍らしかつた。ずつと南方の或る半島の突端に生れた彼は、荒い海と嶮しい山とが激しく咬み合つて、胸の「やぶちゃん注」新潮版は「その。」間で人間が微小にしかし賢明に生きて居る一小市街の傍を、大きな急流の川がその上に筏を長長と浮べさせて押合ながら荒荒しい海の方へ犇き合つて流れてゆく彼の故郷のクライマックスの多い戲曲的な風景にくらべて、この丘つづき、空と、雜木原と、田と、畑と、雲雀との村は、實に小さな散文詩であつた。前者の自然は彼の峻嚴な父であるとすれば、後者のそれは子に甘い彼の母であつた。「歸れる放蕩息子」に自分自身をたとへた彼は、息苦しい都會の眞中にあつて、柔かに優さしいそれ故に平凡な自然の中へ、溶け込んで了ひたいといふ切願を、可なり久しい以前から持つやうになつて居た。おゝ！そこにはクラシツクのやうな平靜な幸福と喜びとが、人を持つて「やぶちゃん注」ママ。新潮版か「待つて」。誤植であらう。」居るに違ひない。Vanity of vanity, vanity, all is vanity.「空の空、空の空なる哉都て空なり」或は然うでないにしても……いや、理窟は何もなかつた。ただ都會のただ中では息が屏つた。人間の重さで壓しつぶされるのを感じた。其處に置かれるには彼はあまりに鋭敏な機械だ、其處が彼をいやが上にも鋭敏にする。そればかりではない、周圍の騒しい春が彼を一層孤獨にした。「嗟、こんな晩には、何處でもいい、しつとりとした草葺「やぶちゃん注」新潮版は「の」が入る。」田舎家の中で、暗い赤いランプの蔭で、手も足も思ふ存分に延ばして、前後も忘れて「やぶちゃん注」新潮版は「忘れる。」深い眠に陥入つて見たい」といふ心持が、華やかな白熱燈の下を、石甃の路の上を、疲れ切つた流浪人のやうな足どりで歩いて居る彼の心の中へ、切なく込上げて來ることが、まことに屢であつた。「おお！ 深い眠、おれはそれを知らなくなつてからもう何年になるであらう？ 深い眠！ それは言はば宗教的な法悦だ。おれの今最も欲しいのはそれだ。熟睡の法悦だ。即ち肉體がほんとう「やぶち

ん注…ママ。」に生きてゐる人の法悦だ。俺は先づそれを求める。そのある處へ行かう。さあ早く行かう！」彼は自分自身の心のなかでさう呟いた。或は、口に出してさへ呟いた。さうして矢も楯もたまらない、郷愁に似たやうな名づけやうのない心が、その何處とも知れない場所へ、自分自身を連れて行けとせがむのであつた……。 (彼は老人のやうな理智と青年らしい感情と、それに子供ほどの意志とをもつた青年であつた。)

その家が、今、彼の目の前に現はれて來たのである。

道の右手には、道に沿うて一條の小渠みぞがあつた。道が大きく曲れば、渠もそれにつれて「やぶちゃん注…新潮版は「ついて。」」大きく曲つた。そのなかを水は流れて行き流れて來るのであつた。雑木山の裾や、柿の樹の傍や、廐の横手や、藪の下や、桐畑や片隅にぽつかり大きな百合や葵を咲かせた農家の庭の前などを通つて。幅六尺ほどのこの渠は、事實は田へ水を引くための灌水であつたけれども、遠い山間から來た川上の水を眞直ぐに引いたものだけに、その美しさは溪と言ひ度いやうな氣がする。青葉を透して降りそそぐ日の光が、それを一層にさう思はせた。へどろの赭土を洒して、洒し盡して何の濁りも立てずに、淺く走つて行く水は、時時ものに堰かれて、ぎらりぎらりと柄になく光つたり、さうかと思ふと縮緬の皺のやうに繊細に、或は或る小さなびくびくする痙攣の發作のやうに光つたりするのであつた。或は、その小さな閃きが魚の鱗のやうに重り合つて居るところもあつた。涼しい風が低く吹いて水の面を滑る時には、其處は細長い瞬間的な銀箔であつた。薄すさだの、もう夙すきくにあの情人にものを訴へるやうなセンチメンタルな白い小さい花を失つた野茨の一かたまりの藪だの、その外、名もない併しそれぞれの花や實を持つ草や灌木が、渠の兩側から茂り合ひかぶさりかかると、水はそれらの草のトンネルをくぐつた。さうしてその影を黒く涼しく浮べては、ゆらゆらと流れ去つた。或る時には、水はゆつたりと流れ淀んだ。それは旅人が自分の來た方をふりかへつて佇むのに似て居た。そんな時には土耳其玉のやうな夏の午前の空を、土耳其玉色に――或は側面から透して見た玻璃板の色に、映して居るのであつた。快活な蜻蛉は流れと微風とに逆行して、水の面とすれすれに身軽く滑走し、時時その尾を水にひたして卵を其處に産みつけて居た。その蜻蛉は微風に乗つて、しばらくの間は彼等と同じ方向へ彼等と同じほどの速さで、一行を追ふやうに従うて居たが、何かの拍子について空ざまに高く舞ひ上つた。彼は水を見、また空を見た。その蜻蛉を呼びかけて祝福したいやうな子供らしい氣輕さが、自分の心に湧き出るのを彼は知つた。さうしてこの楽しい流れが、あの家の前を流れて居るであらうことを想ふのが、彼にはうれしかつた。

劇しい暑さは苦しい、楽しい、と表現しようとして木の葉の一枚一枚が寶玉の一斷面のやうに輝くと、それらの下から蟬は焼かれて居るやうに呻いた。灼けた太陽は、空の眞中近く昇つて來て居た。併し、彼の妻は、暑さをさほどには感じなかつた。併し、彼の妻から暑さを防いだものは、その頭の上の紫陽花色に紫陽花の刺繍のあるパラソル――貧しい婦の天蓋――ではなかつた。それは彼の女の物思ひであつた。彼の女は今歩きながら考へ耽つて居る、暑さを身を感じる閑もないほど。彼の女は考へた――さうすれば今間借りを

して居る寺のあの西日のくわつと射し込む一室から涼しいところへ脱れられる。それよりもあの下卑た俗惡な慾張りの口うるさい梵妻の近くから脱れられる。さうして、靜に、涼しく、二人は二人して、言ひたい事だけは言ひ、言ひたくない事は一切言はずに暮したい住みたい。さうすれば、風のやうに捕捉し難い海のやうに敏感すぎるこの人の心持も氣分も少しは落着くことであらう。あれほどの意氣込みで田舎を懂れて來ながら、僅ながらもわざわざ買つて貰つた自分の畑の地面をどう利用しようなどと考へて居るでも無く（それはもとよりさうであらうとは思つたけれども）それよりも本一行見るではなく字一書かうとするでもなく、何一つ手にはつかぬらしい。さうして若しそんな事でも言ひ出せばきつと吐鳴りつけるにきまつて居る、それでなくてさへも、もう全然駄目なものと見放されて居る――わけて自分との早婚すぎる無理な結婚の以後は殊にさう思はれて居るらしい父母への心づかひもなく、ただうかうかと――ではないとあの人自身では言つてもとにかくうかうかと、その日その日の夢を見て暮して居るのである。何時、建てるものとのない家の圖面の、而も實用的といふやうな分子などは一つも無いものを何枚も何十枚も、それは細かく細かく描いて居るかと思ふと、不意に庭へ飛び出して、犬の眞似をして犬と一緒になつて、燃えて居る草いきれの草原を這つたり轉げまはつたり、さうかと思ふと突然破れるやうな大聲で笑ひ出したり叫び出したりするこの人は、ほんとう「やぶちゃん注…、ママ。」に何か非常に寂しいのであらう。何事も自分には話してくれはしないから解る筈もない。何か自分には隠して居るのではなからうか……。彼の女は、五六日前に讀み了つた藤村の「春」を思ひ出した。單純な彼の女の頭には、自分の夫の天分を疑うて見る事などは知らずに、自分の夫のことをその小説のなかの一人が、自分の目の前――生活の隣りへ、その本の中から抜け出して來たかのやうにも思つて見た……。あれほど深い自信のあるらしい藝術上の仕事などは忘れて、放擲して、ほんとうにこの田舎で一生を朽ちさせるつもりであらうか。この人は、まあ何といふ不思議な夢を見たがるのであらう……。それにしても、この人は、他人に對しては、それは親切に、優しく調子よくしながら、何故かうまで私には氣難かしいのであらう。若しや、あの人のある女に對する前の戀がまだ褪せきらない間に、私はあの人の胸のなかへ這入つて行つて、そのためにあの人はしばらくはあの女を忘れては居たけれども、根強く残つて居たあの戀が何時の間にか再び自分ののけものにしてまた芽を出したのではなからうか。さうして私には辛くあたる……。今のままでは、さぞかし當人も苦しいであらうが、第一そばに居るものがたまらない。返事が氣に入らないといつては轉ぶほど突きとばされたり、打たれたり、何が氣に入らないのか二日も三日も一言も口を利かうとはしなかつたり……。あの人はきつと自分との結婚を悔いて居るのだ。少くとも若し自分とではなく、あの女と一緒に住んで居たならばどんなに幸福だつたらうかと、時時、考へるに違ひない。考へるばかりではない、現に、自分にむかつてさう言つたことさへある――「あの時、おれがあの女、あの純潔な素直な娘と一緒になれさへしたならば、あの人が私をよく統一して、おれは今ごろ、いろいろな意味でもつと美しいもつと善い生活が出來て居ただらうに」と……。實際あの女は、自分も知つて

居るけれども、自分などよりはもつと美しく、もつと優しい。私はあの人があの人をどんなに深く思つて居るかはよく知つて居る……いや、いや、さうではない。あの方はやつぱりあの人自身で何か別のことを考へ込んで居るのである……さうだ、夫は、「ただ、私をそつとして置いてくれ」と言つた……

ふと、

「俺には優しい感情がないのではない。俺は唯それを言ひ現すのが恥しいのだ。俺はさういふ性分に生れつゝいたのだ」

彼の女は、昨夜、いつになく打解けて彼が語つた時、彼の女にむかつて言つた彼の女の夫の言葉を思ひ出すとその言葉を反芻しながら歩いた。さうして未だ見たことのない家の間どりなどを考へた。たとひ新婚の夢からはとつゝに覺めたころであつても、こんな暑さの下ででもただ單に轉居するといふだけの動機で心持がふだんよりもずつと活き活きとして來て、こんなことを考へて悲しんだり、喜んだり、慰んだりすることの出来るのは、まだ世の中を少しも知らない幼妻の特權であつたからだ。さうしてそれがまた、あの案内の女が、喋りつづけに喋つて居るその家の由來に就て、何の興味も持たぬらしく、ただ無愛想に空返事を與へて居るに過ぎなかつた所以でもある。――この案内の女は、その長い暑苦しい道の始終を、ながながと喋りつづけて休まなかつた。この女は自分の興味をもつて居るほどの事なら、他の何人にとつても、非常に面白いのが當然だと信じて居る單純な人人の一人であつたから。

こんな道を、彼等は一里近くも歩いた。

さうしてその家は、もう、彼等一同の目の前に來てゐた。

家の前には、果して渠が流れて居た。一つの小さな土橋が、茂るがままの雜草のなかに一筋細く人の歩んだあとを残して、その上を歩く人人に、あの幅一間あまりの渠を越させて、人人をその家の入口へ導く。

入口の左手には大きな柿の樹があつた。さうして奥の方にもあつた。それらの樹の自由自在にうねり曲つた太い枝は、見上げた者の目に、「私は永い間ここに立つて居る。もう實を結ぶことも少くなつた」とその身の上を告げて居るのであつた。その老いた幹には、大きな枝の脇の下に寄生木が生えて居た。その樹に對して右手には、その屋敷とその地つづきである桐畑とを區限つて細い溝があつた。何の水であらう。水が涸れて細く――その細い溝の一部分を尙細く流れて男帶よりもつと細く、水はちよろちよろ喘ぎ喘ぎ通うてゐた。はじめとした場所を、一面に空色の花の月草が生え茂つて居た。また子供たちが「こんぺたう」と呼んで居るその菓子形の形をした灰赤く白い小さな花や、又「赤まんま」と子供たちに呼ばれて居る野花なども、その月草に雜つて一帯に蔓つて居た。それはなつかしい幼な心をよびさます叢であつた。晝間は螢の宿であらう小草のなから、葉には白い豎の縞が鮮に染め出された蘆が、すらりと、十五六本もひとところに集つて、爽やかな長いそのうへ幅廣な葉を風にそよがせて、ざわざわと音をたてて居るのであつた。屋敷の奥の方から流れ出て來た水は、それらの小草の莖をくぐつてそれらの蘆の短い節節を洗ひ

きよめながら、うねりうねつて、解きほぐした絹絲の束のやうにつやつやしく、なよやかに揺れながら流れた。さうして、か細く長長い或る草の葉を、生えたままで流し倒して、その草のために一時流動することをさへぎられたそれらのささやかな水は、その草の葉を傳うて、より大きな道ばたの渠のなかへ、水時計の水のやうにぼたりぼたりと落ち濺いで居た。彼にはこの家の屋後に、湧き立つ小さな清新な泉がありさうにも感ぜられた——さういふ地勢でもあつたから。

家の背後は山つづきで竹藪になつて居た。竹のなかには素晴しく大きな丈の高い椿が、この清楚な竹藪のなかの異端者のやうに、重苦しく立つて居た。屋敷の庭は丈の高い——人間の背丈よりも高くなつた榊の生垣で取り圍まれてあつた。家全體は、指顧の遠さで見つた時にさうであつた如く、目の前に置かれて見ても、茂るにまかせた樹樹の枝のなかに埋められて、茂るにまかせた草の上に置かれてあつた。

犬は一疋づつ土橋の側から下りて行つて、灌水の水を交交に味うた。

彼はその土橋を渡らうともせず、「三徑就荒」と口吟みたいこの家を、思ひやり深さうにしばらく眺めた。

「ねえ、いいぢやないか、入口の氣持が」

彼はこの家の周圍から閑居とか隱棲とかいふ心持に相應したる「やぶちゃん注…新潮版に従えば、「相應した或る」である。」情趣を、幾つか拾ひ出し得てから、妻にむかつてかう言つた。

「然うね。でも随分荒れて居ること。家のなかへ這入つて見なければ……」

彼の妻は少々不安さうに、又さかしげに、氣まぐれな夫をたしなめる時にすべての妻がする口調をもつてさう答へた。併し、すぐ思ひかへして、

「でも、今のお寺に居ることを思へば、何處だつていいわ」

今飲んだ水から急に元氣を得た二疋の犬は、主人達よりも一足さきに庭のなかへ跳り込んだ。松の樹の根元の濃い樹かげを擇んだ二疋の犬どもは、わがもの顔に土の上へ長長と身を横へた。彼等は顔を突き出して、下顎から喉首のところを地面にべつたりと押しつけ、両方から同じ形に顔を竝べ合つた。さうして全く同じやうな様子に體を曲げて、後脚を投げ出した様子は、まことに愛らしいシンメトリーであつた。赤い舌を垂れて、苦しげな息を吐き出し乍ら、庭に這入つて來た彼等の主人達の顔を無邪氣な上眼で眺めて、靜かに楽しさうに尾を動かして見せた。いかにも落着いたらしいその姿は、此處がもう自分たちの家だといふ事を、彼等の主人たちよりさきに十分に豫感「やぶちゃん注…新潮版に従えば、「豫覺」である。」して居るらしいやうにも、彼には見られるのであつた。若しこの時、妻が彼のそばに居たならば彼は妻にかう言つたらう——

「ね、フラテもレオ（二つとも犬の名）も賛成してゐるよ。」

けれども彼の妻は、案内の女と一緒にその縁側の永い間閉されて居た戸を開けようとして、鍵で鍵穴をがたがた言はせて居る。

樹といふ樹は茂りに茂つて、緑は幾重にも積み重つた。錯雜した枝と枝とは網の目にな

り壁になり軒になつて、庭はほとんど日かげもさし込まなかつた。土の匂は黒い地面から冷冷と湧いて來た。彼は足もとから立ちのぼるその土の匂を、香を匂ふ人のやうに官能を尖らせて沁み沁みと味うて見た——ぢやらぢやらと涼しく音を立てて居た鍵束の音がやまつて、縁側の戸が開けられるまで。

「やぶちゃん注…以下に二行で「*」四つがずれて挿入されてパートが終わっている。次回冒頭で再現する。

以上は「佐藤春夫 未定稿『病める薔薇（さうび） 或は『田園の憂鬱』』（天佑社初版）始動（その1）」と対照されたい。」

* * * *

* * * *

「やつと、家らしくなつた」

昨日、門前で洗ひ淨めた障子を、彼の妻は不慣れな手つきで張つたのである。最後の一枚を張り了つた時、それを茶の間と中の間のあひだの敷居へ納めようとして立つて居る夫の後姿を見やりながら、妻は満足に輝いてさう言つた。

「やつと家らしくなつた」彼の女は同じ事を重ねて言つた。「疊は直ぐかへに來るといふし……。でも、私はほんたうに厭だつたわ、をとつひ初めてこの家を見た時にはねえ。こんな家に人間が住めるかと思つて」

「でも、まさか狐狸の住家ではあるまい」

「でもまるで浅茅が宿よ。でなけや、こほろぎの家よ。あの時、疊の上一面にびよんぴよん逃げまはつたこほろぎはまあどうでせう。恐いほどでしたわ」

「浅茅が宿か、浅茅が宿はよかつたね。……おい、以後この家を雨月草舎と呼ぼうぢやないか」

（彼等二人は——妻は夫の感化を受けて、上田秋成を讃美して居た。）

夫の愉快げな笑ひ顔を、久しぶりに見た妻はうれしかつた。

「そこで、今度は井戸換へですよ、これが大變ね。一年もまるで汲まないといふのですもの、水だつて大がい腐りますわねえ」

「腐るとも、毎日汲み上げて居なければ、俺の頭のやうに腐る」

この言葉に、「又か」と思つた妻は、今までのほしやいだ調子を忘れておづおづと夫の顔を見上げた。しかし夫の今日の言葉はただ口のさきだけであつたと見えて、その骨ばつた顔にはもとのままの笑があつた。それほど彼は機嫌がよかつたのである。それを見て安心した妻は甘えるやうに言ひ足した。

「それに、庭を何とかして下さらなけやあ。こんな陰氣なのはいや！」

疲れて壁にもたれかかつた妻の膝には、彼と彼の女との愛猫が、しなやかにしのび寄つてのつそりと上つて居るところであつた。

「青（猫の名）や。お前は暑苦しいねえ」

と言ひながらも、妻はその猫を抱き上げて居るのである。彼の家庭には犬が居る。猫が居

る。一たん愛するとなると、程度を忘れて溺愛せずには居られない彼の性質が、やがて彼等の家庭の習慣になつて、彼も彼の妻も人に物言ふやうに、犬と猫とに言ひかけるのが常であつた……。

* * * *

彼等夫婦がこの家に住むやうになつた日から、遡つて數年前である――

この村で一番と言はれて居る豪家N家の老主人は、年をとつて、ひどく人生の寂莫を感じ出した。普通人にとつてかういふ時に最も必要なものは、老いと若きとを問はず異性であつた。さうして、この老人は、都會から一人の若い女を連れて來た。この豪家は、この風流人の代にその田の半分を無くしたのだけれども、流石に老人の考へは金持らしいものであつた――ただ美しいだけで、何の能もないやうな女はつれて來なかつた。少し位は醜くとも、年さへ若ければ我慢するとして、村の爲めにもなり、それよりも自分の經濟の爲めにもなるやうな女を擇んだのであつた。一口に言へば、彼は、今までは村に無くて不自由をして居た産婆を副業にする妾を蓄へたのだ。それから自分の家の離れ座敷をとり外して、彼の屋敷からはすぐ下に當るところへ、それを建て直した。冬には朝から夕方まで日が當るやうな方角を考へて、四間の長さをつづく縁があつた。玄關の三疊を抜けて、六疊の茶の間には爐を切らせた。黒柿の床柱と、座敷の欄間に嵌込んだ麻の葉つなぎの棧のある障子の細工の細さは、村人の目をそば立たせた。さすがはうちの山から一本擇りに擇つて「やぶちゃん注…「えりにえつて」。」伐り出した柱だ、目ざはりな節一つない、と大工はその中古の柱を愛撫しながら自分のもののやうに褒めた。さうして農家の神神しいほど廣い土間のある、太い棟や梁の眞黒く煤けた臺所とは變つて、その家には、板をしきつめた臺所に、白足袋を穿いて、ぞろぞろ衣服の裾を引摺つた女が、そこで立働くやうになつた。老人は、その家督を四十幾つかになつた自分の長男に譲つた。さてこの老人は幸福であつた。村の人人は、自分の年の半分にも足らぬ若さの茶吞友達を得た隠居に就てかげ口を利いた。併し、そんな事位は隠居の幸福を傷けはしなかつた。

けれども、併しすべての平和と幸福とは、短い人生の中にあつて最も短い。それはちやうど、秋の日の障子の日向の上にふと影を落す鳥かげのやうである。つと來てはつと消え去る。さうして鳥かげを見た刹那に不思議なさびしさが湧く。老人のこれ等の平和の日も束の間であつた。

若い妾は、程なく、都會から一人の若い男を誘うて來た。村の人人は、この若い男を「番頭さん」「お産婆の番頭さん」と呼んだ。村の人人は産婆には、果して「番頭さん」が入用なものかどうかを知らなかつた。さうしてこの隠居は、自分の若い妾が、自分には無斷で、若い「番頭さん」を雇入れた事に就て不満であつた。非常に不満であつた。第一にこの若い男女の生活は田舎の人人の目には贅澤すぎた。隠居の豫算と少し違ひすぎた。隠居は彼等がもつとつましやかであり得る筈だと考へ初めた。その事を彼の妾に度度言ひつけた。初めは遠まはしに遠慮勝ちに、併しだんだん思ひ切つて言ふやうになつた。或

る夜には夜中言ひ募ることがあつた。「番頭さん」は多分これ等の對話を壁一重に聞いただらう。或るそんな夜の後の日に――彼の女が初めて村へ來てから一年ばかりの後、若い「番頭さん」を若い妾が「雇入れ」てから半年ほどの後、或る夕方、彼等二人の男女の姿は、突然この村から消えた。夕方に村の方から歸つて來た馬方は、山路の夕闇のなかで、くつきりと浮上つて白い丸い頬が目だったので、よく見ると「Nさんの産婆」「やぶちゃん注」新潮版に従うと、「お産婆」だつた、とその次の朝村の人人に告げた。併し、これは多分、この男が實際にこれを見たわけではなく、彼等が居なくなつたと聞いた時に、思ひついた嘘であつたかも知れない。でなければ彼は歸つて來ると直ぐその事を、珍らしげに、手柄顔に言ふべき筈だからである。人はこんな時に、ちよつとこんな事を言つて見たいやうな一種の藝術的本能を、誰しも多少持つて居るものである。――それはどうでもいいとして、この話は、話題に饑ゑて居る田舎の人人を喜ばせた、當分の間、さうして二十八の女には、七十に近いあの隠居よりは、二十四五の若者の方が、よく釣合ふべき筈だつたといふのが、村の輿論であつた。

痛ましいのは、若い妾に逃げられたこの隠居が、その後、植木の道樂に没頭し出した事である。

彼は花の咲く木を庭へ集め出した。今日はあの木をこちらに植ゑ變へ、昨日は別の庭からこの木を自分の庭にうつした。さうして明日は何かよい木を搜し出さねばと、毎日毎日、土いぢりに寧日がなかつた。春には牡丹があつた。夏には朝顔があつた。秋には菊があつた。冬には水仙があつた。さうして、彼の逃げて仕舞つた妾の代りに、二人の十と七つとの孫娘を、自分の左右に眠らせた床のなかで、この花つくりの翁は眠り難かつた。彼は月竝の俳諧に耽り出した。

隠居は死んだ、それから丁度一年経つた後に。彼は、かうして集めた花の木のそれぞれの花を僅かばかり楽しんだばかりであつた。さうしてその家は、彼の末の娘と共に村の小學校長のものになつた。村の校長はこの隠居の養子だつたからである。すると拔目のない植木屋があつて、算術の四則には長けて居り、それを實の算盤に應用することにも巧ではあつたけれども、美に就ては如何なる種類のそれにも一向無頓着な、當主の小學校長をたぶらかして、目ぼしい庭の飾りは皆引抜いて行つた。大木の白木蓮、玉椿、槿、海棠、黒竹「やぶちゃん注」・「くろちく」、枝垂れ櫻、大きな花石榴、梅、夾竹桃、いろいろな種類の蘭の鉢。さうしてそれ等の不幸な木はかくも忙しくその居所を變へなければならなかつた。土に慣れ親しむ暇もなかつた。かうしてそれ等のうちの或るものは、爲めに枯れたかも知れない。

小學校長は、ちやうど新築の出來上つた校舎の一部へ住んだ。自分の貰つたこの家は空家にして置いた。さうして居るうちにこの家を借り手があれば貸したいと考へ出した。住む人が無ければ、家は荒廢するばかりである。たとひ二圓でも一圓五十錢でも、家賃をとつて損になることはない、と校長先生の考は極く明瞭である。ところが、田舎では大抵の人は自分自身の家を持つて居る。たとひ軒端がくづれて、朽ち腐つた藁屋根にむつくりと

青苔が生えて居るやうな破家「やぶちゃん注」。「あばらや」なりとも、親から子に傳へ子から孫に傳へる自分の家を持つて居た。どんな立派な家にしろ、借家をして住まねばならないやうな百姓は、最後の最後に自分の屋敷を抵當流れにしてしまった最も貧しい人人に決つて居た。かくて、あの隠居が愛する女のために、又自分の老後の楽しみにと建てたこの家は實に貧しい貧しい百姓の家に化してしまつたのである。隠居が茶の間の茶釜をかけた爐には、大きないぶり勝ちな松薪が、めちやめちやに投込まれて、その煙は田舎家には無駄な天井に邪魔されて、家から外へ抜けて行く路もなかつた。さうして部屋を形造つた壁、障子、天井、疊は直ぐに煤びて來た。氣の毒な百姓の一家は立籠つた煙などを苦にしては居られない。反つてそれから來る溫さに感謝して、秋の、冬の長い夜な夜なを、繩を絢うたり、草鞋を編んだりして、夜を更かさねばならなかつた。家賃は四月目五月目位から滞り出した。疊はすり切れた。柱へはいろいろな場合のいろいろな痕跡がいろいろの形に刻みつけられた。「せめては下肥位はたまるだらう」と校長先生が考へたにも拘はらず、校長先生の作男が下肥を汲みに行く朝は、其處は何時もからつぽだつた。何となれば家の借り手の貧しい百姓が、自分の借りて居る畑へそれを運んでしまつた後であつたから。校長先生はひどくこの借家人を悪く思ひ初めた。會ふほどの人には誰彼となく、貧乏な百姓の狡猾を罵り、訴へた。さうして「どうせ貧乏する位の奴は、義理も何も心得ぬ狡猾漢だ」といふ結論を與へ去つた。外の村人は、直ぐ校長先生の意見に賛同の意を示した。そこで校長先生は自分の論理が眞理として確立されたのを感じ出した。次には、こんな男に家を貸して置くよりも、寧ろ荒れるにまかせて置いた方がどれほどよいか解らないと思ひ出した。何故かといふに、この男に家を貸すことは、積極的に荒廢させることである。反つて、空家として打捨てて置くことはその消極的な方法である。さうしてこの借家人は逐ひ立てられた。村の人人は校長先生の態度は合理的だと考へた。

これらの間――あの隠居が亡くなつてから後は、その庭の草や木のことを考へるやうな人は、ひとりもなかつた。家と庭とは荒れに荒れた。ただ一人、あの貧乏な百姓の小娘が、隠居が在世の折に植ゑられたままで、今は草の間に野生のやうになつて、年年に葉が哀れになり、莖がくねつて行く菊畑の黃菊白菊の小さな花を、秋の朝毎に見出しては、ちぢくれた髪のかんざしにと折りとつた……

……彼は縁側に立つて、庭をながめながら、あの案内者であつた太つちよの女が、道道語りつづけた話のうちに、彼一流の空想を雜へて、ぼんやり考へるともなく考へ、思ふともなくそんなことを思つて居た。

「フラテ、フラテ」裏の縁側の方では、彼の妻の聲がして、犬を呼んで居る。「おおよしよし、レオも來たのかい。お可愛いね。何も上げるのぢやなかつたのだよ。フラテや、お前はね、今のやうにあんな草ばかりのところまで遊ぶのぢやありませんよ。蝮が居ますよ。そらこの間のやうに、鼻の頭を咬まれて、喉が腫れ上つてお寺の和尚さんのやうにこんな大きな顔になつて來ると、ほんとうに心配ぢやないか。いいかい。フラテはもうこの間で懲りたから解つたわね。レオや、お前は氣をおつけよ。お前の方はおとなしいから大丈夫

だね……」彼の妻は牧歌を歌ふ娘のやうな聲と心持とで、自分の養子である二疋の犬に物云うて居る。さうして涼しい竹藪の風は、そこから彼の立つて居る方へ抜けて通りすぎた。

「やぶちゃん注…『佐藤春夫 未定稿『病める薔薇 或は『田園の憂鬱』』(天佑社初版版)

(その2)」と比較されたい。」

*

*

*

*

*

*

*

*

眞夏の廢園は茂るがままであつた。

すべての樹は、土の中ふかく出来るだけ根を張つて、そこから土の力を汲み上げ、葉を彼等の體中一面に着けて、太陽の光を思ふ存分に吸ひ込んで居るのであつた。――松は松として生き、櫻は櫻として、槿は槿として生きた。出来るだけ多く太陽の光を浴びて、己を大きくするために、彼等は枝を突き延した。互に各の意志を遂げて居る間に、各の枝は重り合ひ、ぶつかり合ひ、絡み合ひ、犇き合つた。自分達ばかりが、太陽の寵遇を得るためには、他の何物をも顧慮しては居られなかつた。さうして、日光を享けることの出来なくなつた枝は日に日に細つて行つた。一本の小さな松は、杉の下で赤く枯れて居た。榊の生垣は背丈が不揃ひになつて、その一列になつた頭の線が不恰好にうねつて居る。それは日のあたるところだけが生ひ茂り丈が延びて、諸の大きな樹の下に覆はれて日蔭になつた部分は、落凹んで了つたからであつた。又、その或る部分は葉を生かすことが出来なくなつて、恰も城壁の覗き窓ほどの穴が、ぽつかりとあいて居るところもあつた。或る部分は分厚に葉が重り合つてまるく團つて「やぶちゃん注…『かたまつて』」繁つて居るところもあつた。或る箇所は全く中斷されて居るのである。といふのは、丁度その生垣に沿うて植ゑられた大樹の松に覆ひ隠されて、そればかりか、垣根の眞中から不意に生ひ出して來た野生の藤蔓が人間の拇指よりもつと太い蔓になつて、生垣を突分け、その大樹の松の幹を、恰も虜を捕へた綱のやうに、ぐるぐる巻きに巻きながら攀ち登つて、その見上げるばかりの梢まで「やぶちゃん注…新潮版は「梢の梢まで」」登り盡して、それでまだ満足出来ない見える――その卷蔓は、空の方へ、身を悶えながらも狂しい「やぶちゃん注…『くるはしい』」指のやうに、何もないものを捉へようとしてあせり立つて居るのであつた。その卷蔓のうちの一つは松の隣りのその松よりも一際高い櫻の木へ這ひ渡つて、仲間のどれよりも廻に「やぶちゃん注…『はるかに』」。厳密には底本の漢字は「廻」の異体字のこれ(グリフウィキ)である。」高く、空に向つて延びて居た、又、庭の別の一隅では、梅の新らしい枝が直立して長く高く、譬へば天を刺し貫かうとする槍のやうに突立つて居るのであつた。曾ては菊畑であつた軟かい土には、根強く蔓つた雜草があつた。それは何處か竹に似た形と性質とを持つた強さうな草であつた。その硬い莖と葉とは土の表面を網目に編みながら這うて、自分の領土を確實にするためにその節のあるところから一根を下して、八方へ擴がつて居た。試にその一部分をとつて、根引にしようすると、その房房した無數の細い根は黒い砂まじりの土を、丁度人間が手でつかみ上げるほどづつ持上げて來る。これが彼等の生きようとする意志である、又、「夏」の萬物に命ずる燃ゆ

るやうな姿である。かく繁りに茂つた枝と葉とを持つた雑多な草木は、庭全體として言へば、丁度、狂人の鉛色な額に垂れかかつた放埒な髪の手を見るやうに陰鬱であつた。それ等の草木は或る不可見な重量をもつて、さほど廣くない庭を上から壓し、その中央にある建物を周圍から遠巻きして押迫つて来るやうにも感じられた。「やぶちゃん注…段落冒頭は底本では一字下げがないが、誤植と断じ、一字下げた。」

併し、凄く恐ろしい感じを彼に與へたものは、自然の持つて居るこの暴力的な意志ではなかつた。反つて、この混亂のなかに絶え絶えになつて残つて居る人工の一縷の典雅であつた。それは或る意志の幽霊である。あの拔目のない植木屋が、この廢園から殆んどその全部を奪ひ去つたとは言へ、今に未だ遺されて居るもののなにも、確に、故人の花つくりの翁の道樂を偲ばせずには置かないものが一つならず目につくのである。自然の力も、未だそれを全く匿し去ることは出来なかつた。例へば、もとはこんもりと棗形に刈り込まれて居たであらうと思へる白斑入りの羅漢柏「やぶちゃん注…「あすならう」」である。それは門から玄關への途中にある。それから又座敷から厠を隠した山茶花がある。その下かげの沈丁花がある。鉢をふせたやうな形に造つた霧嶋躑躅の幾株かがある。大きな葉が暑さのために萎れ、その蔭に大輪の花が枯れ萎びて居る年經た紫陽花がある。それらのものは巨人が激怒に任せて投げつけたやうな亂雑な庭のところどころにあつて、白木蓮、沈丁花、玉椿、秋海棠、梅、芙蓉、古木の高野槿、山茶花、萩、蘭の鉢、大きな自然石、むくむくと盛上つた青苔、枝垂櫻、黒竹、常夏、花柘榴の大木、それに水の近くには鳶尾「やぶちゃん注…「いちのはつ」」、其他のものが、程よく安排され、人の手で愛まれて「やぶちゃん注…「いつくしまれて」」居たその當時の夢を、北方の蠻人よりもつと亂暴な自然の蹂躪に任されて顧る人とてもない今日に、その夢を未だ見果てずに居るかと思へるのである。また假りに、庭の何處の隅にもそんなものの一株もなかつたとしたところが、門口にかぶさりかかつた一幹ひとこの松の枝ぶりからでも、それが今日でこそ徒らに硬く太く長い針の葉をぎつしりと身に着けて居ながらも、曾ては人の手が、懇にその枝を勞はり葉を揃へ、幹を撫でたものであつたことは、誰も容易に承認するのであらう。實は、その持主である小學校長は、この次にはその松を賣らうと考へて、この松だけはこん度の借家人が植木屋を呼ぶときには、根まはりもさせ鬼葉もとらせて置かうと思つて居るのであつた。故人の遺志を、偉大なそれであるからして時には殘忍にも思へる自然と運命との力が、どんな風にぐんぐん破壊し去つたかを見よ。それ等の遺された木は、庭は、自然の潑刺たる野蠻な力でもなく、また人工のアーティフィシャルな形式でもなかつた。反つて、この兩様の無雜作な不統一な混合であつた。さうしてそのなかには醜さといふよりも寧ろ故もなく凄然たるものがあつた。この家の新しい主人は、木の蔭に佇んで、この廢園の夏に見入つた。さて何かに怯かされてゐるのを感じた。瞬間的な或る恐怖がふと彼の裡に過ぎたやうに思ふ。さてそれが何であつたかは彼自身でも知らない。それを捉へる間もないほどそれは速かに閃き過ぎたからである。けれどもそれが不思議にも、精神的といふよりも寧ろ官能的な、動物の抱くであらうやうな恐怖であつたと思へた。

彼は、その日、暫く、新らしい住家のこの凄まじく哀れな庭の中を木かげを傳うて、歩き廻つて見た。

家の側面にある白樫「やぶちゃん注…「しらかし。」」の下には、蟻が、黒い長い一列になつて進軍して居るのであつた。彼等の或るものは大きな家寶である食糧を擔いで居た。少し大きな形の蟻がそこらにまぐばられて居て、彼等に命令して居るやうにも見える。彼等は出會ふときには、會釋をするやうに、或は噂をし合ふやうに、或は言傳を託して居るやうに兩方から立停つて頭をつき合せて居る。これはよくある蟻の轉宅であつた。彼は蹲まつて、小さい隊商を凝視した。さうして暫くの間、彼は彼等から子供らしい樂「やぶちゃん注…「たのしみ。」」を得させられた。永い年月の間、かういふものを見なかつた事や、若し目に入つたにしても見ようともしなかつたであらう事に、彼は初めて氣づいた。さう言へば、幼年の日以來――あの頃は、外の子供一倍そんなものを樂み耽つて居たにも拘らず、その思ひ出さへも忘れて居た――落ちついて、月を仰いだこともなければ、鳥を見たこともなかつた。そんな事に氣附いた事が、彼を妙に悲しく、また喜ばしくした。さういふ心を抱きながら其處から立上つて歩み出さうとすると、ふと目に入つたのは、その白樫の幹に道化た態「やぶちゃん注…「なり。」」をして、牙のやうな形の大きな前足をそこへ突立てて嚙りついて居る蟬の脱殻であつた。それは背中のまんなかからぱっくり裂けた、赤くびかびかした小さな鎧であつた。なほその幹をよく見て居ると、その脱殻から三四寸ほど上のところに、一丁の蟬が凝乎「やぶちゃん注…「じつと。」」として居るのを發見することが出來た。それは人のけはひに驚く風もないのは無理もない。その蟬は今生れたばかりだといふ事は一目に解つた。それはまだ極く軟かで體も固まつては居ないのである。この蟲はかうして身動きもせず凝乎としたまま、今、靜かに空氣の神祕にふれて居るのであつた。その軟かな未だ完成しない羽は全體は乳色で、言ふばかりなく可憐で、痛痛しく、小さくちぢかんで居た。ただその緑色の筋ばかりがひどく目立つた。それは爽やかな快活なみどり色で、彼の聯想は白く割れた種子を裂開いて「やぶちゃん注…「さきひらいて。」」突出した豆の双葉の芽を、ありありと思ひ浮べさせた。それはただにその色ばかりではなく、羽全體が植物の芽生に髣髴して居た。生れ出すものには、蟲と草との相違はありながら、或る共通な、或る姿がその中に啓示されて居るのを彼は見た。自然そのものには何の法則もないかも知れぬ。けれども少くもそれから、人はそれぞれの法則を、自分の好きなやうに看取することが出来るのであつた。尙ほ熟視すると、この蟲の平たい頭の丁度眞中あたりに、極く微小な、紅玉色でそれよりもつと燦然たる何ものかが、いみじくも鏤められて「やぶちゃん注…「ちりばめられて。」」居るのであつた。その寶玉的な何ものかは、科學の上では何であるか（單眼といふものであろう）彼はそれに就て知るべくもなかつた。けれどもその美しさに就ては、彼自身こそ他の何人より知つてゐると思つた。その美しさはこの小さなものにも足らぬ蟲の誕生を、彼をして神聖なものに感じさせ、禮拜させるためには、就中、非常に有力であつた。

彼のあるか無いかの知識のなかに、蟬といふものは二十年目位にやつと成蟲になるとい

ふやうなことを何日か何處かで、多分農學生か誰かから聞き嚙つたことがあつたのを思ひ出した。おお、この小さな蟲が、唯一口に蛙鳴蟬騒「やぶちゃん注…「あめいせんさう」。」と呼ばれて居るほど、人間には無意味に見える一生をするために、彼自身の年齢に殆んど近いほどの年を経て居ようとは！ さうして彼等の命は僅に數日——二日か三日か一週間であらうとは！ 自然は一たい、何のつもりでこんなものを造り出すのであらう。いやいや、こんなものと言つてただ蟬ばかりではない、人間を。彼自身を？ 神が創造したと言はれて居るこの自然は、恐らく出たらめなものではあるまいか。さうして出たらめを出たらめと氣附かないで解かうとする時ほど、それが神祕に見える時はないのだから。いやいや、何も解らない。さうだ、唯これだけは解る——蟬ははかない、さうして人間の雄辯な代議士の一生が蟬ではないと、誰が言はうぞ。蟬の羽は見て居るうちに、目に見えて、そのちぢくれが引延ばされた。同時にその半透明な乳白色は、刻刻に少しづつ併し確實に無色で透明なものに變化して來るのであつた。さうしてあの芽生のやうに爽快ではあるけれどもひ弱げな縁も、それに應じて段段と黒ずんで、恰も若草の縁が常磐木のそれになるやうな、或る現實的な強さが、瞭かに「やぶちゃん注…「あきらかに」。」其處にも現れつつあるのであつた。彼はこれ等のものを二十分あまりも眺めつくして居る間に——それは寧ろある病的な綿密さを以てであつた——自づと息が迫るやうな嚴肅を感じて來た。

突然、彼は自分の心にむかつて言つた。

「見よ、生れる者の悩みを。この小さなものが生れるためにでも、此處にこれだけの忍耐がある！」

それから重ねて言つた。

「この小さな蟲は俺だ！ 蟬よ、どうぞ早く飛立て！」

彼の奇妙な祈禱はこんな風にして行はれた。それはこの時のみならず常にかうして行はれてあつた。

「やぶちゃん注…佐藤春夫 未定稿『病める薔薇 或は「田園の憂鬱」』（天佑社初版）（その3）」と対照されたい。」

*

*

*

*

*

*

*

*

さて、ここに幾株かの薔薇「やぶちゃん注…「さうび」。」がこの庭の隅にあつた。

それは井戸端の水はけに沿うて、垣根のやうに植ゑつけられて居るのであつた。若し十分に繁茂して居れば「一架長條萬朶春」「やぶちゃん注…「いつかちやうでうばんだのはる」。」を見せて、二三間つづきの立派な花の垣根を造つたであらう。けれどもそれ等は甚（はなは）だしく不幸なものであつた。朝日をさへぎつては杉の木立があつた。夕日は家の大きな影が、それらの上にのしかかつて邪魔をした。そうして正午の前後には、柿の樹や梅の枝がこの薔薇の木から日の光を奪うた。さうしてそれ等杉や梅や柿の茂るがままの枝は、それ等の薔薇の木の上へのさばつて屋根のやうになつて居た。かうしてこれ等の薔薇の木は、その莖はいたいたしくも蔓草のやうに細つて、尺にもあまるほどの雜草のなか

でよろよと立上つて居た。

八月半すぎといふのに、花は愚かそれらの上には、一片の——實に文字どほりに一片の青い葉さへもないのであつた。それ等の莖が未だ生きたものであることを確めるためには、彼はそれの一本を折つて見るほどであつた。日の光と溫かさとは、すべての外のものに全く掠められて、土のなかに蓄へられた彼等の滋養分も彼等の根もとに蔓つた名もない雜草に悉く奪はれた。彼等は自然から何の恩恵も享けては居ないやうに見えた。ただこんな場所を最も好む蜘蛛の巢の丁度いい足場のやうになつて、ただ、そのためばかりに有用なものになつて、薔薇はかうしてまでその生存を未だつづけて居なければならなかつた。

薔薇は、彼の深くも愛したものの一つであつた。さうして時には「自分の花」とまで呼んだ。何故かといふに、この花に就ては一つの忘れ難い、慰めに満ちた詩句を、ゲエテが彼に遺して置いてくれたではないか——「薔薇ならば花開かん」と。又、ただそんな理窟ばつた因縁ばかりではなく、彼は心からこの花を愛するやうに思つた。その豐饒な、杯から溢れ出すほどの過剰な美は、殊にその紅色の花にあつて彼の心をひきつけた。その眩暈く「やぶちゃん注…「めくるめく。」」ばかりの重い香は彼には最初の接吻の甘美を思ひ起させるものであつた。さうして彼がそれを然う感ずる爲めにとて、古來幾多の詩人が幾多の美しい詩をこの花に寄せて居るのであつた。西歐の文字は古來この花の爲めに王冠を編んで贈つた。支那の詩人も亦あの繪模様のやうな文字を以てその花の光輝を歌ふことを見逃さなかつた。彼等も亦、大食國の「薔薇露」〔やぶちゃん注…「さうびろ。」を珍重し、この「換骨香」〔やぶちゃん注…「くわんこつかう。」を得るために「海外薔薇水中州未得方」〔やぶちゃん注…「かいぐわいさうびのみづちゆうしういまだはうをえず」と嘆じさせた。それ等の詩句の言葉は、この花の爲めに詩の領國內に、貴金屬の鑛脈のやうな一脈の傳統を——今ではすでに因襲になつたほどまでに、鞏固に形造つて居るのである。一度詩の國に足を踏み入れるものは、誰しも到るところで薔薇の噂を聞くほど。さうして、薔薇の色と香と、さては葉も刺も、それらの優秀な無數の詩句の一つ一つを肥料として己のなかに汲み上げ吸ひ込んで——それらの美しい文字の幻を己の背後に輝かせて、その爲めに枝もたわわになるやうに思へるほどである。それがその花から一しほの美を彼に感得させるのであつた。〔やぶちゃん注…新潮版はここに改行はない。〕

幸であるか、いや寧ろ甚だしい不幸であらう。彼の性格のなかにはかうした一般の藝術的因襲が非常に根深く心に根を張つて居るのであつた。彼が自分の事業として藝術を擇ぶやうになつたのもこの心からであらう。彼の藝術的な才分はこんな因襲から生れて、非常に早く目覺めて居た。……それ等の事が、やがて無意識のうちに、彼をしてかくまで薔薇を愛させるやうにしたのであらう。自然そのものから、眞に清新な美と喜びとを直接に摘み取ることを知り得なかつた頃から、それら藝術の因襲を通して、彼はこの花にのみは「やぶちゃん注…新潮版は「のみは。」」かうして深い愛を捧げて來て居た。馬鹿馬鹿しいことのやうではあるが、彼は「薔薇」といふ文字そのものにさへ愛を感じた。

それにしても、今、彼の目の前にあるところのこの花の木の見すばらしさよ！ 彼は、

曾て、非常に温い日向にあつた爲めに寒中に苔んだところの薔薇を、故郷の家の庭で見た事もあつた。それは淡紅色な大輪の花であつたが、太陽の不自然な温かさに誘はれて苔になつて見たけれども、朝夕の日かげのない時には、南國とても寒中は薔薇に寒すぎたに違ひない。苔は日を経ても徒に固く閉ぢて、そのみか白いうちにほの紅い花片の最も外側なものは、日日に不思議なことにも緑色の細い線が出来て来て、葉に近い性質、言はば花片と葉との間のものとも言ふやうなものにまで硬ばつて行くのを見た事があつた。けれども、彼が今日の前に見るこれらの薔薇の木は、その哀れな點では曾てのあの苔の花の比ではない。彼はこれ等の木を見て居るうち、衝動的に一つの考へを持つた。どうかしてこの日かげの薔薇の木、忍辱「やぶちゃん注」にんにく」の薔薇の木の上に日光の恩恵を浴びせてやりたい。花もつけさせたい。かう云ふのが彼のその瞬間に起つた願ひであつた。併し、この願ひのなかには、わざとらしい、遊戲的な所謂詩的といふやうな、又そんな事をするのが今の彼自身に適はしいといふ風な「態度」に充ちた心が、その大部分を占めて居たのである。彼自身でもそれに氣附かずには居られなかつたほど。（この心が常に、如何なる場合でも彼の誠實を多少づつ裏切るやうな事が多かつた）さて、彼はこの花の木で自分をトウて見たいやうな氣持があつた——「薔薇ならば花開かん」！

彼は自分で近所の農家へ行つた。足早に出て行く主人の姿を、二疋の犬は目敏くも認めて追驅けた。錆びた鋸と桑剪り鋏とをかたげた彼が、二疋の犬を従へて、一種得意げに再び庭へ現れたのは、五分とは経たないうちであつた。彼はにこにこしながら薔薇の傍に立つた。どうすれば其處を最もよく日が照すだらうと、見當をつけて上を見廻しながら、さて肩拔ぎになつた。先づ鋸、最ものさばり出た柿の太い枝を挽き初めた。枝からはぼろぼろと白い粉が降るやうにこぼれて、鋸の齒が半以上に喰ひ入ると、未だ斷ち切れない部分は、脆くもそれ自身の重みを支へ切れなくなつて、やがてぽきりと自分からへし折れ、大きな重い枝はそれの小枝を地面へ打つて落ちかかつた。すると、その隙間からはすぐ、日の光が投げつけるやうに、押し寄せるやうに、沁み渡るやうに、あの枯木に等しい薔薇の枝に降り濺いだ。薔薇を抱擁する日向は追追と廣くなつた。押しかぶさつた梅や杉や柿の枝葉が、追追に刈られたからである。彼は桑剪り鋏で、薔薇の木の上の蜘蛛の巢を拂うた。其處にはいろいろの蜘蛛が潜んで居た。蠅取り蜘蛛といふ小さな足の短い蜘蛛は、枝のつけ根に紙の袋のやうな巢を構へて居た。鼈甲のやうな色澤の長い足を持つた大きな女郎蜘蛛は、大仕掛な巢を張り渡して居た。鋏がその巢を荒すと、蜘蛛は曲藝師の巧さで絲を手繰りながら逃げて行く。それを大きな鋏が追驅ける。彼等は絲を吐きながら鋏のさきへぶら下がつて、土の上や、草のなかや、水溜りの上に下りて逃げる。それを鋏がちよん斬つた。

そんなことが彼の體を汗みどろにした。又彼の心を興奮させた。最初に、最も大きな枝が地に墜ちた音で、彼の珍らしい仕事を見に來た彼の妻は、何か夫に喚びかけたやうであつたけれども、彼は全く返事をしなかつた。犬どもは主人が今日は少しも相手になつてくれないのを知ると、彼等同士二疋で追つかけて合つて、庭中を騒ぎ廻つて居た。何か有頂天

とても言ひたい程な快感が彼にはあつた。さうして無暗に手當り次第に、何でも挽き切つてやりたいやうな氣持になつた。

彼は松に絡みついて居るあの藤の太い蔓を、根元から、桑剪り鋏で一息に斷ち切つた。彼は案外自分にも力があると思つた。その蔓を縋をもどすやうにくるくる廻しながら松の幹から引き分けると、松は其時ほつと深い吐息をしてみせたやうに彼には感ぜられた。彼は蔓のきり端を兩手で握ると、力の限りそれを引つぱつて見た。併し、勿論それは到底無駄であつた。松の小枝から梢へそれから更に隣りの櫻の木へまでも纏りついた藤蔓は引つぱられて、ただ松の枝と櫻の枝とをたわめて強く揺ぶらせ、それ等の葉を挽ぎ取らせて地の上に降らせ、又櫻の枝にくつついて居た毛蟲を彼の麥稈帽子の上に落しただけで、蔓自身は弓弦のやうに張りきつたのであつた。「私はお前さんの力ぐらゐには驚かんね！ どうでも勝手に、もつとしつかりやつて見るがいい！」と、その藤蔓は小面憎くも彼を揶揄したり、傲語したりするのであつた。彼はこの藤蔓には手をやいて、たうとうそれぎりにして置くより外はなかつた。さうして今度は生垣を刈り初めた。

正午すぎからの彼のこの遊びは、夕方になると、生垣の頭がくつきりと一直線に揃ひ、その壁のやうに平になつた側面には、折りから、その面と平行して照し込む夕日の光線が、樺の黒い硬い葉の上に反射して綺麗にきらきらと光つた。かうなつて見るとあの大きな穴が一層見苦しく目立つたのであつた。

「やあ、これやさつぱりしましたね」

と、こんな風な御世辭を言ひながら、その穴から家のなかを見通して行く野良歸りの農夫もあつた。それから、彼はその序にあの渠の上へ冠さつて居る猫楊の枝ぶりを繕うても見た。その夕方、彼は珍らしく大食した。夜は夜で快い熟睡を貪り得た。而も翌朝目覺めた時には、體が木のやうに硬ばり節節が痛むところの自分を、苦笑をもつて知らなければならなかつた。

その幾日か後の日に、今度はほんとう「やぶちゃん注…ママ。」の植木屋——といつても半農であるが——が、彼の家の庭に這入つた時には、あの松と櫻とにああまで執念深く絡みついて居た藤蔓は、あの百足の足のやうな葉がしをれ返つて、或る部分はもうすっかり青さを失うて居るのであつた。さうしてあのもの狂ほしい指である卷蔓は、悉くぐつたりとおち入つて居た。彼は惡人の最後を舞臺で見てよろこぶ人の心持で、松の樹の上で植木屋が切り虐む太い藤蔓を、軒の下にしやがんで見上げて居た。

「これや、もう四五日ほして置くといい焚きつけが出来まさあ」と突然、植木屋は松の樹の上から話しかけた。

「其奴はよつぽど太い奴だね」彼はそんな事を答へて置いて、「然うだ」とひとり考へた。「あの剛情な藤蔓が、そんなに早くも醜く枯れたのは、彼をそんなに太く壯んに育て上げたと同じその太陽の力だ」と、彼はこの藤蔓から古い寓話を聞かされて居た。彼は又、彼の意志——人間の意志が、自然の力を左右したやうにも考へた。寧ろ、自然の意志を人間である彼が代つて遂行したやうにも自負した。藤蔓が其處に生えて居た事は、自然にとつ

て何の不都合でもなかったであらうに、とにかく、最初に人間の手が造つた庭は、最後まで人間の手が必要なのだ……。彼は漫然そんなことを思つて見た。

それにしても、あの薔薇は、どう變つて来るであらうか。花は咲くか知ら？ それを待ち樂む心から、彼は立上つて歩いて行つた。薔薇を見るためにである。そのの上にはただ太陽が明るく頼もしげに照してゐるほか、別に未だ何の變りもないのは、今朝もよく見て知つて居る筈だつたのに。

かうして幾日かはすぎた。薔薇のことは忘れられた。さうしてまた幾日かはすぎた。

「やぶちゃん注…佐藤春夫 未定稿『病める薔薇 或は「田園の憂鬱」』（天佑社初版）（その4）」と対照されたい。」

*

*

*

*

*

*

*

*

自然の景物は、夏から秋へ、靜かに變つて行つた。それを、彼ははつきりと見る事が出来た。夜は逸早くも秋になつて居た。嚙蟲だの、蟬「やぶちゃん注…ママ。新潮文庫版では「蟬」。歴史的仮名遣では「こほろぎ」。全集としてはあつてはならないトンデモ誤植と思われる。」だの、秋の先驅であるさまざまの蟲が、或は草原で、或は彼の机の前で、或は彼の牀の下で鳴き初めた。楽しい田園の新秋の豫感が、村人の心を浮き立たせた。村の若者達は娘を捜すために、二里三里を涼しい夜風に吹かれながら、その遅い歩みで歩いた。或る者は、又、村祭の用意に太鼓の稽古をして居た。その單純な鳴りものの一生懸命な響きが、夜更けまで、野面を傳うて彼の窓へ傳はつて來た。この村に歸省してゐた女學生、それはY市の師範學校の生徒で、この村で唯一の女學生は、夏の終りに、彼の妻と友達になつたが、間もなく喜ばしさにその學校のある都會へ彼の妻をとり残して歸つて行つた。

彼の狂暴ないら、立たしい心持は、この家へ移つて來て後は、漸く、彼から去つたやうであつた。さうして秋近くなつた今日では、彼の氣分も自ら平靜であつた。彼は、ちやうど草や木や風や雲のやうに、それほど敏感に、自然の影響を身に感得して居ることを知るのが、一種の愉快で誇りにさへ思はれた。この夜ごろの燈は懐しいものの一つである。それは心身ともに疲れた彼のやうな人人の目には、柔かな床しい光を與へるランプの光であつた。彼はそのランプを、この地方へ來た行商人から二十幾錢かを買つた。その紙で出來た笠は一錢であつた。けれどもそのランプのガラスの壺は、石油を透して琥珀の塊のやうに美しかつた。或る時には、薄い紫になつて、紫水晶のことを思はせた。その燈の下で、彼は、最初、聖フランシスの傳記を愛讀しようとした。けれども彼は直ぐに飽きた。根氣といふものは、彼の體には、今は寸毫も残されては居なかつた。さうしてどの本を読みかけても、一切の書物はどれもこれも、皆、一樣に彼にはつまらなく感じられた。そればかりか、そんな退屈な書物が、世の中で立派に満足されて居るかと思ふと、それが非常に不思議でさへあつた。何か――人間を、彼自身を、すべての物がこの世界とは全く違つたものから出來上つてゐる別世界へ引きずり上げて行くやうな、或はただ彼の目の前へだらし

なく展げられてゐるこの古い古い世界を、全然別箇のものにして見せるやうな、或はそれを全く根柢から覆してめちやめちやにするやうな、それは何でもいい、ただもう非常な、素晴らしい何ものかが、どうかして、何處かにありさうなものだ。彼はしばしば漫然とそんなことを考へて居た。ほんとうに「日の下には新しいものがあることは無い」のか。さうして一般の世間の人たちは、それなら一たい何を生き甲斐にして生きることが出来て居るのであるか？ 彼等は唯彼等自身の、それぞれの愚かさの上に、さましたりげに各の空虚な夢を築き上げて、それが何も無い夢であるといふ事さへも氣づかない程に猛つて生きてゐるだけではなからうか——それは賢人でも馬鹿でも、哲人でも商人でも。人生といふものは、果して生きるだけの値のあるものであらうか。さうして死といふものはまた死ぬだけの値のあるものであらうか。彼は夜毎にそんなことを攷^{かんが}へて居た。さうして、この重苦しい困憊しきつた退屈が、彼の心の奥底に巢喰うて居る以上、その心の持主の目が見るところの世界萬物は、何時でも、一切、何處までも、退屈なものであるのが當然だといふ事——さうしてこの古い古い世界に新しく生きるといふ唯一の方法は、彼自身が彼自身の心境を一轉するより外にはない事を、彼が知り得た時、但、さういふ状態の己自身を、どうして、どんな方法で新鮮なものにすることが出来るか。彼の父の慍つて「やぶちゃん注…「おこつて」。「怒つて」に同じ。」居る手紙のなかの、「大勇猛心」と呼んで居るものはどんなものか。それを何處から齎してどうして彼の心へ植ゑ込むことが出来るか。どうして彼の心に湧立たせることが出来るか。それらの一切は、彼には全然知り得べくもなかった。さうして田舎にも、都會にも、地上には彼を安らかにする樂園はどこにも無い。何も無い。

「ただ萬有の造り主なる神のみ心のままに……」

と、そんなことを言つて見ようか。けれども彼の心は、決して打碎かれて居るのではなかった。ただ萎びて居るだけである……。彼は太鼓のひびきに耳を傾けて、その音の源の周圍をとりかこんで居るであらう元氣のいい若者たちを、羨しく眼前に描き出した。

彼の机の上には、読みもしない、又、讀めもしないやうな書物の頁が、時時彼の目の前に曝されてあつた。彼はその文字をただ無意味に拾つた。彼は、又、時々大きな辭書を持ち出した。そののなかから、成可く珍らしいやうな文字を捜し出すためであつた。言葉と言葉とが集團して一つの有機物になつて居る文章といふものを、彼の疲れた心身は讀むことが出来なくなつて居たけれども、その代りには、一つ一つの言葉に就てはいろいろな空想を喚び起すことが出来た。そのの靈を、所謂言靈^{ことだま}をありありと見るやうにさへ思ふこともあつた。その時、言葉といふものが彼には言ひ知れない不思議なものに思へた。それに深い神的な性質があることを感じた。それらの言葉の一つ一つはそれ自身で既に人間生活の一斷片であつた。それらの言葉の集合はそれ自身で一つの世界ではないか。それらの言葉の一つ一つを、初めて發明し出したそれぞれの人たちのそれぞれの心持が、懷しくも不思議にそののなかに残つて居るのではないか。永遠にさうして日常、すべての人たちに用ゐられるやうな新しい言葉のただ一語をでも創造した時、その人はその言葉のなかで

永遠に、普遍に生きてゐるのではないか。さうだ、さうだ、これをもつと明確に自覺しなけりやあ……。彼はそんなことを極くおぼろげに感じた。さうして或る一つの心持を、仲間の他の者にはつきりと傳へたいといふ人間の不可思議な、靈妙な欲望と作用とに就ても、おぼろに考へ及ぶのであつた。言葉に倦きた時には、彼はその辭書のなかにある細かな挿畫を見ることに依つて、未だ見たことも空想したこともない魚や、獸や、草や、木や、蟲や、魚類や、或は家庭的ないろいろの器具や、武器や、古代から罪人の處刑に用ゐられたさまざまな刑具や、船や、その帆の張り方に就ての種種な工夫や、建築の部分などに就て知ることを喜んだ。それらの器物などの些細な形や、動物や植物などのなかにはさまざまな暗示があつた。就中、人間自身が工夫したさまざまなものの中には言葉の言葉のなかにあるものと全く同じやうに、人類の思想や、生活や、空想などが充ち満ちて居るのを感じた――それは極く斷片的にはあつたけれども。さうして、彼の心の生活はその時ちやうどそれらの斷片を考へるに相應しただけの力しか無いのであつた。

彼は、時々それらの感興の末に、夜更けになつてから、詩のやうなものを書くことがあつた。それはその夜中、彼自身には非常に優秀な詩句であるかのやうに信ぜられた。併し、翌日になつて目を覺してまつ先きにその紙の上を見ると、それは全く無意味な文字が羅列されて居るに過ぎなかつた。それは寧ろ、先づ驚くべきことであつた。――ふと、いい考へが彼のつい身のまはりまで來て居たのであつたのに。さうして、それを捉へようとした時、もうそこには何物も無かつたのである。捉へ得たと思つた時、それはただ空間であつた。ちやうど夢のなかで戀人を抱く人のやうに。そのもどかしさと一緒に、彼はふと自分の名が呼びかけられたと思つて振り返つた時、そこに言葉の主が誰も居なかつた時に似た不安をも、その度毎に味うた。

家の圖面を引くことを、彼は再び初めた。彼は非常に複雑な迷宮のやうな構へを想像することがあつた。さうかと思ふと、コルシカの家がさうであるといふやうに、客間としても臺所としても唯大きな一室より無い家を考へることもあつた。その外形や、間どりや、窓などの部分の意匠のデテイルなどが、殆んど毎夜のやうに、彼のノオートブックの上へ縦横に描き出された。遂には白い頁はもう一枚も無くなり、方一寸ぐらゐの餘白が最も貴重なものとして探し出されて、そこもいろいろに組合された幾多の直線で、ぎつしりと埋められてあつた。その無意味な一つ一つの直線に對して、彼は無限の空想を持つことが出來た。そんな時の彼の心持は、ただ一人で監禁された時には、無心で一途に唐草模様を描き耽るものだといふ狂氣の畫家たちによほどよく似て居た。

かうして、又してもたうとう生氣のない無聊が來た。さうしてそれが幾日もつづいた。

「やぶちゃん注…佐藤春夫 未定稿『病める薔薇 或は「田園の憂鬱」』（天佑社初版）（その5）」と対照されたい。」

* * * * *

或る夜、彼のランプの、紙で出來た笠へ、がさ、と音をたてて飛んで來たものがあつた。

見るとそれは一疋の馬追ひである。その青い、すつきりとした蟲は、その縁を紅くぼかして染め出したランプの笠の上へとまつて、それらの紅と青との對照が先づ彼の目をそれに吸いつけたが、その姿と動作とが、更におもむろに彼の興味を呼んだ。その蟲は、それ自身の體の半分ほどもあるやうな長い觸角を、自分自身の上の方でゆるやかに動かしながら、ランプの圓い笠の紅い場所を、ぐるぐると青く動いて進んで行つた。それは圓く造られた庭園の、側「やぶちゃん注・新潮文庫版では「外側」」に沿うて漫步する人のやうな氣どつた足どりのやうにさへ、彼には思へた。この青い細長い形の優雅な蟲は、そのきやしやな背中の頂のところだけ赤茶けた色をして居た。彼は螢の首すぢの赤いことを初めて知り得て、それを歌つた松尾桃青の心持を感じることが出來た。この蟲は、しばらくその圓いところをぐるぐると歩いた。さうして時時、不意に、壁の長押や、障子の棧や、取り散した書棚や、或は夜更しをしすぎて何時になれば寝るものともきまらない夫を勝手にさせて自分だけ先づ眠つて居る彼の妻の蚊帳の上のどこかなどへ、身輕に飛び渡つては鳴いて見せた。「人間に生れることばかりが、必ずしも幸福ではない」と、草雲雀に就てそんなことを或る詩人が言つた。「今度生れ變る時にはこんな蟲になるのもいい」或る時、彼はそれと同じやうなことを考へながらその蟲を見て居るうちに、ふと、シルクハットの上へ薄羽蜉蝣のとまつて居る小さな世界の場面を空想した。あの透明な大きな翅を背負うた青い小娘の息のやうにふはふはした小さな蟲が、漆黒なびかぴかした多少怪奇な形を具へた帽子の眞角「やぶちゃん注・「まつかく」」なかどの上へ、頼りなげに併しはつきりととまつて、その角の表面をその線に沿うてのろろと這つて行く……。それを明るい電燈が黙つて上から照して居た……。彼は突然、彼の目を上げて光を覗いた。それは電燈ではない。ランプの光である。彼はそのランプの光を自分の空想と混同して、自分も今電燈の下に居るやうに思つたからである。

「やぶちゃん注・「それを歌つた松尾桃青」これは、

晝見れば首筋赤きほたる哉

で、「芭蕉句選」（華雀編・元文四（一七三九）年刊）で「追加」のパートに収録されている。他に「芭蕉翁發句集」・「蕉句後拾遺」・「風羅袖日記」・「芭蕉翁句解参考」・「俳諧一葉集」にも収録されている（「風羅袖日記」では貞享二丑（一六八五）年作とする）が、岩波文庫の中村俊定校注「芭蕉俳句集」（一九七〇年刊）では「存疑の部」に配されており、所持する多くの芭蕉句集でも所収しないので、佐藤春夫には悪いが、この句は芭蕉の句ではないと断じてよい。句としても、「ひねり」も何もなく、駄句以外の何物でもない。」

何故に彼がシルクハットと薄羽蜉蝣といふやうな對照をひよつくり思ひ出したか、それは彼自身でも解らなかつた。唯、さういふ風な、奇妙な、纖細な、無駄なほど微小な形の美の世界が、何となく今の彼の神経には親しみが多かつた。

馬追ひは、毎夜、彼のランプを訪問した。彼は、最初には、この蟲が何のためにランプの光を慕うて來るのか、さてその笠をぐるぐると廻るのか、それらの意味を知らなかつた。併し、見て居るうちに直ぐに解つた。それは決してその蟲の趣味や道樂ではなかつたので

ある。この蟲は、其處へ跳んで来て、その上にたか、つて居るところのもう一層小さい外の蟲どもを食ふためであつたのだ。それらの蟲どもは、夏の自然の端くれを粉にしたとも言ひたいほどの極く微細な、ただ青いだけの蟲であつた。馬追ひは彼の小さな足でもつてそれらの蟲を搔き込むやうに捉へて、それを自分の口のなかへ持つて行つた。馬追ひの口は、何か鋼鐵で出来た精巧な機械にでもありさうな仕掛に、ぱつくりと開いては、直ぐ四方から一度に閉ぢられた。一層小さな蟲どもはもぐもぐと、この強者の行くに任せて食はれた。食はれる蟲は、その食はれるのを見て居ても、別に何の感情をも誘はれないほど小さく、また親しみのないものばかりであつた。指さきでそれを軽く壓へると、それらの小さな蟲は、青茶色の斑點をそこに遺して消え去せてしまふほどである。

馬追ひは、或る夜、どこでどうしたのであるか、長い跳ねる脚の片方を失つて飛んで來た。長い觸角の一本も短く折れてしまつてゐた。

遂には或る夜、彼の制止も聞かなかつた猫が、書棚の上で、彼の主人の夜ごとの友人であるこの不幸な者を捉へた。さんざん弄んだ上で、その馬追ひを食つて仕舞つた。彼は今度生れ變る時にはこんな蟲もいいと思つたことを思ひ出すと、こんな蟲とてもなかなか氣樂ではないかも知れないと小さな蟲の生活を考へて見た。

彼がそんな風な童話めいた空想に耽り、酔ひ、弄んで居る間に、彼の妻は寢牀の下で鳴くこほろぎの聲を沁み沁みと聞きつつ、別の童話に思ひ耽つて居るのであつた。――こほろぎの歌から、冬の衣類の用意を思うて、猫が飛び乗つても搖れるところの、空っぽになつた彼女の簞笥の事を考へ、それから今は手もとにない彼女のいろいろな晴着のことを考へた。さうしてそれ等の着物の縞や模様や色合ひなどが、一つ一つ仔細に瞭然「やぶちやん注・新潮文庫版では「はつきり」とルビする。」と思ひ浮ばれた。又それにつれてそれ等の一かさね一かさねが持つて居る各の歴史を追想した。深い吐息がそれ等の考へのなかに雜り、さてはそれが涙ともなつた。彼の女は、女特有の身勝手な主觀によつて、彼の女の玩具の人生苦を人生最大の受難にして考へることが出来た。さうして其悲嘆は、而も訴ふところがなかつた。これ等のことを今更に告げて見たところで、それをどうしようとも思はぬらしく「何ものも無きに似たれどもすべてのものを持てり」といふやうな句をただ聞かせるだけで、一人勝手に生きて居る夫、象牙の塔で夢みながら、見えない人生を俯瞰した積りで生きて居る夫、その夫を妻が頼み少く思ふことは是非ない事である。彼の女は、時々こんな山里へ來るやうになつた自分を、その短い過去を、運命を、夢のやうに思ひ廻しても見た。さて、今でもまだ舞臺生活をして居る彼の女の技藝上の競争者達を、(彼の女はもと女優であつた)今の自分にひきくらべて華やかに想望することもあつた。……Nといふ山の中の小さな停車場まで二里、馬車のあるところまで一里半、その何れに依つても、それから再び鐵道院の電車を一時間、眞直ぐの里程にすれば六七里でも、その東京までは半日がかりだ……それにしても、どんな大理想があるかは知らないが、こんな田舎へ住むと言ひ出した夫を、又それをうかうかと賛成した彼の女自身を、わけても前者を彼の女は最も非難せずには居られなかつた。遠い東京……近い東京……近い東京……

…遠い東京…その東京の街街が、アアクライトや、ショウキインドウや、おひおひとシイズンになつてくる劇場の廊下や、樂屋や、それらが眠らうとして居る彼の女の目をゆつくり通り過ぎた。

「やぶちゃん注…佐藤春夫 未定稿『病める薔薇 或は「田園の憂鬱」』（天佑社初版）（その6）」と対照されたい。」

* * * *

空の夕焼が毎日つづいた。けれどもそれはつい二三週間前までのやうな灼け爛れた眞赤な空ではなかつた。底には快く快活な黄色を匿してうはべだけが紅であつた。明日の暑さで威嚇する夕焼ではなく、明日の快晴を約束する夕映であつた。西北の空にあたつて、ごく近くの或る丘の凹みの間から、富士山がその眞白な頭だけを現して、夕映のなかでくつきり光つて居た。俗惡なまで有名なこの山は、ただそのごく小部分しか見えないといふことに依つて、その本来の美を保ち得て居た。この間うちまでは重り合つた夕雲のかげになつて、それらの雲の一部か或は山かと怪しまれた西方の地平に連る灰黒色な一列は、今見れば、何處か遠くの連山であることが確かになつた。今日も亦無駄に費したといふ平凡な悔恨が、毎日この夕映を仰ぐ度ごとに、彼にははげしく瞬間的に湧き上るのであつた。多分、色彩といふものが誘ふ感激が、彼の病的になつてゐる心をさういふ風に刺戟したのであらう。地の上の足もとを見ると、彼の足場である土橋の下を、渠の水が夕映の空を反映して太い朱線になつて光り、流れて居た。

田の面には、風が自分の姿を、そこに渚のやうな曲線で描き出しながら、ゆるやかに蠕動して進んで居た。それは涼しい夕風であつた。稻田はまだ黄ばむといふほどではなかつたけれども、花は既に實になつて居た。さうして蝗がそれらの少しうな垂れた穂の間で、少しづつ生れ初めて居た。蛇莓といふ赤い丸い草の實のころがつて居る田の畦には、彼の足もとから蝗が時折飛び跳ねた。すると彼の散歩の供をして居る二疋の犬は、より早くそれを見出すや否や、彼等の前足でそれを押し壓へると、其處に半死半生で横はつて居る蝗を甘さう「やぶちゃん注…「うまさう」」に食つてしまつた。彼等の一疋はそれを見出す點で、他の一疋よりも敏捷であつた。併し、前足を用ゐて捉へる段になると、別の一疋の方が反つて機敏であつた。又一疋の方はとり逃がした奴を直ぐあきらめるらしかつたけれども、他の一疋はなかなか執拗に稻田のなかまで足を泥にふみ込んで追ひ込む。彼等にもよく觀れば各違つた性質を具へて居るのが彼を面白がらせ、且つ一層彼等を愛させた。稲の穂がだんだん頭を垂れてゆくにつれて、蝗の数は一時に非常に殖えて居た。犬は自分からさきに立つて彼を導くやうにしながら田の方へ毎日彼を誘ひ出した。彼は目の前の蝗を見ると、時々、それを捉へて犬どもに食はせてやりたくなつた。それで指を擴げた手で、その蟲をおさへやう「やぶちゃん注…ママ。」とした。犬どもは彼等の主人がその身構へをすると主人の意志がわかるやうになつたと見えて、自分の捉へかかつて居るのを途中でやめて、主人の手つきを目で追うて、主人の獲物が與へられるのを待つて居るのであつた。

けれども彼は大てい五度に一度ぐらゐよりそれを捉へることが出来なかつた。ただ搖ぎとれた足だけを握つて居たりした。彼は蝗を捉へるには、それに巧でない方の犬にくらべてもずつと下手であつた。それにも拘はらず、犬どもはそんな事にまで主人の優越を信じて、主人を信頼して居るらしかつた。さうして、彼が蟲をとり逃がした空しい手をひらいて見せると、犬どもは訝しげに、主人の手の中と主人の顔とをかはるがはる見くらべて、彼等は一様にその頭をかしげ、それから彼等の口の端を少し曲めて、その可憐に輝く眼で彼の顔を見上げた。それがさも主人のその失敗に驚き失望しながら、けれども何故ともなく主人に媚びて居る様であつた。彼等犬には、實に豊かな表情があつた！ 彼等は幾度もその徒らな期待の經驗をしながらも、矢張り自分達よりも主人の方が蟲を捉へるにでも偉い筈だといふ信念を、決して失はないらしかつた。彼の蝗を捉へようとする身構へと手つきとを見る毎に、彼等は彼等自身が既に成功して居るも同然な蟲を放擲して、主人の手つきを見つめたまま、何時までもその恵みを待ちうけて居るのであつた。彼は空しくひろげた掌で、失望して居る犬どもの頭を愛撫して居た。犬はそれにでも満足して尾を振つた。彼には、それが――犬どもの無智な信頼が、またそれに報ゆることの出来ない事が、妙に切なかつた。彼が人間同士の幾多の信頼に反いて居ることよりも、この純一な自分の歸依者に對しての申譯なさは、彼には寧ろ數層倍も以上に感じられた。彼は、彼等のあの特有な澄み切つた眼つきで見上げられるのが切なさに、遂には、目の前の蟲を捉へようとする一種反射運動的な動作を試みないやうに、細心に努力するのであつた。

何時か、彼自身で手入れをしてやつた日かげの薔薇の木は、それに覆ひかぶさつて居た木木の枝葉を彼が刈り去つて、その上には日の光が浴びられるやうになつた後、一週間ばかり経つと、今では日かげの薔薇ではないその枝には、初めて、ほの紅い芽がところどころに見え出した。さうして更に、その兩三日の後には、太陽の驚くべき力が、早くもその芽を若若しい葉に仕立てて居た。併し、彼は顔を洗ふために井戸端へは毎朝來ながら何時しか、それらの薔薇の木のことは忘れるともなくもう全く忘れ果てて居た。

圖らずも、ある朝――それは彼がその手入れをしてやつてから二十日足らずの後である。彼は偶然、それ等の木の或る綠鮮やかな莖の新らしい枝の上に花が咲いて居るのを見出した。赤く、高く、ただ一つ。「永い永い牢獄のなかでのやうな一年の後に、今やつとまた五月が來たのであらうか！」その枯れかかつて居た木の季節外れな花は、歡喜の深い吐息を吐き出しながら、さう言ひたげに、今四邊を見まはして居るのであつた。秋近い日の光はそれに向つて注集して居た。おお、薔薇の花、彼自身の花。「薔薇ならば花開かん」彼は思はず再び、その手入れをした日の心持が激しく思ひ出された。彼は高く手を延べてその枝を捉へた。そこには嬰兒の爪ほど色あざやかな石竹色の軟かい刺があつて、軽く枝を捉へた彼の手を軽く刺した。それは、甘える愛猫が彼の指を優しく噛む時ほどの痒さを感じさせた。彼は枝をたわめてそれを己の身近くひき寄せた。その唯一つの花は、嗟！ちやうどアネモネの花ほど大きかつた。さうしてその八重の花びらは山櫻のそれよりもつと小さかつた。それは庭前の花といふよりも、寧ろ路傍の花の如くであつた。而もそ

の小さな、哀れな、畸形の花が、少年の脣よりも赤く、さうしてやはり薔薇特有の可憐な風情と氣品とを具へ、鼻を近づけるとそれが香さへ帯びて居るのを知つた時彼は言ひ知れぬ感に打たれた。悲しみにも似、喜びにも似て何れとも分ち難い感情が、切なく彼にこみ上げたのである。それは恰も、あの主人に信賴しきつて居る無智な犬の澄みきつた眼でちつと見上げられた時の氣持に似て、もつともつと激しかつた。譬へば、それはふとした好奇な出來心から親切を盡してやつて、今は既に全く忘れて居た小娘に、後に偶然にめぐり逢うて「わたしはあの時このかた、あなたの事ばかりを思ひつめて來ました」とでも言はれたやうな心持であつた。彼は一種不可思議な感激に身ふるひさえ「やぶちゃん注…ママ。」出て、思はず目をしばたたくと、目の前の赤い小さな薔薇は急にぼやけて、双の眼がしらからは、涙がわれ知らず滲み出て居た。

涙が出てしまふと感激は直ぐ過ぎ去つた。併し、彼はまだ花の枝を手にしたまま呆然と立ちつくした。頬は涙が乾いて硬ばつて居た。彼はぢつと自分の心の方へ自分の目を向けた。さうして心のなかでいくつかの自分同士がする會話を、人ごとのやうに聞いて居た――

「馬鹿な、俺はいい氣持に詩人のやうに泣けて居る。花にか？ 自分の空想にか？」

「ふふ。若い御隠居がこんな田舎で人間性に饑えて御座る？」

「これあ、俺はひどいヒポコンデリヤだわい」

「やぶちゃん注…佐藤春夫 未定稿『病める薔薇 或は「田園の憂鬱」』（天佑社初版）（その7）」と対照されたい。」

*

*

*

*

*

*

*

或る夜、庭の樹立がざわめいて、見ると、靜かな雨が野面を、丘を、樹を灰白く煙らせて、それらの上にふりそそいで居た。しつとりと降りそそぐ初秋の雨は、草屋根の下では、その聲音も雫も聞えなかつた。ただ家のなかの空氣をしめやかに、ランプの光をこまやかなものにした。さうして、それ等のなかにつつまれて端坐した彼に、或る微かな心持、旅愁のやうな心持を抱かせた。「やぶちゃん注…ここ（右ページ最下段終行）は一字分が空いて改ページで、しかし、次のページの頭の行は字下げがない。これは改行と判断せず繋げた。」さうして、その秋の雨自らも、遠くへ行く淋しい旅人のやうに、この村の上を通り過ぎて行くのであつた。彼は夜の雨戸をくりながらその白い雨の後姿を見入つた。

そんな雨が二度三度と村を通り過ぎると、夕方の風を寒がつて、猫は彼の主人にすり寄つた。身のまはりには單衣ものより持ち合せて居ない彼も震へた。

或る夕方から降りだした雨は、一晩明けても、二日経つても、三日経つても、なかなかやまなかつた。初めの内こそ、それらの雨に或る心持を寄せて楽しんで居た彼も、もうこの陰氣な天候には飽き飽きした。それでも雨は未だやまない。

犬の體には蚤がわいた。二匹の犬はいぢらしくも、互に、相手の背や尾のさきなどの蚤をとり合つて居た。彼は彼等のこの動作を優しい心情をもつてながめた。併し、それ等の

犬の蚤が何時の間にか、彼にもうつつた。さうして毎晩蚤に苦しめられ出した。蚤は彼の體中をのそのそと無數の細い線になつて這ひまはつた。

それに運動の不足のために、暫く忘れて居た慢性の胃病が、彼を先づ體から陰鬱にした。それがやがて心を陰鬱にした。毎日毎日の全く同じ食卓が、彼の食欲を不振にした。その毎日同一の食物が彼の血液を腐らせさうにして居ると、感じないでは居られなかつた。犬でさへもうそれには飽きて居た。ちよつと鼻のさきを彼等の皿の上に押しつけただけで、彼等さへ再び見向きもしなかつた。けれどもこれに就て、彼は彼の妻には何も言ふべきではなかつた。この村にある食ひ物とは、これきりだからである。

彼の單衣ひとものはへなへなにしとつて體にまはりつき、彼の足のうらは脂汗のためにねちちして、坐つて居る時にはその足の汗と變な温かさとが彼の尻に傳うて來て、蚤は好んでそこに集つて居た。頭の毛のなかにも蚤が居るやうな氣がした。それを梳かうとすると、冷りとしとつた生えるがままの毛髪は、堅く櫛に絡んで、櫛は折れてしまつた。その蚤の巢のやうに感じられる體を洗つて、さつぱりするため、風呂に入りたいと思つても、彼の家には風呂桶はなかつた。近所の農家では、天氣の日には毎日風呂を沸かしたけれども、野良仕事をしないこの頃の雨の日には、わざわざ水を汲んだりしてまで、風呂へ入る必要はないと、彼等は言つて居た。さうして農家では、朝から何にもせずに、何にも食はずに寝て居るといふ家族もあつた。

猫は、毎日毎日外へ出て歩いて、濡れた體と泥だらけの足とで家中を横行した。そればかりか、この猫は或る日、蛙を啗へて家のなかへ運び込んでからは、寒さで動作ののろくなつて居る蛙を、毎日毎日、幾つも幾つも啗へて來た。妻はおほぎやうに叫び立てて逃げまはつた。いかに叱つても、猫はそれを運ぶことをやめなかつた。妻も叫び立てることをやめなかつた。生白い腹を見せて、蛙は座敷のなかで、よく死んで居た。猫は家のなかを荒野と同じやうに考へてゐる。さうして家のなかは荒野と全く同じであつた。

或る日。彼の二疋の犬は、隣家の鶏を捕へて食つて居るところを、その家の作代さくだいに見つかつて、散散打たれて歸つて來た。その隣家へ、彼の妻がその詫びに行つたところが、圓滑な言葉といふものを學ばなかつた田舎大盡の老細君は、案外な不機嫌であつた。犬は以後一切繋いで置いて貰ひたい。運動させなければならぬならば、どうせ遊んで居られる方ばかりだから自分達で連れて歩けばいい。庭のなかへ這入つては糞をしちらかす。田や畑は荒す。夜は吠えてやかましい。そのため子供が目をさます。その上について一週間ほど前から卵を産み始めたばかりのいい鶏などを食はれてたまるものではない。まるで狼のやうな犬だ。若し以後、庭のなかへ這入るやうな事があつたならば、遠慮はして居られないから打ちのめす、うちには外にも澤山の鶏があるのだから。と何か別の事でも非常に激昂して居るらしい心を、彼の犬の方へうつして、ヒステリカルな聲で散散に吐鳴り立てた。その聲が自分の家のなかで坐つて居る彼の耳にまで聞えて來た。この中老の婦人はこの犬どもの主人が、他の村人のやうに彼の女に對して尊敬を拂はぬといつて、兼兼非常に不愉快に思つて居たからであつた。最も奇妙なことには、彼の女は彼等夫婦が何も野良仕事を

て行つて、どう縛れて居るか解らない鎖を直してやらうとする。犬どもは喜んで泥だらけの足を彼の胸のあたりへ押しつける。犬どもがぢつとして居ないために、鎖は更に複雑に縛れ合つて行く。苛立たしくもどうしても解けない。たうとう犬は悲鳴をあげる。一度追はれた鶏は、その間に再び平氣で縁側へさへ上つて来て、そこへ汚水のやうな糞をしたりした。手を擴げて追ふと、彼等はさも業業しく「やぶちゃん注…ママ。「仰仰しく」の佐藤がしばしば使う誤字。」叫び立てた。彼等はちやうど、あの意地わるの女主人に言附かつて、彼を押搦するために來たかとさへ思はれた。その女主人は、牆根の向うからそれらの光景を見て居ながら、わざと氣のつかぬふりをして居る。彼の妻はそれを見ると、何かあてつけらしく鶏を罵りさうにするのを彼は制止した。彼はそんな事をしては悪いと思つて居るよりも、臆病と卑屈とから、それすらも出來ないのであつた。さうして内心は妻より以上に憤慨して居るのである。別の隣家の小汚い女の子が二人、別に嬰兒「やぶちゃん注…新潮文庫版では「あかご」とルビする。」まで負うて、雨で遊び場がないので、猫よりもつと汚い足と着物とで彼の家へ押込んで來た。背中の嬰兒が泣く。さうして三人ともそれぞれに何を見ても欲しがる。お桑といふ名の十三になるといふ一番上の兒は、もうすでに女特有の性質を發揮して、彼の妻を相手に、隣の大盡の家の惡口やら、いろいろの世間話を口やかましく聞かせて居た。それ等の兒は時時彼等が風呂を貰つて這入る家の子なので、その子を追ひ立てることは出來にくいと妻は言つた。その實、彼の妻はそんな子供をでも話相手に欲しかつたのである。それでも、さすが彼の妻もうるさいと思ふ時もあると見える。「もううちへお歸り」といふと、その子供は口口に「いやだあ、うちでは皆眠てゐるだ、戸たてて。まつ暗だもの。下のうちで遊んで來うと言つたべしと言ふのであつた。「下のうち」といふのは彼の家を指すのである。犬や猫ばかりでない、確にこの子供達が一層澤山に蚤を負うて來るに違ひない、と彼は考へた。彼はいらいらしながらも、よその人とさへ言へばこんな子供にまで小さくなつて、小言一つ言へない性質であつた。さうしてそんなことには無神經なほど無頓着な彼の妻が、その子供たちに雨降りのなかを、お豆腐を買つて來いの、お砂糖がなくなつたのと言つては、あまりしげしげ用事に使ふのを見ると、彼は反つてはらはらして、妻を叱り飛ばした。

その子供達の家へ風呂を貰ひに行くと、七十位の盲目で耳の遠い老婆が、風呂釜の下を燃してくれながら、いろいろと東京の話を書きたがつた。東京の話ではない江戸の話である。この老婆は「煙のやうな昔」（とそのツルゲニエフのやうな言葉をその老婆自身が言つた）娘のころに、江戸の某様の御屋敷で御奉公したとかで、御維新の騒ぎで殿様が甲府の町奉行になるところが駄目になつた話やら、その年は實に悪い年で山王様の御祭が満足に出來なかつたことやらを、とぎれとぎれに語り出して、さてまだ眼の見えた昔に見た江戸の質問を彼にするのであつた。維新で田舎へ歸つたと言ひながら、その維新とはどんなものであるかは知らないのであつた。「その時にはどんな世の中に變ることかと思つたのに、昔とちつとも代りはしない。こんなことなら、何もあんな大騒ぎすることもなかつたのに……」とそんなことを呟いた。さうして電車が通つて居たり、公園があつたりする東

京といふものの概念は何一つ持つて居なかつた。彼には答へる術もないその江戸の質問を、くどくどと尋ねるのであつた。さて彼が「江戸」の事は不案内だと氣がつくと、彼の女の娘時代のその家の全盛、今の主人である息子の馬鹿さ、身上も持てないくせにけちんぼうで御近所へのつき合ひもろくに出来ないこと、それから思ひ出して子供が毎度遊びに行つて御邪魔するといふやうなこと、あなたの商賣は何だといふ質問、實に平凡なことどもを長長と聞かせて、それに對してそれと同等に長長しい返答を要求するのであつた。それでもなくてさへ口不調法な彼には、返事の仕方が解らなかつた。それにこの老婆は答へても何も聞えぬだらうほど耳が遠かつた。「俺にはそんな話は面白くないのだ！　ひとのことなどはどうでもいいのだ！」彼はさう叫んでやりたくなつた。この老婆のくどい話は結局、何のことであるかは解らなかつたけれども、彼の氣持をじめじめさせるには、何しろ十分すぎた。しかもその相手になつてくれと懇願する表情（それは半ばは死んで居て、犬のそのの半分も豊かではない）をもつて、この老婆は五十六の時に全く失明したと、今のさつきも物語つたその兩眼で、彼を見上げた。見つめた。風呂釜の火が一しきりゆらゆらと燃え上つて、ふと、この腰の全く曲つて居る老婆を照すと、片手に長い薪を持つた老婆は、廣い農家の大きな物置場の暗闇の背景からくつきり浮き上つて、何か呪を呟く妖婆のやうにも見えた。

その風呂場を脱れ出てくると、さすがに夜風がさわやかに、彼の湯上りの肌を撫でた。併し家へ歸つて見ると、彼の妻はホヤのすすけた吊りランプの影で、里の母からでも來たらしい手紙を読んで居たが、彼には見せたくないらしく、遽にそれを長長と巻き納めると、不興極まる顔をして、その吐息を彼に吹きかけでもするかやうに彼をまともに見上げて、涙で光らせた瞳で彼を見上げた。それは何か威嚇するやうにも見え、哀願するやうにも見えた。その手紙を、彼は讀まずとも知つてゐる。彼にはつまらぬ事であつて、彼の女達には重大な何事かであらう。彼の女等は互に彼の女等の苦しい困窮を訴へ合つて居るのであらう……彼の家には、もう一人泣きに來る女があつた。それはお絹といふ名の四十近い女であつた。彼等がこの家へ引越して來る時に、この家へ案内し、引越しの手傳ひをしたあの女である。その因縁で、その後、彼の家庭へ時々出入りするやうになつた女である。彼の女は身の上ばなしを初めてはよく泣いた。お絹はいろいろな生涯を経てこの村へ流れて來た女であつた。最初にたつた一度、もの珍らしさからついこの女の身の上咄に耳を傾けたのが原因で、お絹はその後いつも一つの話を繰り返した。彼はしまひにはお絹の顔を見ると腹立たしくなつた。もつとも不思議なことには、彼はお絹の顔さへ見れば胃のあたりが鈍痛し初めるのであつた……

床の下では、犬が蚤にせめ立てられて、それを追ふために身を揺すぶると、その度にゆれる鎖の音が、がちやがちやと彼に聞えて來た。彼はお絹の身の上ばなしよりも、蚤に惱まされて居る犬の方に、より多くの同情を持つた。さうして彼は自分自身の背中にも、脇腹にも、襟にも、頭の毛のなかにも、蚤が無數にうごめき出すのを感じた……

せめては早く雨だけでも晴れてくれないものかと、彼は毎日夕方になると空を見上げた。

彼は何故か夕方に空を見上げた。さうして星でも出ては居ないかと、空を見まはした。星どころか、野面は白く煙つて、空はただ無限に重かつた。

些細な單調な出來事のコンビネエションや、パアミテエションが、毎日單調に繰り返された。それらがひと度彼の體や心の具合に結びつくと、それは悉く憂鬱な厭世的なものに化つた「やぶちゃん注…「かはつた」」。雨は何時までも降りやまない、それは今日でもう幾日になるか、五日であるか、十日であるか、二週間であるか、それとも一週間であるか、彼はそれを知らない。唯もうどの日も、どの日も、區別の無い、單調な、重苦しい、長しい幾日かであつた。牢獄のなかで人はかういふ幾日かを送るであらうか？ おお！然うだ。日蔭になつて、五月になつても、八月の半頃になつても青い葉一枚とはなく、ただ莖ばかりが蔓草のやうに徒らによろめいて延びて居た、この家の井戸端のあの薔薇の木的生活だ。彼は再び薔薇のことを考へた。考へたばかりではない。あの日かげの薔薇の憂悶を今は生活そのものをもつて考へるのである、こんな日毎の机の前に坐り込んだまま。薔薇といへば、その薔薇は、何時かあの涙ぐましい――事實、彼に涙を流させた畸形な花を一つ咲かせてから、日ましによい花を咲かせて、咲き誇らせて居たのに、花はまたこの頃の長い長い雨に、花片はことごとく紙片のやうによれよれになつて、濡れに濡れて碎けて居た。碎けて咲いた。

「やぶちゃん注…『佐藤春夫 未定稿『病める薔薇 或は「田園の憂鬱」』（天佑社初版版）（その8）』と対照されたい。」

* * * * *

こんな日頃に、ただ深夜ばかりが、彼に慰安と落着きとを與へた。鶏の居ない夜だけ、鎖から放して置くことにした犬が、今ごろ、田の畔をでも元氣よく跳びまはつて居るかと思像することが、寢牀のなかで彼をのびのびした氣持にした。

併し或る夜であつた。家の外から彼の家を喚ぶものがあつた。未だ机の前に坐りこんで、考へに壓へつけられて居た彼は、縁側の戸を開けて見ると、一人の黒い男が、生垣と渠との向うの道の上に立つて居た。さうしてその何者かが彼に向つて、横柄に呼びかけた。巡查かも知れない、と彼は思つた。

「これやあ君の家の犬だらう」

「さうだ。何故だい」

「これやあ、怖くつて通れんわい」

その村位、犬を恐怖する村は、先づ世界中にないと、彼は思つた。この附近には、狂犬が非常に多いからだとか村の一人が説明して居た。それに彼の犬の一疋は純粹の日本犬であつた。

「大丈夫だよ。形は怖いが、おとなしい犬だから」

「何が大丈夫だい。怖くつて通れもしない」

「狂犬ぢやないよ。吠えもしないぢやないか」

「飼つて居る者はさうでも、飼はんものにはおつかない。ちよつと出て来て、繋いだらどうだい」

この何者かの非常に横柄な口調は、其奴が闇で覆面して居るからだと思ふと、彼は非常に憤ろしかつた。彼はいきなり其處にあつた杖をとると、傘もささずに道の方へ飛び出した。雨は糠ほどより降つて居ない。その知らない男は、何かまだぐづぐづ言つて居た。さうしてどうしてもこの犬を繋げ、それでなければ俺は通れぬ、と言ひ張つた。可笑しいほど犬を恐れ乍ら、可笑しいほど一人で威張つて居た。「これは優しい犬だ、未だ子供だから人懐しがつて通る人の傍へ行くのだ」と彼は犬のために辯護した。彼にとつては、今、犬は無辜の民である。その男は暴君である。彼自身は義民であつた。その男の言ふことが一一理不盡に思へた彼は、果は大聲でその男を罵つた。彼の妻は何事かと縁側へ出て來たが、この様子を見ると彼の女は、暗のなかの通行人に向つて頻りに詫びて居た。彼にはそれが又腹立たしかつた。

「黙つて居ろ。卑屈な奴だ、謝る事はない。犬が悪いのぢやないぞ。この男が臆病なんだ。子供や泥棒ぢやあるまいし……」

「何、泥棒だと」

「お前が泥棒だと言やしないよ。音無しく尾を振つて居る犬をそんなに怖がる奴は泥棒見たいだと言つただけだ」

彼は、しまひには、その男を殴りつけるつもりであつた。彼等は五六間を距てて口争ひして居た。其處へ、見知らない男の後から一つの提灯が來た。それがその男に向つて何か言つて居たが、提灯は彼の方へ近づいて來た。奴等は棒組だな、と彼は即座にさう思つた。若し傍へ來て何か言つたら、と彼は杖をとり直して身構へした。

「どうぞ堪忍してやつて下さいましよ。親爺やお酒をくらつて居るんです」

その提灯の男は、反つて彼に謝つて居たのだ。彼は相手が酔つぱらひであつたと知れると、急に自分が馬鹿げて來た。併し、彼は笑へもしなかつた。その時或る説明しがたい心持で、身構へて把つて居た自分の杖をふり上げると、自分の前で何事も知らずに尾を振つてゐる自分の犬を、彼は強かに「やぶちゃん注……したたかに。」打ち下した。犬は不意を打たれて、けん、けん、と叫びながら家のなかへ逃げ込む。打たれない犬もつづいて逃込む。彼は呆然とそこに立つて居たが、舌打をして、その杖を渠のなかへたたきつけると、すたすたと家へ這入つて行つた。犬は二疋とも床下深く身を匿して居た。さうして庭に這入つて來た彼を見た時、彼等は細い悲しい聲を上げて、彼等の訴へを吠えた。杖を捨てても未だ握つて居た彼の掌は、ねちこちと汗ばんで居た。

「今に見ろ。村の者を集めてあの犬を打殺してやらあ！」酔つぱらひはそんな事を言ひながら、提灯をもつた若い男に連れられて通り去つた。

酔つぱらひのその捨白が、その晩から、彼には非常な心配の種になつた。村の者が、實際、彼の犬を打殺しはしないかと考へられ出すと、身の上話で泣いて居たあの太つちよの女が、いつか彼に告げた言葉も思ひ出された――「この村では冬になると犬を殺して食ひ

ますよ。御用心なさい、御宅のは若くつて太つて居るから丁度いいなんて、冗談でせうがそんな事をいつて居ましたよ」

捨てて仕舞つた杖は、思へば思ふほど、彼には非常に惜しいものであつた。それは唐草模様の花の彫刻をした銀の握のある杖であつた。別段それほど惜しむに足りるものではないのに、それが彼には不思議なほど惜しまれた。その翌日は、彼は犬を運動させるやうなふりをして、その杖を捜す爲めに、渠の流れに沿うた道を十町以上も下つて見た。あの清らかであつた渠の水は、毎日の雨で徒らに濁り立つて居た。杖は何處にも見出されなかつた。彼はあんな風にして杖を無くした事を、妻には内所にして居るのであつた。全く羞づかしい事だつたので。

杖と酔漢の捨白とが、彼自身でさへ時時は可笑しいばかり氣にかかる。一層、あの時あの男を撲りつけてやればよかつたに――彼は寢床のなかで、口惜しくてならない時もあつた……若しや犬がいぢめられて居はしないかと、それを夜中放して置くことが苦勞になり出した。氣を苛立てながら聞耳をそば立てると、犬の悲鳴がする。大急ぎで縁側へ出て戸を開けながら口笛を吹くと、犬は直ぐ何處から歸つて来る。さうして鳴いて居るのは外の犬であつた。併し、口笛を吹いても名を呼んでも容易に歸つて来ない事がある。さうして一層けたたましく吠えつづける。そんな時には居ても立つても居られない。彼の妻は、あれはうちの犬ではないとか、犬は別に何處でも鳴いては居ないとか言つて、初めは彼を相手にはしなかつたけれども、彼があまりやかましくいふので、この妄想は、何時しか妻の方にまで感染した。彼等は呪はれてゐる者のやうに戰戰兢兢として居た。その上に、ランプの焰がどうした具合か、毎夜、ぼつぽつと小止みなく「やぶちゃん注…新潮文庫版を参考に歴史的仮名遣で示すならば、「をやみなく」」揺れて、どこをどう直して見ても直らなかつた。彼は自分の不安な心を見るやうにランプの揺れる芯を凝視して、疳を苛立てて居た。或る夜、ただ事でない犬の鳴聲がするので、庭に出て見ると、レオはさも急を告げるらしい様子で彼を見て吠え立てる。遠くの方ではフラテ？の悲鳴が切なく聞えて来る。彼はレオの後に従ひながら、悲鳴をたよりに、フラテ！ フラテ！ と叫びながら、その居所を捜し求めるのであつた。やがて歸つて来たフラテを見ると、顔の半面と體とが泥だらけであつた。フラテは泥の上にすりつけられて折檻されて居たのであらう。何處からか凱歌のやうに人の笑聲が聞えて来る……。その夜以來、犬は夜中のただ一二時間だけ放して置いてから、又再び繋ぐことにした。且又、その鎖の場所を玄關の土間のなかへ變へた――素通りの出来る庭の隅では、たとひ繋いで置いても不用心だからである。しかし繋がれるために呼ばれるのだと知ると犬は呼んでもなかなか歸つて来なかつた。歸つて来ても、主人たちの顔つきを見ながら、庭の中を逃げ廻つてなかなか捉へられなかつた。そこで食物を與へて釣つて見ても鎖の傍へならば寄りつかなかつた。闘犬の子で逞しい足と、太い牙とを持つてゐるフラテは、或る夜自分の鎖を眞中から食切つて、四邊の壁から脱けるためには床下の土に大きな穴を開け、大きな體をそこからもぐり出すと、鎖の半分は頸にぶらさげて泥濘の地上にそれを曳きながら、夜中楽しく遊びまはつて居た。それを主人

に知らせるために、さうして自分も解放されたいために、レオは激しく鳴き叫んだ。

彼は、犬に對する夜中の心配を晝間に考へ直すことがあつたが、これはどうも一種の強迫觀念だと氣づかずには居られなかつた。犬だつて自分の力で自分を保護することは知つて居るだらう……。さうして、たわいもない犬のことなどをばかり考へて居る自分が、恥しくも情けなかつた。けれども夜になると、やはり「俺の犬は盜まれる。殺される！ きつとだ！」今では、犬は彼にとつてはただ犬ではなかつた——何か或る象徴であつた。愛するといふ事は實にそれで苦しむといふ事であつた。杖のこともなかなか忘れられなかつた。犬の心配のない時には、銀金具の握のある杖が、その金具の重みのために頭の方だけ少し沈みながら、濁つた渠のなかを、流れのまにまに浮いたり沈んだりして、何處かを、さうして涯しのない遠い何處かへ持つて行かれるために流れて行くところを、彼は屢寢床のなかで空想して居た。

「やぶちゃん注…佐藤春夫 未定稿『病める薔薇 或は「田園の憂鬱」』（天佑社初版版）（その9）」と対照されたい。」

* * * *

雨は、一日小降りになつたかと思ふと、その次の日には前よりも一層ひどく降る。さて、その次の日にはまた小降りになる。併し、その次の次の日にはまた降りしきる……。この間歇的な雨は何時までも降る……。幾日でも、幾日でも降る……。彼の心身を腐らせようとして降る……。世界そのものを腐らせようとして降る……。

何もかも腐れ……、

腐るなら腐れ……、

勝手に腐れ……、

腐れ腐れ……、

お前の頭が……、

まつさきに腐れ……、

……、

……、

……、

……、

……、

……、

聲のないコーラスは家の外から、四方から來て、彼の家のなか一ぱいにうすら寒く、うす暗く漂うて、見てみると雨の脚はさういふリズムで降る。北の窓の方を見ても、南の窓の方を見ても、その物憂いリズムの無限の度數を繰り返し、繰り返して降る……。何日になつたならば止まうといふ希望なしで降る……。

「やぶちゃん注…佐藤春夫 未定稿『病める薔薇 或は「田園の憂鬱」』（天佑社初版版）

（その10）」と対照されたい。

なお、本作のロケーションは未定稿の電子化冒頭で述べた通り、旧神奈川県都筑郡中里村字鐵あきくろがね（現在の神奈川県横浜市青葉区鉄町。ここ（グーグル・マップ・データ））であるが、現在は、南東の一部は丘陵が残るものの、ここで主たるロケーションとなっていると推定される（富士山の方角から）南西方向の丘陵はテツテ的な宅地化で平地にされてしまっており、見る影は微塵もない。信じられない方は、「今昔マップ」の戦前のまさに当時の地図を見られたい。この中央附近が、当時の佐藤が借りた家のあった場所と推定される（根拠は「AOBA DIGITAL ART MUSEUM」の「田園の憂鬱由縁の地」碑」に拠った。調べてみるに、この碑は個人の敷地内にあるようである）。」

* * * *

ここに一つの丘があつた。

彼の家の縁側から見るとき、庭の松の枝と櫻の枝とは互に両方から突き出して交り合つて、そこに穹窿形の空間が出来て、その樹と樹との枝と葉とが形作るアアチ形の曲線は、生垣の頭の真直ぐな直線で下から受け支へられて居た。言はばそれらが緑の枠をつくつて居た。額縁であつた。さうしてその額縁の空間のずっと底から、その丘は、程遠くの方に見えるのであつた。

彼は、何時初めてこの丘を見出したのであらう？ とにかく、この丘が彼の目をひいた。さうして彼はこの丘を非常に好きになつて居た。長い陰氣なこのごろの雨の日の毎日毎日に、彼の沈んだ心の窗「やぶちゃん注…「窓」の異体字。」である彼の瞳を、人生の憂悶からそむけて外側の方へ向ける度毎に、彼の瞳に映つて来るのはその丘であつた。

その丘は、わけても、彼の庭の樹樹の枝と葉とが形作つたあの穹窿形の額縁を通して見る時に、自づと一つの別天地のやうな趣があつた。ちやうどいくらみに程遠くで、さうして現實よりは夢幻的で、夢幻よりは現実的で、その上雨の濃淡によつて、或る時にはそれが彼の方へ稍近づいて、或る時にはずつと遠退いて感じられた。或る時には擦ガラスを透して見るやうにほのかであつた。

その丘はどこか女の脇腹の感じに似て居た。のんびりとした感情を持つてうねつてゐる優雅な、思ひ思ひの方向へ走つてゐる無數の曲線が、せり上つて、せり持ちになつて出来上つた一つの立體形であつた。さうして、あの緑色の額縁のなかへきちんと収まつて、譬へば、最も放膽「やぶちゃん注…「はうたん」。極めて大胆なこと。」に開展しながらも、發端と大團圓とがしつくりと照應できる物語のやうに、その景色は美しくも、少しの無理も無く、その上にせせつこましく無しに纏つて居た。それはどこかに古代希臘の彫刻にあると謂はれてゐる沈靜な、而も生き活きとした美をゆつたりと湛へて居た。それは氣高い愛嬌のある微笑をもつた女の口の端にも似て居た。丘の頂には雜木林があつて、その木は何れも手の指を空に向けて開けたやうに枝を張つて居て、彼の立つてゐる場所から一寸か五寸ぐらみに見える——或る時には一寸ぐらみに、さうして或る時には五寸ぐらみに感じ

られて見へる「やぶちゃん注…ママ。」。短い頭髮のやうに揃うて立つてゐる林は、裸の丘を額にしてその頂だけに、美しい生え際をして生えて見える。それらの林と空とが接する境目にはごく微細な凹凸があつて、それが味ひ盡せないリズムを持つて居る。その少しばかり不足してゐるかと思へるところには、その林の主である家の草屋根が一つ、その單調を補うて居る。さうして、その豊かにもち上つた緑の天鵝絨のやうな横腹には、數百本の縦の筋が、互に規則的な距離をへだてて、平行に、その丘の斜面の表面を、上から下の方へ弓形に滑りおりて、くつきりとした大名縞「やぶちゃん注…「だいまやうじま」。」を描き出して居た。それは緑色の縞瑪瑙の切斷面である。それは多分、杉か檜か何かの苗木であるからであらう。だがそんなことはどうでもいい。唯、この丘をかくまでに繪畫的に、裝飾風に見せて居るのには、この自然のなかの些細な人工性が、期せずして、その爲めに最も著しい効果を與へて「やぶちゃん注…新潮文庫版を参考にすれば、「添へ與へて」となっている。」居るのであつた、ちやうど林のなかに家の屋根が見えて居ると同じやうに。さうして、この場合どこからどこまでが自然その儘のもので、どこが人間の造つたものであるかは、もう區別出来ないことである。自然の上に働いた人間の勞作が、自然のなかへ工合よく溶け入つてしまつて居る。何といふ美しさであらう！ それは見て居て、優しく懷しかつた。おれの住みたい藝術の世界はあんなところなんだが……

「何をそんなに見つめていらつしやるの？」

彼の妻が彼に尋ねる。

「うん。あの丘だよ。あの丘なのだがね」

「あれがどうしたの？」

「どうもしない……綺麗ぢやないか。何とも言へない……」

「さうね。何だか着物のやうだわ」

この丘は澁い好みの御召の着物を着て居ると、彼の妻は思つて居る。

それは緑色ばかりで描かれた單色畫であつた。しかしこのモノクロオムは、すべての優秀なそれと全く同じやうに、殆んど無限な色彩をその單色のなかに含ませて居た。さうして見て居れば見て居るほど、その豊富が湧き出した。一見ただ緑色の一かたまりであつて、而もそれは部分部分に應じて千差萬別の緑色であつた。さうしてそれが動かし難い一つの色調を織り出して居た。譬へば一つの綠玉が、ただそれ自身の緑色を基調にして、併し、その磨かれた一つ一つの面に應じて、各相異つた色と効果とを生み出して居る有様にも似て居た。

彼の瞳は、常に喜んでその丘の上で休息をして居る。

「透明な心を！ 透明な心を！」

その丘は、彼の瞳にむかつて、さうものを言ひかけた。

或る日。その日は前夜からぱつたり雨が止んで、その日も朝からうすぐもりであつた。やがて正午前には、雲に滲んで太陽の形さへ、かすかながら空の奥底から卵色に見え出した。

彼の妻は、秋の着物の用意に言寄せて、東京へ行つて来ようと言ひ出した。彼の女は空の天氣を案ずるよりも、夫の天氣の變らないうちにと、早い晝飯をすませると、毎夜の憧れである東京へ、あたふたと出かけた。心は恐らく體よりも三時間も早く東京に着いたに相違ない。

彼は、唯ひとりぼんやりと、縁側に立つて、見るともなしに、日頃の目のやり場であるあの丘を眺めて居た。その時その丘は、何となく全體の趣が常とは違つて居ることに彼は氣づいた。それはどうもただ天氣の光だけではないのである。けれどもその原因は少しも解らなかつた。と見かう見して居るうちに、彼はやつと思ひ出して、机のひき出しから眼鏡を捜し出した。彼は可なりひどい近眼でありながら、近頃は折折、眼鏡をかけることさへ忘れて居るのであつた。何ごともしない近頃の彼には眼鏡も殆ど用が無くなつて居たから。さうして、つい眼鏡をかけて見ると、天地は全く別箇のものに見え出した。今日は天地の間に何かよるこびのやうなものを見ることが出来た。空が明るいからである。丘ははつきりと見えた。なる程。丘はいつもとは違つて見える――丘の雑木林の上には鳥が群れて居た。うすれ日を上から浴びて、丘の横腹は、その凸凹が研ぎ出されたやうな丸味を見せて、滑らかに緑金に光つて居る。苗木の畑である數百本の立縞――なる程、違つて居るのは其處だ。その立縞の縞と縞との間の地面をよく見ると、その左の方の一角を要にして、上に開いた扇形に、三角形に、何時もの地面の緑色が、どういふわけか、黒い紫色に變つて居るのである。はて！ 何時の間にこんなに變つたのであらう？ 何のために變つたのであらう？ 彼は、實に不思議でならない氣持がした。彼は世にも珍らしい大事が突發したかのやうに、しばらくその丘の上を凝視した。その丘は、彼には或るフェアリー・ランドのやうに思はれた。美しく、小さく、さうして今日はその上にも不可思議をさへ持つて居るではないか。

かうして暫く見つづけて居ると、その丘の表面の紫色と緑色との境目のところが、ひとりでにむくむくと持ち上つて、その紫色の領分が、自然と少しづつ延び擴がつて行くやうであつた。尙も、瞳を見据ゑると――さうすると眉と眉との間が少し痛かつたが――其處には、小さな小さな一寸法師が居て、腰をかめては蠢動しながら、せつせとその緑色を收穫して居るのであつた。あの苗木と苗木との列の間に、農夫が何かを作つて置いて居たのであらう。併し、見た目には、その農作物が刈りとられて居るといふよりも、紫色の土が今むくむくと持ち上つてくるとしか、彼の目には感じられなかつた。

彼は不可思議な遠眼鏡の底を覗いて、その中にフェアリー・ランドのフェアリーが仕事をして居るのをでも見るやうに、この小さな丘に或る超越的な心持を起しながら、ちやうど子供が百色眼鏡「やぶちゃん注」「ひやくいろめがね」を覗き込んだやうに、目じろぎもしない憧れの心持で眺め入つた。彼はたうとう煙草盆と座布團とを縁側まで持ち出して、このひとりでに持ち上る土の紫色を飽かず凝視した。紫色の土は湧くやうに持ち上る。あとからあとから持ち上る。紫色の領土が、緑色の領土を見る見る片はじから侵略して行

く。と、うすれ日はだんだんと明るくなつて来る。不意に、夕日の光が、少しづつ晴れて来た西の方の雲の細い隙間から一かたまりに流れ迸つて、丘の上に當つた。丘は舞ふやうな光線のなかに急に輝き出す。その丘の上へ色彩のあるフウトライトが投げられたかのやうに。丘の上ではフェアリーも、雑木林も、永い濃い影を地に曳いた。さうしてフェアリー・ランドの風景は、一層くつきりと浮き上つた。今もち上つたばかりの紫色の土はオルガンの最も低い音色のやうな聲をして、何か一齊に叫び出しさうに見える。丘の頂の林のなかの草屋根は滑らかなものになつて、そのなかから濃い白い煙が、縷縷と、ちやうど香爐の煙のやうに、一すぢに立ち昇つた。さうして、彼は今、うつとりとなつてフェアリー・ランドの王であつた。

その天地の榮光は、自然それ自身の恍惚は、一瞬時の夢のやうに、夕日が雲にかくれた時に消えた。夕日は、雲から、次には一層黒い雲と遠い地平の果の連山の方へ落ち込んで行つた。あの細い雲の隙間のところに、明るいかがやかな光の名残を残して。

氣がついて見ると、丘はもうすつかり紫色に變つて居る……フェアリーの仕事が終わつたからだ……。見とれて居るうちに、あたりは何時しかとつぷりと暗くなつて居た。それでも彼の瞳のなかには、フェアリー・ランドの丘だけが、依然として、闇のなかにくつきりと見えるやうに思ふ。

やがて、いつまでも見えるやうに思つてゐた丘も見えなくなつた……

「やぶちゃん注…佐藤春夫 未定稿『病める薔薇 或は「田園の憂鬱」』（天佑社初版）（その11）」と対照されたい。

なお、以下の章は未定稿にはない。従つて、次では未定稿とは数字がずれるので注意されたい。」

*

*

*

*

*

*

*

彼が我にかへつて、もうフェアリー・ランドの王ではなかつた時、闇は、遠い野や山の方から押し寄せて来て、それが部屋といふ部屋中へもうぎつしりとつめ込まれて居た。彼の身のまはりは全く暗黒であつた。彼は先づランプへ灯をとまさなければと、煙草盆にあつたマツチを擦つた。さうして家中到る處でマツチを擦つた。ランプのありかを求め捜す爲めであつた。けれども何處に置かれて居るのやら、それはどうしても見つからなかつた。一たい、この頃彼にはそんなことが實によくあつた。ランプなどといふそれ程大きなものではないにしても、その代りには今のさつきまで自分の手のなかに在つたもの、さうして使つて居たもの、例へばペンであるとか、煙管であるとか、箸であるとか、そんな風なもの、不意にどこかへ見えなくなるのである。さうして一時姿を晦して居たそれらの品物は、後になつて思ひも寄らないやうな、その癖考へればごく當りまへな場所から、或はその時に注意深く捜した筈だと思へる馬鹿げた場所から、ひよつくりと出て来る。併し、捜す時には、實に意地悪く決してそれは姿を現さない。さう言ふ事は誰にもよくある事である。併し、この頃彼に起つた程それほど屢は、決して誰にも起るものではない。彼には

この頃そんな事が一日に少くとも二三度は必ずあつた。そのふとした事が、彼にその都度どんなにか重大に見えたであらう。實に不可解な、神祕とさへ考へたいやうな、寧ろフェイタルとも言ひたい程な出来事だ、とさへ彼には感じられるのであつた。誰か目には見えない何者かが居て、その間ちよつとその品物を匿して居るといふ風にも思へた。さうして彼の持ちものが、かうして毎日二三品づつ位、身のまはりからひよつくり消え失せでもするやうに彼には感じられるのであつた。それ故ランプの時には、「又あれだな」と思ひながら、彼はもうそれを捜すことを一先づ斷念することにした。それは、妙に、斷念すればする程早く出て来るやうだから。彼はそこで氣がついて、簞笥の上から手さぐりに燭臺をとり下した。それへ陰氣な、赤い、揺れる火をともした。

「やぶちゃん注…「フェイタル」fatal。形容詞では「(病氣・事故などが)命に関わる・致命的な・命取りになる・死を齎す」、「運命を決する・重大な」、「宿命的な・運命を免れない」、「破滅的な・破壊的な」の意で、名詞ならば、「致命的な結果」の意。」

その夜のやうな時に、そんな田舎で、而もただひとり居て、四方を未だ戸締りして居ない家が、彼を薄氣味悪くした。――何とも知れない變な、それは泥棒などといふ素性の知れたものではない別種の侵入者、それは結局正體のない侵入者、それを自由自在に出入するに任せて居るやうな氣がするのであつた。戸袋といふものはその性質上、家の隅隅にあつた。生れつき最も臆病な、その上更にこの頃ではその程度が、神經質な子供以外の普通の人間には到底同情、どころではない理解もされさうも無い程にまでなつて居た彼には、家の隅といふやうな場所さへ不安なところに思へるには十分であつた。彼がそこに立つて一枚一枚と戸を繰つて行くと、戸の走るその音が、野面の方へ重く這つて行つて、そこで空虚に反響して居た。その音に脅えたのであらうか、今までは音無しく睡入つて「やぶちゃん注…「ねいつて」。」居たらしい彼の二疋の犬は、その時床の下からほの白く出て来るや否や、又いつものあの夕方の遠吠えを初めた……。十枚くらゐもあるその縁側の戸を締めてしまつて、もう一つ反對の側にある短い縁側の戸を締めようと、通拔けに六疊の座敷へ彼が足を踏み入れた時である。その床の間に、ちよこんと立つて居た！ランプが。今まであれ程捜して、ここだつて念入りに搜した筈の場所ではないか！いつものやうな小さなものであらう事か、こんな大きなものが。「やぶちゃん注…新潮文庫版ではここに「……」が入る。」さう思ふと、彼は全く恐怖に近い或る感じがした……。これや「やぶちゃん注…新潮文庫版では「これや」。「こりや」の意。」、このランプにはうつかり手はつけられない。それを持たうと何の氣もなしに手を差し延した刹那、それが自分の目の前で、ふいとまた見えなくなりでもするとしたならば……。彼には、そんな事が想像された。その想像を馬鹿ばかしいと自制しながら、彼は思ひ切つてランプへ手を差し出した。ランプはいい工合に本ものであつた。

ランプへ灯をともし、戸を締めてしまつて、火鉢の前に來た時、彼の氣がついたのは、お茶を飲まうにも湯がなかつた。炭は眞白な灰になり、晝間には滾り立たぎつて呻りつつけて居た鐵瓶は、そののなかの水と一緒に冷えきつて居た。それも當然の事である。彼の妻が

十一時ごろに出かけて行つた時、それを生けて置いたままで、彼はそれつきり炭を次「やぶちゃん注…「つ」。」がなかつたのだから。炭などは愚か、彼にはあのフェアリー・ランドの丘以外には、世界に何も——自分自身でさへも無かつたのだから。……いい按排にそのの遠吠えは今日は案外短くて済んだと思つた犬は、今度は二疋で、くんくんと鼻を鳴らし出して居た。これは彼等の夕飯の催促なのであつた。空腹なのは彼等と猫とばかりではない。彼自身も先刻からの、妙に胸さわぎのするやうなその臆病な氣持も、うすら寒いのも、一つは確にそのせゐに相違ないと考へた程に空腹なのであつた。併し、夕飯を食べるにしては、今夜は先づ飯を炊かなければならなかつた——不意に東京へ行くと言ひ出した彼の妻は、汽車の時間の都合でその用意はして置けない、と、くどくどと言ひ譯をして、停車場への行きがけにそれをお絹に頼んで行かうと言つた。けれども、昨夜もお絹の身の上話のもう十遍目位も聞かせられて惱まされて居た彼は、妻には米を洗はせて水をしかけさせて、自分自身で炊くことにして居た。火のない火鉢の前に坐り込んで、彼は一晩ぐらゐ飯などは食はなくともいいと思つた。けれども、かうして犬どもにせがまれて、この常に飢に襲はれて居る者どもの空腹を想像して見た時、彼は飯を炊かずには居られなかつた。この頃ではもううつかりして居るうちに日が暮れるのだから、早く用意をして置かなければ……と、さうも言ひ置いた妻の言葉を、彼は思ひ出しながら、自分を臺所の方へ運んで行つた。

彼は犬を鎖から放してやつて、それを臺所の方へ呼んで來た。うす暗い隅隅の多い臺所は、彼ひとりではもの淋しかつたからである。犬どもは彼等の主人の心持をよく知つて居たかのやうに、土間にしやがんでゐる彼の傍へ來て、フラテも、レオも、二疋とも彼にすり寄つて坐つた。猫は猫で、その板間の端に來て彼の顔に近く蹲つた。かうして彼の妙な一家族が、馬の蹄のやうな形に高く積み上げられて土で出來た竈の前にわびしく物言はぬ團欒をした時に、彼はやつと心丈夫に思へた。さうして彼は火を焚き出した。焚きつけだけはよく燃えた。それが燃え盛ると彼の心も明るくなつた。けれども火は直ぐ消えてしまつて、彼の投げ入れた二三本の薪へは決して燃えつかない。彼はただ徒に焚きつけを燃した。永い間の雨で、薪は濕りきつて居たからである。さうして焚きつけは——こんなもの位はもつとどつさり用意して置けばいいものを！ 少ししか無かつた焚きつけは、五六遍くべて居るうちには既にもう屑も無かつた。彼は考へついで石油の罐を持ち出した。びくびくしながら薪の上へ石油をぶつかけた。直ぐ石油は地の上から三四寸浮いたところに大きな軽い火の塊をつくつて、燃え立つた。走るやうに燃えた。神經的に燃えた。それは全く何の精神統一もない人の——彼自身のやうな人の昂奮に髣髴として燃えた。思慮なく、理性を没却して、そのくせ力なく、ただ一氣に燃えた。直ぐにぐつたりと氣がくづをれて下火になつた。石油はただそれがある間はその自身だけ燃えて、燃え盡きると、あれほど大きかつた炎の塊は幾つかの小さなそれに分れ分れになつて、その一つ一つは薪の上つらを這つて傳ひながら、青く小さな炎がちらちらとそこを舐めてしまつたかと思ふと、もう消えて居た。どす黒い臭とどす黒い色とを持つたその特有の煙、それは馬鹿げた感激の

後に来る重い氣分に似た煙が、一度にどつと塊つてさもけだるげに昇つた。それは猫がおどろいて立ち上り、二疋の犬は一樣にそれから顔を反けた程にどつさりであつた。彼はその同じことをもう一度試みた末に、石油は薪に灌がれたものよりも土の上に零れたものの方が、最後まで燃えて居るのを發見して（實際、彼は石油の燃え方に就て、いろいろな自分の感激の具象化を、例の病的な綿密さで丹念に、研究者のやうに見つづけたのである）彼は改めて竈の下から、石油の燃えたしるしに、その上つらだけが黒く燻されて居る薪を竈の外へ、一たんとり出した。さて竈の底の灰の上へ思ひきつてあるだけの石油を灌いで置いてから、その土の上へ薪を組み合せて積み上げた。さて燃えて居るマッチを一つかみ投げ込んだ。黒い煙の少しと大きな炎とが、釜の下を傳うて存分に吐き出された。そのうちにそれは少しづつ薪へ燃えうつり出した。

「うまい！ うまい！」

彼は思はず聲を出して、さうひとり言を言つた。その低い聲を聞いて、フラテは彼の細く尖つた顔を上げて、その意味を訊す「やぶちゃん注…「ただす」。」かのやうに彼の顔を見上げた。やつと、少しづつ燃えて來た薪は、それは心から動かされた人間の、力強い感激のやうに頼もしい炎であつた。おお！ 燃えて來る火といふものはどんなにうれしいか。彼と彼の犬とは同じやうに瞳を輝かして、未開人たちが神と崇めたその燃える火を見つめた。その時炎の上に濺がれて居た彼の瞳に、ふと何の關聯もなしに、妻の後姿が、極く小さく――あのフェアリーほど小さく見えるやうな氣がした。その燃える火のなかにゐる彼の妻は、どうやら大變な人ごみのなかに居るやうに感ぜられる……。單なる想像ではなく、それは目さきにちらつく幻影に近い――幻影といふのはこんなものであらうかと思へるやうな形で、そんな空想が思ひがけなく彼に起つた時に、ああ活動へ行つて居るな！ と、彼には直覺的にさう思へた。その次には半ば彼自身の意志から、彼の空想は、東京のそのうちでも人氣の多いやうな場所へ向いて行つた。とその次の瞬間に、……若しや、自分自身も今ごろは、そんな人込みのなかを歩いて居るのではなからうか、と、そんな有り得べからざることが極く普通の考へのやうに思ひ浮ぶ。……こんな處に、うす暗いうすら寒い臺所の片隅に、竈の前へしよんぼりと跼つて「やぶちゃん注…「うづくまつて」、思ふやうには燃えない炎をさつきからちつと見つづけて居る自分。まるで苦行者が苦行をでもつづけるやうに自分自身の氣分を燃える炎のなかに見つめて、犬や猫にとり圍まれて蹲つて居る自分。これは若しや本當の自分自身ではないので、本當のものは別にちやんと何處かに在るので、ここの自分は何か影のやうな自分ではないのか！ そんな氣持がひしひしと彼に湧いて來た。その心持が彼に滲入つた「やぶちゃん注…「しみいつた」。」時に、冷たい感覺が彼の背筋の眞中を、閃くが如くに直下した。身のまはりのすべては、自分自身も竈の炎も二疋の犬も猫も、眼を上げるとお櫃も手桶もランプも流しもとも悉くが、今、ふいと掻き消えはしないかと危ぶまれる。さうして怖る怖る身のまはりが振り返つて見られる。壁の上には、彼自身と二疋の犬との三つの影が三方に擴がつて、大きく黒く一面に映つて、それが炎の燃えるまにまに、壁の面で或は小さく或は大きくふるへる。それは小休

みなく「やぶちゃん注…」をやみなく」。動く毎に、それだけ少しづつ彼等の本體の方へ近づいて来て、それ等の本體を呑込んでしまひさうに見える。と、彼の左側に居たレオは、突然ぬつくと立ち上つたが、煙を出すために少しばかり隙けて置いた戸の隙間からすり抜けて外の方へ出て行つた。それから急にけたたましい短い聲で吠え出した。耳を後に立ててその兄弟の聲に注意したフラテも同じやうにして出て行つた。彼等は聲を合せて吠えた。――目には見られない何者かが近づいて居ることを彼に告げでもするかやうに。恐怖が彼を立ち上らせた。併し、犬どもは直きにそれをやめて不興げな眞面目な様子で、もとの座へ、彼の傍へ坐つた。

犬どもその様子が彼には不審でならなかつた。彼は心を落着けると、少し身を延び上つて、戸の節穴から、試みに、そつと外を窺うて見た。すると、ほのかな闇を見透して居る彼の目に、柿の樹の幹のかけから黒い小さな人影が、不思議にも足音なしに現はれて来た！ その人影が小さかつたことが彼をいくらか安心させた。けれどもそれは正しく何の足音もない者であつた！ 併し、それが動いて来て、戸の隙間から洩れて流れて居るランプの光につき當つた時、それは別に奇異なものではなかつた。それはお桑、彼の家へよく遊びに来る隣の家の十三になる女の子であることが確であつた。けれども？ あのお喋りの、いつもずつと遠くから大聲で呼ばはりながら駆け込んで來たり、犬の名を呼んだり、或は口笛を吹いたりしながら來る子、さうして夜になつてからなどは決して遊びに來ない子が、今夜あんな風にして來る筈はない、と思ふと、そのふはふはと近づくお桑は、やはり、奇異なものであつた、彼はそれを確めようと呼んで見た――

「お桑さか？」

「おおつ！ びつくらした！ 小父さん居なつたか」「やぶちゃん注…」をんなつたか」と読んでおく。」

さう答へたのはやはりお桑であつた。併し、彼の呼んだのは妙に落着いた大きな聲のひとり言のやうであつたのに對して、お桑の答へは實に仰山な叫びであつた。その聲で、今まで淋しさをこらへて居た彼が飛び上らうとした程。お桑の聲で安心した彼は、戸を開けた。外には突立つたお桑の妙な表情が明るく浮き出した。

「どうしたのだ、お桑さ。……うちで叱られたのか」

「……」お桑は直ぐには返事をしなかつた。けれどもやがて暫くすると、小父さんは飯を炊いて居たのかとか、小母さんは何日歸るかとか、この子はいつもの通りに喋り出した。そのうちに、お桑はふと思ひ出したかのやうに言つた。

「然うだつて！ おら忘れて居ただ。今日おらあで風呂焚いただよ――お天氣で、皆野良へ出ただもの。今焚いて居るんだよ。もうちつとしたらへえりに來なよ。……小父さんは妙な人だなあ、無え時にべえへえりたがつて、ある時にはへえりたがんねえでねえか」
「やぶちゃん注…」
「べえ」は副助詞「ばかり」の神奈川方言。」お桑はそんなことを言ふと、そはそはと歸り出した。今夜ばかりはお桑にでももつと喋つて居て貰ひたいと彼は思つたのに。その女の子は、五六間歩き出した時には、

「小父さん。また降つて來ただよう」

と、もういつものとほりのお桑であつた。お桑の奴は今ほつと安心をしたのだ、と彼は思つた――彼には、風呂の事を聞いた時に、あの足音の無いお桑が、偶然にももう解つて來て居たから。お桑の一族には用心せよといふ噂や、この頃外に積んで置く薪があまり減りすぎるといふ事や、時時の朝に、束から崩れて抜け落ちた薪が二三本も井戸端にある、といふやうな事を、彼の妻が言つたのを彼は思ひ合したのである。

さう解つて見ると、そんなことは彼にはどうでもよかつた。唯、

「小父さん。また降つて來ただよう」

と言つたお桑の言葉と、あのときつかけてひよく、柿の幹から現はれた人影としてのお桑が、彼の心に残つた。それよりも彼がそれ程に苦心をした飯は、何か用具について居たのか、彼の手にあつたのか、とにかく石油の臭が沁み込んで居た。(お茶をかけて、ランプの光に透して見ては、別に何も浮いては居なかつたが。) 彼には、それはどうしても一杯しか食へなかつた。その夜は、飯にばかりではない。夜着の襟も、枕も、彼の肩のところも、彼の口のなかも、空氣そのものも、彼の腕にびくびくと小さな心臓の鼓動を傳へて彼の傍に來て眠つて居た猫も、皆石油くさかつた。さうしてそのあるかないかの臭が、夕飯の代りにと澤山に彼が飲んだ茶の作用と結びついて、それが極く微かなだけに、彼をひどく昂奮させた。臭はあると思へばあつた、無いと思へばなかつた。……ふと、夕方ランプを捜さうとして方方でマッチを擦つたことや、火を燃さうとして石油を弄んだことを思ふと、釜を竈から下した時その尻にちらちらと動いて居た小さな火の粉の行列を面白がつたことと言ひ、この部屋にみなぎる石油の臭と言ひ、さう思つて見るとお桑が薪を盗みに來たことまで、何でもかでも皆、今夜この家から火事が出るといふ事の豫覺に思へてならない。……空氣のなかには、既にさういふ用意が出來てゐて、それが彼の官能には假に石油の臭になつて訴へられて居る。とそんな風にも思へる。たうとう……こんな家ぐらゐ燃え上がつてしまへ。火事といふものは愉快なものだ。いやいや、そんなことを考へるとほんとう「やぶちゃん注…ママ。以下も同じ。」に火事が出る、とも思ふ……。若し火事が出たら、眞先きに犬どもを鎖から放してやらなければ彼等は焼け死ぬ、と思ふ。その時になつて狼狽するといけないから、今のうちから用意に置いてやらうかとも思ふ。……大丈夫火事などはないと思ふ。……何しろ早く夜が明ければいいと思ふ。そんなことを思ふ傍に別の心があつて、ほんとうに妻は活動寫眞へ行つたらうかと思ふ。今日の晝間のあのフェアリーの仕事をして居る姿を思ひ浮べる。と、夕日がぱつと丘に照つたことから、その色からまた火事の事が思はれて來る……。彼は自分自身で、それを、未だ睡入らずに考へて居るやうに感じ、もう眠つて居て夢のなかで考へて居るやうにも思つた。さうしてそれが果してどちらであつたやら、後になつて見ると更に解らない。――

「やぶちゃん注…これ以前の部分でも明らかに現われているが、この主人公の精神状態は、強迫神経症様の、軽い被虐性と軽い加虐性を兼ね備えた、強い関係妄想の典型的症例に非常に近いように思われる。叙述方法のそれもそうした、やや病的な粘着質な感じがよく出てい

る。」

*

*

*

*

*

*

*

或る雨の晴れた晩であつた。それはもつと後の日であつたか、それともここに書くのが
順當な頃であつたか解らない。とにかく或る雨の晴れた晩であつた。大きな圓い月が、あ
の丘の上から、舞臺の背景のせり出しのやうに靜に昇つて來たことがあつた。

その晩は犬が二疋ともいつもよりもつと悲しげに、もつと激しく吠えた。

彼は、それらの犬どもを遊ばせるつもりで庭へ出た。庭からまた外へ出た。空に月が出
て居ることが彼の心を楽しくして居た。月は殆んど中天に昇つて居た。空は東の方から
りと晴れて、西の方へ行くほど曇つてその果は眞黒であつた。大きな空が一刷毛でぼかさ
れて居た。彼は月をつくづくと見上げた。さうして歩いた。遠い水車の音が、コットン、
コットン、コットン、と野面を渡つてひびいて來た。フェアリー・ランドの丘の女の脇腹
は「やぶちゃん注…新潮文庫版では「に」」、月の光が細かく降りそそがれて、それは濡
れて光つて居た。彼は彼の家の前の街道を幾度も幾度も往つたり來たりして歩いた。月を
背にして自分の短い影を見た。又は、自分の影は見えないで涯しのない月の中を見つめて歩
いたりした。二疋の犬は彼の後について、二疋で互にふざけ合ひながら、嬉嬉として戯れ
て居た。彼が立ちどまると、二疋の犬は、立つて居る彼のぐるりを、追つかけ合つて廻つ
た。彼は水のせせらぎに耳を借した。路の傍に、彼の立つて居る足の下に、あの道に沿う
た渠である細い水が、月の光を碎きながら流れて居た。それは大きな雲母の板か何かのや
うに黒く、さうして光つて、音を立ててふるへて居た。ふと、南の丘の向う側の方を、K
からHへ行く十時何分かの終列車が、月夜の世界の一角をとどろかせ、搖がせて通り過ぎ
た。その音が暫く聞かれた。この時、彼にはもの音が懐しかつた。月の光で晝間のやうに
明るい、いや雨の日の晝はこれよりずっと暗い——野面を越えて、彼は南の丘の方へ目を
向けた。……今、物音の聞えたところ、丘の向う側には素晴らしく賑やかな都會がある。
……其處には、家家の窓から燈が、きらきらと簇つて輝いて居る……。彼は不意に何の連
絡もなく、遠い汽車のひびきを聞いただけで、突然そんな空想が湧き上つて來た。さう言
へば、一瞬間、ほんの一瞬間、その丘のうしろの空が一面に無數の灯の餘映か何かのやう
にぼつと赤くなつた……かと思ふと、すぐに消えた。それは實際神秘な一瞬間であつた。
「俺は都會に對するノスタルヂアを起して居るな？」

彼は、さう思ひながら、その丘から目をそらした。さうしながら、見ると彼の突立つて
ゐる一筋の路の前方から、或る黒い人影が彼の方へ歩いて來つつあつた。それは彼とは二
町「やぶちゃん注…約二百十八メートル。」ほど距てて居た。彼はそれを見つめながら、
月の光のなかをそんな風な打開けた場所を人の通つて來るのを、何といふことなく氣味惡
く思つた。さうして月夜は闇夜よりも物凄いと思つた。と、その時、その人影の方から、
「ヒュウ！」

と、一聲、ただ一聲、高く口笛が聞えて來た。すると彼の犬は二疋とも、突然疾風のやう

な勢で、その人影の方へ駆け出した。それが先づ彼には非常に不愉快であつた。これらの犬は彼、即ち犬どもの主人の呼ぶ時より外には、今まで決して他の人の方へは行かうとはしなかつたからである。それがその夜に限つて、この一聲の口笛を聞くと、飛ぶやうに駆け出す。彼は或る狼狽をもつて、

「ヒユウ！」

と、同じやうに一聲高く口笛を吹いた。犬をよび返すためである。彼の口笛を聞くと、犬も氣がついたらしく、慌てて彼の方へ引き返した。

「フラテ！」

人影はさう言つて、犬の名を呼んだ。

「フラテ！」

彼も慌てて、同じく犬の名を呼んだ。

彼のさう叫んだ聲は、妙に、あの人影の聲とそっくりであつた。さうして直ぐに同じ言葉を呼び返した爲めに、彼の聲は、ちやうど人影の聲の山彦のやうに響いた。二つの聲は、この言ひ現はし難い類似をもつて全く同一なものだと彼自身にさへ感じられた。それを犬でさへもさう聞いたに相違ない。一旦、駆け出した犬は、人影を慕うて行つたまま歸つて來なかつた。

彼は呆然と路の上に立つて、その人影を確めようと眼を睜つた「やぶちゃん注…「みはつた」」。人影は、路から野面の方へ田の畔をでも傳ふらしく、石地藏のあたりから折れ曲つた。さうして！

何といふ不思議であらう！ その人影は、明るい月夜のなかで、目を遮るものもない野原のなかで、忽然と形が見えなくなつた。

「あつ」と叫び聲を、口のなかに噛み殺して、彼は家の門へ、家のなかへ、一散に駆け込んだ。

「……この村では誰も俺の犬の名を覚えて居る筈はないのだ。呼びにくい名だから。いや、子供が知つて居る。けれども彼等は、『フラテ』といふ名を『クラテ』と訛つて覚えて居る筈だ。たとひ、名を呼ばれても、俺の犬は俺以外の人間の方へ行く筈はないのだ。たとひ、行くとしても、俺が呼び返せばきつと俺の方へ歸つてくる筈なのだ。今までこんなことは一度もない」彼は一人でさう考へた。「……それにあの人影は何だつて、不意にかき消すやうに見えなくなつたのであらう？……若しや、あの時俺が、この俺自身の同一人が二人の人間に別れたのではなかつたか？ 離魂病といふ病氣はほんとうにある事であらうか？ 若し然うだとすると、俺は、若しや離魂病にかかつて居るのではなからうか。犬といふものは物音を聞き別けるのには微妙な能力を持つて居なければならぬ筈だ。わけて主人の聲はちゃんと聞きわけける筈だが……」

彼の心臓の劇しい鼓動は、二十分間の以上もつづいた。彼はどういふわけか時計の振子の動くのを見つづけながら、離魂病に就てのさまざまな文學的の記録や、或は犬のことなどを考へつづけて、心臓の鎮まる時間を待つた。心がやつと落着くと、彼は妻に命じて、

犬がいつもの通りに縁の下に居るかどうかを見させた。犬があのままあの人影について行つて、もう何時までも歸らないやうに思へたからである。犬はそこには居なかつた。けれども彼の妻が呼んだ時には、彼等は運よく（と彼は思つた）歸つて來た。彼は月はまだ出て居るかと聞いた。月は出て居るといふ妻の返事であつた。

翌日の朝になつて、彼は昨夜の出來事を彼の妻に初めて話した。彼はその夜のうちには、それを人に話すだけの餘裕もないほど怖しかつたからである。この話を聞いた彼の妻は、可笑しがつて彼を腹立たしくしたほど笑つた。突然、人影が見えなくなつたといふのは、犬がその人の足もとまで懷なついて來たので、誰かその人が、犬の頭を撫でようと身を屈めたに相違ない。その爲めに畔道を歩いて居た人は、田の稻のかけに匿されて形が見えなくなつたのであらう。と、さういふのがこの事に就ての彼の妻の解釋であつた。成程、それが適當な解釋らしい、と彼も考へた。併しその瞬間に感じた奇異な恐怖は、その説明によつて消されはしなかつた。

「やぶちゃん注…前章が追加されたため、ここでは未定稿とは数字がずれるので注意されたい。未定稿の対応章は「佐藤春夫 未定稿『病める薔薇 或は「田園の憂鬱」」（天佑社初版）（その12）」となる。」

*

*

*

*

*

*

*

一度かういふ事もあつた――

或る時、夜ふけになつてから、ランプの傍へ蛾が一足慕ひ寄つた。養蠶の盛んなこの地方では、この頃になつて、この蟲がよく飛んで居たものである。彼はこの蟲を最も嫌つて居た。常から、以前にも一度、この蟲が彼のランプへ來た時、彼は手製の蠅たたきでこの蟲をたたいた。その場に押しつぶされたこの蟲は、眉の形をしたまた櫛の齒のやうな形でもあるその太い觸角を、何とも言へず細かくびりびりとふるはせると、最後の努力をもつてくるりとひつくりかへつて、その不氣味なぶよぶよな腹の方を曝け出すと、六本程ある彼の小さな脚を、何かものを抱き締めようとでもする形で一度に、びく、びく、と動かし、また時時には翅に力を入れて彼の腹を浮き上らせ、その觸角と脚と翅と腹とのそれぞれに規則的とも言ふべき小さな動作をいつまでもいつまでも續けて、その死の苦悶を彼に見せつけた事があつた。それは小さなものながら、それを見守つた彼を物凄く思はせるには充分であつた。それ以來彼は殊にこの蟲を厭ひ、怖れて居るのであつた。

この蟲の、灰色の統絹ぬめぎぬのやうな毛の一面に生えた、妙に小さな頭、その灰黒色のなかに不氣味に、底深く光り返つて居る眞赤な、小さな、少しとび出した眼。べつたりと吸ひついたやうにランプの笠の上へ翅を押しつけてぢつとして居る一種重苦しい形。それが、急に狂氣の發作のやうに荒唐しくその重い翅を動かす有様。それからいくら追ひ拂つても全く平然として厚顔に執念深く灯のまはりを戯れまはる様子。それがランプの直ぐ近くで、死の舞踏のやうな歡喜の身悶えをする時には、白つぽくぼやけた茶色の壁の上を、そのグロテスクな物影が壁の半分以上を黒くして、音こそは立てないけれども、物凄く叫立て

て居る群集のやうに騒騒しく不安に狂ひまはつた。彼の追ひ退けるのをのつそりと避けて、障子の上の方へ逃げて行つてしまふと、今度はその厚ぼつたい翅でもつて、ちやうど亂舞の足音のやうに、ばたばた、ばたばた、と障子紙を打ち鳴らした。

「やぶちゃん注…「統絹」単に「統」とも言う。生糸を用いて繻子織しゅうすおり（縦糸と横糸とが交差する点が連続することなく、縦糸又は横糸だけが表に現れるようにした織り方。一般には縦糸の浮きが多く、光沢がある）にして精練した絹織物。生地が薄く、滑らかで、光沢があり、日本画用の絵絹や造花などに用いられる。天正年間（一五七三年～一五九二年）に中国から京都西陣に伝来し、日本でも織られるようになった。」

彼は、蛾が静かになるのを見すまして、新聞紙の一片でやつとそれを取り押へた。さうして、その不気味な蟲を、戸を繰つて外へ投げ捨てた。たたき殺すことはもう懲りて居たからである。

けれどもものの十分とは経たないうちに、その蛾は（それとも別の蛾であるか）再び何處かから彼のランプへ忍び寄つた。さうして再び、怖ろしい、黒い、重苦しい、騒騒しい、翅の亂舞を初めた。彼はもう一度、その蛾を紙片で取り押へた。さて再び戸を繰つて窓の外へ投げ捨てた。

けれども、又ものの十分とも経たないうちに、蛾は三度び何處かから忍び寄つた。それは以前に二度まで彼をおびやかしたと同一のものであるか、或は別のものであるかは知らないが、さつきあれほどしつかりと紙のなかにつつみ込んで握りつぶしたものが、出て来ることは愚か、生きてゐる筈も無さうだから、これは全く別の蛾であつたらう。とにかく、二度、三度、四度まで彼のランプを襲うた。……この小さな飛ぶ蟲のなかには何か惡靈が居るのである。彼はさう考へずには居られなくなつた。さう思ひだすと、もう一度自分でそれを取壓へることは、彼には怖ろしくて出来なくなつた。そこで、わざわざ妻を呼び起して、この蟲を捕へさせた。それから、一枚の大きな新聞紙で捕へられてゐるそれを妻の手から受け取つた彼は、この小さな蟲を、その大きな紙で幾重にも幾重にも捲き込んで、更にもう一枚新聞紙を費して極く念入りに折り畳み込んだ。さうして今度は戸の外へは捨てないで机の上へ乗せ、それからその上へ厚い古雑誌を一冊載せて置いた。

かうして、やつと初めて安堵して、彼は寢床に入つた。

暫くして、眠つかれないままに、燭臺へ灯をとると、その時ひらひらと飛んで来て、嘲るやうに灯をかすめたものがある。それも蛾であつた！

「やぶちゃん注…ここで、佐藤は未定稿の順を変えて、『佐藤春夫 未定稿『病める薔薇』或は「田園の憂鬱」（天佑社初版）（その15）」をここに挿入している。

而して、以下の章では、佐藤は未定稿の順を変えて、『佐藤春夫 未定稿『病める薔薇』或は「田園の憂鬱」（天佑社初版）（その13）」を以下に挿入している。」

* * * * *

彼は眠ることが出来なくなつた。

最初には、時計の音がやかましく耳についた。彼は枕時計も柱時計も、二つともとめてしまった。全く、彼等の今の生活には、時計は何の用もないただやかましいだけのものにしかならなかった。それでも彼の妻は、毎朝起きると、いい加減な時間にして時計の振子を動かした。彼の女は、せめて家のなかに時計の音ぐらゐでもして居なければ、心もとない、あまり淋しいといふのであつた。それには彼も全く同感である。何かの都合で、隣家の聲も、犬の聲も、鶏の聲も、風の音も、妻の聲も、彼自身の聲も、その外の何物の聲も、音も、ぴつたりと止まつて居る瞬間を、彼は屢經驗して居た。その一瞬間は、彼にとつては非常に寂しく、切なく、寧ろ怖ろしいものであつた。そんな時には、何かが聲か音をたててくれればいいがと思つて、待遠しい心持になつた。それでも何の物音もないやうな時には、彼は妻にむかつて無意味に、何ごとでも話しかけた。でなければ、

「うん、さうだ」

と、こんな意味のないひとりごとを言つたりした。

けれども夜の時計の音は、あまり喧しく耳について、どうしても寝つかれなかつた。それの一刻の音毎にそられて、彼の心持は一段一段とせり上つて昂奮して來た。それ故、彼は寢床に入る時には、必ず時計の針をとめることにした。さうして毎朝、妻は、夫のとめた時計を動かす。夫は、妻の動かした時計をとめる。時計を動かすことと、止めることと、それが毎朝毎夜の彼等各の日課になつた。

時計の音をとめると、今度は庭の前を流れる渠のせせらぎが、彼には氣になり初めた。さうして今度はそれが彼の就眠を妨げるやうに感じられた。毎日の雨で水の音は、平常よりは幾分激しかつたであらう。或る日、彼はその渠のなかを覗いて見た。其處には幾日か以前に――彼がこの家へ轉居して來たてに、この家の廢園の手入れをした時に、渠の土手にある猫楊から剪り落したその太い枝が、今でも、その渠のなかに流れ去らずに沈んで居て、それが笹しがらみのやうに、水上からの木の葉やら新聞のきれのやうなものなどを堰きとめて、水はその笹を跳り越すために、湧上り湧上りして騒いで居た。あの騒騒しい夜毎の水の音は、成程この爲めであつた。ひとりでさう合點して、彼は雨に濡れながら渠のなかに這入つて、その枝を水の底から引き出した。澤山の小枝のあるその太い枝の上には、ぬるぬるとした青い水草が一面に絡んで上つて來た。彼はそれを一先づ路傍へひろひ上げた。さてもう一度、水のなかを覗くと、今まで猫楊の枝の笹にからんで居た木の葉やら、紙片やら、藁くづやら、女の髪の毛やらの流れて行く間に雜つて、其處から五六間の川下を浮きつ沈みつして流れて行く長いものが、ふと目にとまつた。

見れば、それはこの間の晩、酔つぱらひと口爭ひをしたあの晩、犬を打つてから水のなかへたたきつけたあの銀の握のある杖であつた。

彼は不思議な縁で、再びそれが自分の手もとにかへつたことを非常に喜んだ。何といふことなく恥しく、馬鹿ばかりくつて、それを無くしたことを妻にも隠して居たのに、つい浮つかり話してしまつたほどであつた。さうして彼は考へた――あの騒騒しい水音は、きつと、この杖のさせた聲であらう。杖はさうすることに依つて、それを捜し求めて居る彼

に、杖自身の在處を告げたのであらうと。

彼はその杖を片手に持つて、どこほりなくひた押しに流れて行く水の面をぢつと見た。これならば、今夜はもう静かだ、安心だと思つた。併しそれは間違ひであつた。その夜も、前夜よりは騒がしいかと言つても、決して静かではないせせらぎの音が、それはもともと極く微かなものであるのに、彼にはひどく耳ざはりで、それが彼の睡眠を妨げたことは、前夜と同じことであつた。

けれども、そのせせらぎの音は、もうそれ以上どうすることも出来なかつた。

その外に、もう一つ別に、彼の耳を訪れる音があつた。それは可なり夜が更けてから聞える、南の丘の向側を走る終列車の音であつた。而も、それはよほどの夜中なので――時計は動いて居ないから時間は明確には解らないけれども、事實の十時六分？ にT驛を發して、直ぐ、彼の家の向側を、一里ほど遠くに、丘越しに通り過ぎる筈の終列車にしてはそれは時間があまり晩「やぶちゃん注..「おそ。」」すぎた。そればかりかそれは一夜中に一度ではなく、最初にそれほどの夜更けに聞いてから、また一時間ばかり経過するうちに、又汽車の走る音がする。どうしてもそれは事實上の列車の時間とは、すべて違つて居る……たとひ、それが眞黒な貨物列車であつても、こんな田舎鐵道が、こんな夜更けに、それほど度度貨物列車を出す筈はない。さうして、それほどはつきりと聞かれる汽車の音を、彼の妻は決して聞えないと言ふ。その汽車の遠いところきがひびいて来る時には、その汽車のなかには、こんな田舎へ、彼を、思ひがけなくも訪ねて来る友人があつて、その汽車のなかに乗つてゐるやうな氣がしてならない。さうして實際にさう言ふことがあるとしたならば、それは誰であらう。Oであらうか？ ……Eであらうか？ ……Tであらうか？ ……Aであらうか？ ……Kであらうか？ ……彼は、思ひ出せるだけの友人を思ひ出して見た。けれども誰もそんな人はありさうも無かつた。併し、人が――誰か知つて居る人が、ひとり車窓に倚りかかつて居る様子が、彼には實にはつきり想像された。さうして妙なことは、それがふと彼自身に思へるやうな晩もあつた――そんな形でそこに腰かけて居る人は、さうしてそれが彼の耽奇的な空想に、怖ろしい、併し魅惑のあるポオの小話の發端を與へた。時計のセコンドの音。渠のせせらぎ、汽車の進行するひびき。そんな順序で、遂に彼はその外のいろいろな物音を夜毎に聞くやうになつた。その重なるものの一つは、彼が都會で夜更けによく聞いた、電車がカアブする時に發する、遠くの甲高な軋る音である。それが時時、劇しく耳の底を襲うた。或る夜には、うとうと眠つて居て、ふと目が覺めると、直き一町ほどのかみ、にある村の小學校から、朗らかなオルガンの音が聞え出して來た。もう朝も遅くなつて、唱歌の授業でも始つて居るのかと、あたりを見ると、妻は未だ睡入つて居る。戸の隙間からも朝の光は洩れて居ない。何の物音も無い……そのオルガンの音の外には。深夜である。睡呆けて居るのではないかと疑ひながら一層に耳を確めた。オルガンの音は、正にその特有の音色をもつて、爽やかに、甘く、物哀れに、ちやうど晩春の夕方のやうな情調をもつて、よく聞きなれた何かの行進曲を、風のまにまに漂はせて來るではないか。彼は恍惚としてその樂の音に聞き惚れて居た。或る夜にはまた、活動寫眞館

でよく聞く樂隊の或る節が……これもやはり何かの行進曲であるが……何處からともなく洩れ聞えて來た。それ等の樂の音を感じるやうになつてからは、水のせせらぎは、一向彼の耳につかなくなつた。さうして彼はもう眠らうといふ努力をしない代りに、眠れないといふことも、それほどに苦しくはなかつた。それ等のものは、電車のカブする奴だけは別として、その外のは皆、快活な朗らかな、或は幽遠な、それぞれの快感を伴うて居た。彼はそれらの現象を訝しく感ずるよりも前に、それを聴き入ることが、寧ろ言ひ知れない心地よさであつた。就中、オルガンの音が最もよかつた。次には樂隊のひびきであつた。それから寒詣りの人が敲くやうな鐘の微かな音が續いたこともあつた。オルガンの音は二度しか聴かれなかつたけれども、樂隊は殆んど毎夜缺かさずに洩れ聞えた。彼はそれを聞き入りながら、ついその口眞似を口のなかでして、その上、臥てゐる自分の體を少し浮き上がらせる心持にして、體全體で拍子をとつてゐた。それは一種性慾的とも言へるやうな、即ち官能の上の同時に精神的でもある快樂の一つであるかのやうであつた。若しそれが修道院のなかで起つたのであつたならば、人人はそれを法悦と呼んだかも知れない。幻聴は、幻影をも連れて來た。或は幻聴の前觸れが無しにひとりでも來た。

その一つは極く微細な、併し極く明瞭な市街である。その一部分である。ミアチユアの大きさと細かさとの、仰臥して居る彼の目の前へ、ちやうど鼻の上あたりへ、そのミアチユア「やぶちゃん注…新潮文庫版ではここに「の」が入っている。」街が築かれて、ありありと浮び出るのであつた。それは現實には無いやうな立派な街なので。けれども、彼はそれを未だ見たことはないけれども、東京の何處かにこれと全く同じ場所がきつとありさうに想像され、信じられた。それは灯のある夜景であつた。五層樓位の洋館の高さが、僅に五分とは無いであらう。それで居て、その家にも、それよりもつと小さい――その半分も三分の一の高さもない小さな家にも、皆それぞれに、入口も、灯のきらびやかに洩れて來る窓もあつた。家は太抵眞白であつた。その窓掛けの青い色までが、人間の物尺にはもとより、普通の人の想像そのもののなかにもちよつとはありさうもないほどの細かさで、而も實に明確に、彼の目の前に建て列ねられた。いやいや、未だそればかりではない。それらの家屋の塔の上の避雷針の傍に星が一つ、唯一つ、きつぱりと黒天驚絨のなかの銀絲の點のやうに、鮮かに煌いて居る……不思議なことには、立派な街の夜でありながら、どんな種類にもせよ車は勿論、人通り一人もない……柳であらう街樹の並木がある……。しんとした、その癖何處にとも言へない騒がしさを湛へて居ることは、その明るい窓から感じられる……その家はどいふ理由からか、彼には支那料理の店だと直覺が出来る……それをよくよく凝視して居ると、その街全體が、一旦だんだんと彼の鼻の上から遠ざかつて、いやが上に微小になり、もう消えると思ふうちに、非常な急速度で景色は擴大され、前のとその儘の街が、非常な大きさに、殆んど自然大に、それでもまだやまずに、とめどなく巨大に、まるで大世界一面になつて……それをぼんやり見て居ると、その街はまた靜かに縮小して、もとのミアチユアの街になつて、それとともに再び彼の鼻の上のもとの座に歸つて來た。彼はかうして數分間か、それとも數秒間に、メルヘンにある

小人國から巨人國へ、それから再び、巨人國から小人國へ、ただ一翔りで往復して居る心地がした。その市街が巨人國のものになった時に、彼自身の眼と眼との間の幅も一度に廣くなつて——ちやうど巨人のもののやうになつて、その爲めに眼界も一度に擴大されるやうな氣のすることもある。何かの拍子に、その幻の街が自然大位の巨大さで、ぱつたり動かなくなる時がある。彼は、突然、實際そんな街へでも自分は來て居るのではなからうかと、慌てて手さぐりでマツチを擦つて、闇のなかで自分のすすけた家の天井を見わたした事があつた。

それらの風景は、屢彼の目に現はれた。その現はれる都度、それは前度のものとは決して寸毫も變つたところがなかつた。それもこの現象に伴ふところの一つの不思議であつた。

或る時には、稀に、その風景の代りに自分自身の頭であることがあつた。自分の頭が豆粒ほどに感じられる……見る見るうちに擴大される……家一杯に……地球ほどに……無限大に……どうしてそんな大きな頭がこの宇宙のなかに這入りきるのであらう。と、やがてまたそれが非常な急速度で、豆粒ほどに縮小される。彼はあまりの心配に、思はず自分の手で自分の頭を撫で廻して見る。さうしてやつと安心する。滑稽に感じて笑ひ度くなる。その刹那に *Kon-kon* と電車のカアブする音が、眉の間を刺し徹す。

これら幻視や、幻感、併し、幻聴とはさほど必然的な密接な關係をもつて現はれるものではないらしかつた。一體に幻聴の方は、彼にとつて愉快であつたに拘はらず、こんな風に無限大から無限小へ、一足飛びに伸縮する幻影は、彼にさへ不氣味で、また惱ましかつた。

これらの怪異な病的現象は、毎夜一層はげしくなつて行くのを彼は感じた。彼はそれ等の現象を、彼の妻から傳はつて來るものと考へ始めた。汽車のひびき。電車の軋る音。活動寫眞の囃子。見知らぬ併し東京の何處かである街。それ等の幻影は、すべて彼の妻の都會に對する思ひつめたノスタルヂアが、恐らく彼の女の無意識のうちに、或る妖術的な作用をもつて、眠れない彼の眼や耳に形となり聲となつて現はれるのではなからうか、彼はさう假想して見た。それは最初には、ほんの假想であつた。けれども、何時とはなく、これが彼には眞實のやうに感ぜられ出して來た。それだから、妻の何時も居る臺所の方には東京のことの空想が一ぱい充満して居て、いつかの夕方ひとりで飯を炊いた時に、ふとあんな事が思ひ出されたのだ。と、彼はそんなことをも考へた。彼自身の如く、殆んど無いと言つてもいい程に意志の力の衰へて居る者の上に、意志の力のより強い他の人間の、或はこの空間に犇き合つて居るといふ不可見世界のスピリット達の意志が、自分自身のもの以上に、力強く働きかけるといふことはあり得べき事として、彼はそれを認めざるを得ないやうに思つた。生命といふものは、周圍にあるすべてのものを刻刻に征服し、それを食つて、そのなかの力を自分のなかに吸引して、而もそれを十分に統一して行く或る力である。肉體的には明らかにさうである。靈的にだつて、精神的にだつてさうに違ひない。さうして今や、他のものを吸集し統一する作用を持つた神祕な力は彼からだんだんと衰へ

て行きつつあつた。寧ろ彼は今まで持つて居る己自身を刻刻に發散してゐるのみであつた。彼が、闇といふものは何か隙間なく犇き合ふものの集りだ、それには重量があると氣附いたのもこの時である。

こんな風にして、彼の喜怒哀樂や恐怖は、現世界に生存して居る他の人人のそれとは、全く共通しがたい何物かになつて行つた。孤獨と無爲とこの兄弟は、實に奇異な力を持つて居るものである。――若し自分が今、修道院に居るとしたならば？ と、彼は或る時さう考へた。……若し、彼が彼の妻と一緒にこんな生活をしてゐるのでなく、永貞童女である美しいマリヤの畫像を毎日禮拜しながら、この日頃のやうな心身の狀態に居たならば、夜の幻影は、それは多分天國のもの、その不快なものは地獄のものであつたらう。さうして畫像のなかのけ高い優しい脣は生きて彼にものを言ひかけたであらう。さうして惱ましいもののすべては、畫家スピネロオ・スヒネリイが描いたといふ惡魔の醜さ厭はしさ怖ろしさをもつて彼に現はれ、彼の目の前に出沒して、彼を苦しめたであらう。又、あの一時の睡眠をも持たない夜が、戸の隙間からほのかに明け渡つた時に、ふと小鳥のしば鳴きを聞くあの淋しい、切ない、併しすがすがしい涙を誘はうとするやうな心持は、確かに懺悔心になつたであらう。修道院といふ處では、その生活の様式も思想の暗示も、すべてがそんな風な幻影を呼び起すやうに、呼び起し易いやうに。呼び起さねばならないやうにと、それらの色色の仕掛けで出來て居たのだから……。

彼はそんな事をも考へた。併し、その考へは、この當座よりもつと後になつて纏つた。「やぶちゃん注…次の章は、頭に短い新章の追加が入るものの、私の電子化の順序が戻って、

未定稿も「佐藤春夫 未定稿『病める薔薇 或は「田園の憂鬱」』（天佑社初版）（その1 6）」が相当となる。」

*

*

*

*

*

*

ふと彼の目の前へ人間の足の形が浮んで來た。足だけが中有「やぶちゃん注…「ちゆうう」」に浮いて居るやうであつた。それはどれほどの大きさであつたか解らないが、その大きさに就て、別だん注意を呼ばなかつたところを見ると、普通の人間のもののぐらゐであつたであらう。それは白い素足で美しかつた。それを見て居るうちに……つと、白い手の指がまた現はれた。それはエル・グレコの畫によくあるやうな形をした手なので、親指と人差指とが何か小さなものを撮んで「やぶちゃん注…「つまんで」」ゐる指であつた。……そのうちに手の方は消えたが、唯さつきの足だけがやはりそこに動いて居て、それがびよこびよこと、何かを踏むやうに動き出した。動く度ごとに爪先が上下して、そこに力がいつて、その都度足の指は尺取蟲のやうにかがんだり伸びたりする。……實に變な夢だなあ、と、彼は夢のなかで考へた。さうだ！ さうだ！ これや王禪寺の方へ遠足した時、道に迷うて這入つて行つた家の絲とり娘の足だ。その手だ。絲とり臺を踏んで居るのだ。紡がれて「やぶちゃん注…「つむがれて」」出る絲すべてをつまんで居る手つきだ。……さう思ふと、またその手の指が現はれて來る。田舎には珍らしい白い手や足だつた：

……ちらと彼を見上げた時には、いい顔をして居た。あそこへ行く途中、どこかで夕立がして……虹が浮んだ……山の中でそれを見た。あの娘は年は十六位だった……もつとはつきり、手や足だけではなしに姿もすつかり見えて来ればいいがなあ……。その動揺する白い素足だけの夢を見つづけて、そんな風なことを思ひ出して居ると、突然、あたりが一面に赤く明るくなつて……と見ると、燭臺の火が眩しく彼の目に射込んで来た。彼は目が覺めた。彼の妻は障子をあけて縁側から這入つて来る所であつた。便所へでも行つて来たのであらう。

「やぶちゃん注…「中有」衆生が死んでから次の縁を得るまでの間を指す「四有」の一つである。通常は、輪廻に於いて、無限に生死を繰り返す生存の状態を四つに分け、衆生の生を受ける瞬間を「生有」、死の刹那を「死有」、「生有」と「死有」の生まれてから死ぬまでの身を「本有」とする。「中有」は「中陰」とも呼ぶ。所謂、逝去から七七日（しちにち・なななぬか・四十九日に同じ）が、その「中有」に当てられ、中国で作られた偽経に基づく「十王信仰」（具体的な諸地獄の区分・様態と亡者の徹底した審判制度。但し、後者は寧ろ総ての亡者を救いとするための多審制度として評価出来る）では、この中陰の期間中に閻魔王他の十王による審判を受け、生前の罪が悉く裁かれるとされた。罪が重ければ、相当の地獄に落とされるが、遺族が中陰法要を七日目ごとに行つて、追善の功德を故人に廻向すると、微罪は赦されるとされ、これは本邦でも最も広く多くの宗派で受け入れられた思想である。恐らく、若い読者がこの語を知ることの多い契機は、芥川龍之介の「藪の中」の「巫女の口を借りたる死霊の物語」の中で、であらう。リンク先は私の古層の電子化物で、私の高校教師時代の授業案をブラッシュ・アップした『やぶちゃんの藪の中』殺人事件公判記録も別立てである。私は好んで本作を授業で採り上げた。されば、懐かしい元教え子もあるであらう。

「王禪寺」不詳。佐藤は中学までは、生地和歌山県東牟婁郡新宮町（現在の新宮市）で過ごしている。遠足というのだから、私は現在の新宮市内と思う。しかし、新宮市内には「王禪寺」という寺は、ない。似た寺名なり、新宮市高田に曹洞宗高禪寺（こうぜんじ）がある（グーグル・マップ・データ航空写真）。ここは山間部でロケーションも合うと思うのだが。最終章に出る現在の神奈川県川崎市麻生区王禪寺にある真言宗星宿山蓮華蔵院王禪寺（グーグル・マップ・データ）と混同しているように私には思われるのだが、識者の御教授を乞うものである。」

「もつと氣を付けてくれなけりやいけなぢやないか、何日も言ふとほり。俺は灯がちよつとでも目に這入ると直ぐ目が覺めるぢやないか。たつた今せつかく寝ついた所なのに」妻の方を見上げながら、眩しい目をしばたいて彼はがみがみ小言をいつた。

「私、氣をつけて居たつもりだったけれど。……あなた、きつと目をあけたままで睡つていらつしやるのね？」

妻はそんな事を言つて、今更慌ててその灯を吹きつけた。

「王禪寺がどうなすつたの？ あなた、今寢言をおつしやつてよ」

「いつ？」

「つい今、私が灯をともしようと思つてマッチを擦つた時」

彼は馬鹿ばかしい氣がした。夢のなかで綺麗な足だと思つて見たのは、きつと妻の足を見て居たのだ。おれは枕を外してしまつて、疊の上へぢかに横顔を押しつけて寝て居たらしいから、妻の足が歩いて行くのを見て夢だと思つて居たのだ。彼はさう氣がついた。それにしても、王禪寺の近所の一軒家に絲をとつて居た娘——その時には、そんな場所に美しい小娘が居て、寂しく、つましく絲を紡いで居るのを面白と思つたが、それつきり全く忘れてしまつて居た娘が、半意識の間に思ひ出されて來たのを、彼は珍らしく思つた。これは一例である。この時ばかりでは無い。その頃、彼はどうかして睡りたいと思ふと、よくこんな眠りを眠つて居るのであつた。

*

*

*

*

*

*

*

「決して熱なんかは無くつてよ、反つて冷たい位だわ」

彼の額へ手を翳して居た彼の妻は、さう言つて、手を其處からのけて、自分の額へ手を當てて居た「やぶちゃん注…新潮文庫版を参考にして示すなら、「當ててみてゐた」である」。

「私の方がよつぽど熱い」

それが彼には、反つて甚だ不満であつた。試みに測つて見ようと、檢温器を出させて見ると、それは度度の遠い引越しのために折れて居た。

若し熱のためでないとすれば、それはこの天氣のせみだ。このひどい風のせみだ。と彼は思つた。全くその日はひどい風であつた。あるかないかの小粒の雨を眞横に降らせて、雲と風自身とが、吹き飛んで居た。そのくせ非常に蒸暑かつた。こんな日には、彼は昔から地震に對する恐怖で怯えねばならなかつたのだけれども、今日はこの激しい風のためにその点だけは安心であつた。併し、風の日は風の日で、又その特別な天候からくる苛立たしい不安な心持が、彼を胸騒ぎさせたほどびくびくさせた。

「やぶちゃん注…」全くその日はひどい風であつた。あるかないかの小粒の雨を眞横に降らせて、雲と風自身とが、吹き飛んで居た。そのくせ非常に蒸暑かつた。こんな日には、彼は昔から地震に對する恐怖で怯えねばならなかつた」この部分、今回、電子化しながら、ふと、大きな疑問が湧いてきた。構造的には——雨或いは小雨であつて、さらに非常に蒸し暑い日に、主人公は——神経症的になるずっと「昔から」（少年期から）——「地震に對する恐怖で怯えねばならなかつた」というのだが（その条件下でも、風が強く吹いていると、例外として、その恐怖は発生しない、という奇体な話なのである）、それは何故かが判らないからである。そのような地震体験を佐藤春夫が実際に体験した可能性はゼロであると判断されるからである。則ち、ここでさりげなく言っている条件付き地震恐怖というのは、

実体験に基づくものではなく、何らかの象徴的な意味が隠されている——要は——精神分析を必要とする何らかの幼少年期の心的外傷^{トラウマ}、或いは、童話・物語による偽の疑似体験錯誤に

基づく、病的な潜在型の地震恐怖症であるということになるのではないか？ という疑いである。以下の段落が、それ（私はトラウマの可能性を強く支持する）を示唆するようにも思われるのである。識者の御見解を俟つものである。」

猫よ、猫よ。あとへあとへついて来い！

猫よ、猫よ。おくへおくへすつこめ！

ふと、劇しく吹き荒れる大風の底から一つの童謡の合唱が、ちぎれちぎれに飛んで来た。それらは風のかたまりに送り運ばれて、杜絶え勝ちに、彼の耳もとへ傳はつて来たやうに思はれた。けれども、それはやはり幻聴であつたのであらう。それは長い間忘れて居た彼の故郷の方の童謡であつたから。風の劇しい日（然うだ、こんな風の劇しい日に）子供たちが、特に女の子たちが、駆けまはりながら互に前の子の帶の後へつかまり合つたり、或は前の子の羽織の下へ首を突込んだりしながら、こんな謡を今のやうな節で繰り返し繰り返し合唱して、彼等は風のためにはしやぎながら、彼の故郷の家の門前の廣場をぐるぐると輪になつてめぐつて居たものであつた……。それはモノトナスな、けれどもなつかしいリズムをもつた疊句のある童謡で、また謡の心持にしつくりと嵌つた遊戲であつた。それを見惚れて、砂塵の風のなかで立つて居る子供の彼自身が、彼の頭にはつきりと浮んで来た。それが思ひ出の緒口「やぶちゃん注…「いとぐち」」になつた。その頃、……城跡のうしろの黒い杉林のなかで、――あの城山の最も高い石垣の眞下の、それに沿うた細い小道である。そこには大きな杉の林があつて、一面にかさなつた杉の幹のごく少しの隙間から川が見えた。船の帆が見えた。足もとには大きな齒朶が茂つて居る、小道はいつも仄暗かつた。さうして杉の森に特有の重い濡れた高い匂があつた。その道を子供のころ一ばん好きであつた。……もつと大きくなつてからもさうであつた。機械體操で怪我をして、二度麻酔剤をかけられた時に、彼の麻酔の夢は、その森の道を遊び歩いて居るところであつた。二度とも……。その林のなかで、或る夕方、大きな黒色の百合の花を見出した事、そのそばへ近よつてそれを折らうとして、よくよく見て居るうちに、急に或る怪奇な傳説風の恐怖に打たれて、轉げるやうに山路を駆け下りた。次の日、下男をつれてそのあたりを隈なく捜したけれども、其處には何ものもなかつた。それは彼には、奇怪に思へる自然現象の最初の現はれであつた。それは子供の彼自身の幻覺であつたか、それとも自然そのものの幻覺とも言へる眞實の珍奇な種類の花であつたか、それは今思ひ出しても解らない。ただその時の風にゆらゆらゆれて居るその花の美しさは、永く心に残つた。その珍しい花が、彼の「青い花」の象徴でもあつたやうに、彼はその頃からそんな風な寂しい子供であつた。さうして彼の家の後である城跡の山や、その裏側の川に沿うた森のなかなどばかりを、よく一人で歩いたものであつた。「鍋わり」と人人の呼んで居た淵は、わけても彼の氣に入つて居た。そこには石灰を焼く小屋があつた。石灰石、方解石の結晶が、彼の小さな頭に自然の神祕を教へた。又その淵には、時時四疊半位な大きな碧瑠璃の渦が幾つも幾つもの渦卷いたのを、彼はよく夢心地で眺め入つた。さうしてそれを夢そのもののなかでも時折見た。この頃は八つか九つでもあつたらう。……何か嘘をつくつと、その夜はきつ

と夜半に目が覺めた。さうしてそれが氣にかかつてどうしても眠れなかつた。母を揺り起して、その切ない懺悔をした上で、恕「やぶちゃん注..「ゆるし」。」を乞ふとやつと再び眠れた。……それから、然う、然う、夜半に機を織る箴の音を毎夜聞いたこともあつた。あの頃、俺は五つか六つぐらゐであつたらう。俺は、昔から、あの頃から、もう神經衰弱だつたのか知ら。さうして幻聽の癖もその頃からと見える——彼は、さう思ひ出して愕いた。それ等幼年時代の些細な出來事が、昨日の事よりもつとありありと（その時の彼には昨日のことはただ茫漠としてゐた）思ひ出された。一つ奇體なことには、つい三四ヶ月前、夏の終り頃に見た、或る山のなかの一軒家——そこには、百合と百日紅とが咲いて居た——その人氣のない大きな家に年とつた母と二人きりで居た小娘、その白い美しい足と手の指とが彼のうつつの夢に現はれたあの娘。それが童話の情調をもつて、彼の記憶のずつと奥の方へひつこんで行つて居ることであつた。さうして、それら彼の幼年時代の追想のなかへ、時得強ひて錯誤して織り込まれて、その奥深い記憶の森のなかで仙女にならうとして居るのであつた。彼は、さう思ひたがらうとしてゐる自分を、その度毎に氣がついて叱つた。いやいや、これはついこの間の事ではないか。さう自分をたしなめながら訂正した。……彼はかうして幼年時代の追想に耽りつづけた。而もそれらは悉く、今日まで殆んど跡方もなく忘却し盡して居たことばかりであつた。さうして、彼はその思ひ出のなかのその子供になつて、彼の母や兄弟や父を戀しく懷しく思ひやつた。一たい常に自分自身のことばかりより考へる事のない彼には、この時ほど切なくそれらの人人を思ひ出したことは、今までに決してなかつた。その父へも、母へも、どの兄弟へも、彼はもう半年の上も便りさへせずに居る。不縁で家に歸つてゐる耳の遠い姉が殊に悲しかつた。彼は第一に母の顔を思ひ出さうと努めて見た。それは半年ばかり前にも逢つたばかりの人でありながら、決して印象を喚び起し得られなかつた。纏らない印象を無理に纏め上げて見た時に、思ひがけなくも、奇妙にも、それは十七八年も昔の或る母の奇怪な顔になつた——母は丹毒に罹つて居た。——黒い藥を顔一面に塗抹して、黒い假面のやうな、さうして落窪んだ眼ばかりが光つて、その病床の傍へ來てはならないと、物憂げに手を振つた怪物のやうな母の顔であつた。子供の彼は、しくしくと泣きながら庭へ出て行つて、もつと泣いた。その泣いた目で見たばやけた山茶花の枝ぶりと、そののぼやけて簇つた花の一つ一つが、不思議と、母のその顔よりもつと明瞭に目に浮び出て來る……決して思ひ出したことのないやうな事柄ばかりが後へ後へ一列に竝んで思ひ浮んで來た。その心持がふと、彼に死のことを考へさせた。こんな心持は確に死を前にした病人の心持に相違ない。して見れば、自分は遠からず死ぬのではなからうか。……それにしても知つた人もないこんな山里で、自分は、今斯うして死んで行くのであらうか。……死んで行くのであるとしたならば？彼の空想は果しくなく流れた。彼は今まで未だ一度も死に就て直接に考へたことはなかつた。さうして彼はこの時、最初には、多少好奇的に彼の特有の空想の様式で、彼自身の死を知つた知人の人人のその時の有様を一つ一つ描いて見た。すさまじい風のなかに、この騷騷しい世界から獨立した靜寂へ、人の靈を誘ひ入れるやうに啼きしきるこほろぎの聲に彼は

耳を澄した。

彼は手をさし延べて、枕のずつと上の方にある書棚から、何か書物を手任せに抽かう「やぶちゃん注…「ぬかう。」とした。その手を書棚にかけた瞬間に、がちやん！と物の壊れる音がした。彼は自分自身が、何かをとり落したやうに、びくつと驚いて「やぶちゃん注…底本では「くつと」に傍点だが、流石にこれは誤植であるから、特異的に訂した、」あたりを見まはした。それは彼の妻が臺所の方で、ものを壊した音が、風に吹きとばされて聞えて來たのであつた。

彼の書棚も今は哀れなさまであつた。其處には僅かばかりの古びた書物が、塵のなかで、互に支へ合ひながら横倒しになりかかつて立つて居た。あまり金目にならないやうなものばかりが自然と残つて、それは兩三年來、どれもこれも見飽きた本ばかりであつた。彼が今抽き出したのは譯本のファウストであつた。彼は自分の無益な、あまりに好奇的な自身自身の死といふ空想から逃れたいために、何の興味をも起さないその本をなりと讀まうとした。けれども、風の音は斷えず耳もとを掠めた。臺所の流し元に唯一枚嵌められて居るガラス板が、がちやがちやと搖れどほしに搖れて、彼の耳と心とを癩立たせた。

彼は腹這ひになつて、披げた頁へ目を曝して行つた。

現世以上の快樂ですね。

闇と露との間に山深くねて、

天地を好い氣持に懷に抱いて、

自分の努力で天地の髓を搔き捲り、

六日の神業を自分の胸に體驗し、

傲る力を感じつつ、何やら知らぬ物を味ひ、

時としては又溢るる愛を萬物に及ぼし、

下界の子たる所が消えて無くなつて

偶然、それは「森と洞」「やぶちゃん注…「ほら。」」の章のメフィストの白「やぶちゃん注…「せりふ。」」であつた。この言葉の意味は、彼にははつきりと解つた。これこそ彼が初めてこの田舎に來たその當座の心持ではなかつたか。

彼は床の中からよけて立ち上つた、机の上から赤いインキとペンとを取るために。さうして今讀んだ句からもつと遡つて、洞の中のファウストの獨白から讀み初めた。彼はペンの赤いインキを含ませて讀んで行くところの句の肩に一一アンダラインをした。その線を、活字には少しも觸れないやうに、又少しも歪まないやうに、彼は細い極く神経質な直線を引いて行つた。それがぶるぶるとふるへる彼の指さきには非常な努力を要求した。

……………

手短かに申せば、折折は自ら斯く快さを

お味ひなさるも妨げなしです。

だが長くは我慢が出來ますまいよ。

もう大ぶお疲れが見えてゐる。

これがもつと續くと、陽氣にお氣が狂ふか、

陰氣に臆病になつてお果てになる。

もう澤山だ……

アンダアラインをするのに氣をとられて、句の意味をもう一度読みかへした時に、初めてはつと解つた。メフィストは、今、この本のなから俺にものを言ひかけて居るのだ。おお、悪い豫言だ！ 陰氣に臆病になつてお果てになる。それはほんとう「やぶちゃん注…ママ。」か、これほど今の彼にとつて適切な言葉が、たとひどれほどの浩瀚な書物の一行一行を片つぱしから、一生懸命に搜して見ても、決してもう二度とはここへ啓示されさうもない。それほどこの言葉は彼の今の生活の批評として適切だ。適切すぎるその活字の字面を見て居ると、彼はその活字が少しづつ怖ろしいやうな心にさへなつた。

「まあ、何といふひどい風なのでせう。裏の藪のなかの木を御覽なさい。細い癖にひよろひよると高いものだから、そのひよろひよるへ風のアたること！ 怖ろしいほど搖れてよねえ折れやしないでせうか」彼の妻の聲は、風の音に半ばかき消されて遠くから來たやうに、さうして何事か重大な事件か寓意かを含んで居るらしく、彼の耳に傳はつた。

氣がついて見ると、彼の妻は彼の枕もとに立つて居た。彼の女はさつきから立つて居たのであつた。妻は彼に食事のことを聞いて居た。彼は答へようとししないで、いかにも大儀らしく寢返りをして、妻の方から意地悪く顔をそむけた。けれども再び直ぐ妻の方へと向き直つた。

「おい！ さつき何か壊したね」

「ええ、十錢で買った西洋皿」

「ふむ。十錢で買った西洋皿？ 十錢の西洋皿だから壊してもいいと思つて居るのぢやないだらうね。十錢だの十圓だのと、それは人間が假りに、勝手につけた値段だ。それにあれは十錢以上に私には用立つた。皿一枚だつて貴重なものだ。まあ言はばあれだつて生きて居るやうなものだ。まあ、其處へ御坐り。お前はこの頃、月に五つ位はものを壊すね。皿を手を持つて居て、皿の事は考へないで、ぼんやり外のことを考へる。それだから、その間に皿は腹を立てて、お前の手から逃げ出す。すべり落ちるんだ。一たい、お前は東京のことばかり考へて居るからよくない。お前はここのさびしい田舎にある豊富な生活の鍵を知らないのだ。ここだつてどんなに賑やかだかよく氣をつけて御覽。つまらないとお前の思つてゐる臺所道具の一つ一つだつて、お前が聞くつもりなら、面白い話をいくらでもしてくれるのだ。生活を愛するといふことは、ほんとに楽しく生きるといふことは、そんな些細な事を、日常生活を心から十分に楽しむといふ以外には無い筈ではないか……」

彼は囁言のやうに小言を言ひつづけた。それは、その日ごろの全く沈黙勝ちな彼としては、珍らしい長談義であつた。彼はあとからあとと言葉を次ぎ足してしやべりつづけた。さうしてゐるうちに妻に言ふつもりであつた言葉が、いつか自分に向つての言葉に方向を變へて居た。さうしてそれは平常、彼が考へても居ないやうな思ひがけない考への片鱗であるのに、喋りながら氣がついた。そこに、彼にとつて新らしい思想がありさうに思

つた時、彼が言はうと思つて居る處へは、もう言葉がとどかなくなつて居た。ただ思想の上つらを言葉がぎくしやくと滑つて居るだけであつた。「日常生活の神聖、日常生活の神祕」彼は、人間の言葉では言へない事を言はうとしてゐるのだ、と自分で思つた。さうして遂に口を噤んだ。

二人は押し黙つて荒れ狂ふ嵐の音を聞いたが、暫くして妻は、思ひきつて言つた。

「あなた、三月にお父さんから頂いた三百圓はもう十圓ぼちよりなくなつたのですよ」

彼はそれには答へようもしないで、突然口のなかで呟くやうにひとりごとを言つた。

「おれには天分もなければ、もう何の自信もない……」

*

*

*

*

*

*

*

闇が彼の身のまはりに犇ひしめいて居た。それは赤や緑や、紫やそれらの隙間のない集合で積重ねてあつた、無上に「やぶちゃん注…「むしろやうに」。」重苦しい闇であつた。彼は闇のなかでマツチを手さぐり、枕もとの蠟燭に灯をとると寢床から起き上つた。さうしてその燭臺を、隣に眠つて居る妻の顔の上へ、ぢつとさしつけた。けれども深い眠に陥入つて彼の女は、身じろぎもしなかつた。彼はしばらくその女の無神経な顔を、蠟燭の揺れる光のなかで、ぢつと視つめて見た。彼はこの時、自分の妻の顔を、初めて見る人のやうに物珍らしくつくづくと見た。

蠟燭の光はものの形を、光の世界と影の世界との二つにくつきりと分けた。その光のなかで見た人間の顔は、強い片光「やぶちゃん注…「かたひかり」。」を浴びて、その赤い光の強い濃淡から生ずる効果は、人間の顔の感じを全く別個のものにして見せた。彼は人間の顔といふものは――唯に自分の妻だけではなく、一般にかうも醜いものであらうかと、つくづくさう感じた。それは不氣味で陰惨で醜惡な妙な一つのかたまりのものとして彼の目に映じた。女は枕元に、解きほどいた束髪のかもじを黒く丸めて置いて居た。奇妙な現象には、彼はそのかもじを見た時に、これが、ここに眠つて居る女が自分の妻だつたのだと初めて氣がついた。

彼は燭臺を高く少し持上げたり、或は女の顔の耳の直ぐわきへくつつけて見たり、暫くその光の與へる効果の變化を實驗して遊ぶかのやうに、それをいろいろと眺めて居た。彼の妻はそんなことには少しも氣がつかずに眠つて居る。寢返りもしない。こんな女は、今若し喉もとへ劍を差しつけられても、それでも平氣で眠つて居るだらうか。いや、そんな場合には、いかに無神経なこの女でも、さすがに人間の本能として當然目を睜く「やぶちゃん注…「みひらく」。」であらう。さうでなければならぬ。彼はそんなことを考へた。さうして、若しやこの女は今、殺される夢でも見ては居ないだらうかとも思つた。……それにしても、かうした光の蠱惑から人間といふものはさまざまなことを思ひ出すものである。こんなことから、實際人を殺さうと決心した男が、昔からなかつただらうか……

「尤も、俺は今この女を殺さうとして居るわけではないのだが」

彼は思はず小聲でさう言つた。自分自身の愕くべき妄想に對して、慌てて言ひわけした

のである。

「そこでと……俺は今何のためにこんなことをして居たのだつたけな」

彼は氣がついて急に妻を揺り起した。

夜中である。

妻はやつと目を覺したが、眩しさうに、搖れて居る蠟燭の光を避けて、目をそむけた。

さうして未だ十分に目の覺めて居ない人がよくする通りに口をもがもがと動かして、半ば口のなかで、

「また戸締りですか、大丈夫よ」

さう言つて、寢返りをした。

「いいや、便所へ行くんだ。ちよつとついて行つてくれ」

厠から出て來た彼は、手を洗はうとして戸を半分ばかり繰つた。すると、今開けた戸の透間から、不意に月の光が流れ込んだ。月はまともに縁側に當つて、歪んだ長方形で板の上に光つた。不思議なことには、彼はこれと同じやうに、全く同じやうに月の差込んで居る縁側をちやうど今のさつき夢に見て、目がさめたところであつた。何といふ妙な暗合であらう。彼には先づそれが怪奇でならなかつた。さうして、今、自分達がかうして此處に立つて居ることも、夢のつづきではないのか……ふと、さう疑はれた。

「おい、夢ではないんだね」

「何がです。あなた寢ぼけていらつしやるのね」

蠟燭は彼の妻の手に持たれて、月の光を上から浴びせかけられて、ほんのりと赤くそれ自身の光を失つた。光の穂は風に吹かれて消えさうになびいたが、彼の妻の袖屏風の陰で、ゆらゆらと大きく搖れた。風は何時の間にかおだやかになつて居たが、雲は凄じい勢で南の方へ押奔つて居た。小雨を降らせて通り過ぎる眞黒な雲のぱつくりと開けた巨きな口のファンタステイックな裂目から、月は彼等を冷え冷えと照して居た。

彼は手を洗ふことを忘れて、珍らしいその月を見上げた。それは奇妙な月であつた。幾日の月であるか、圓いけれども下の方が半分だけ淡くかすれて消え失せさうになつて居た。併し、上半は、黒雲と黒雲との間の深い空の中底に、研ぎすましたやうに冴え冴えとして、くつきりと浮び出して居た。その上半のくつきりした圓さが、何かにひどく似て居ると、彼は思つた。然うだ。それは頭蓋骨の顱頂のまるさに似て居る。さう言へば、その月の全體の形も頭蓋骨に似て居る。白銀「やぶちゃん注：「しろがね」」の頭蓋骨だ。研ぎすました、或は今鎔爐からとり出したばかりの白銀の頭蓋骨だ。彼の聯想の作用は、ふと海賊船といふやうなものの事を思ひ出させた。「神聖な海賊船」どういふわけかそんな言葉を思ひ浮べた。彼は青い月を飽かずに眺めた。ああ、これと同じ事が、全く同じことが、その時も俺はここにかうして立つて居た。雲の形も、月の形もこれとそっくりだつた。どこからどこまで寸分も違はない。そればかりかその時にもかう思つたのだつた。今と同じ事を思つたのだつた。遠い微かな穴の奥底のやうな昔にも、現在と全然同一な、そっくりそのままで重り合ふ、寸分の相違もない出來事が曾てもあつた……茫然として、彼は瞬間的

にさう考へた……何時の日のことだつたらう……何處であつたらう……

空一面を飛び奔る斷れ雲「やぶちゃん注…「ちぎれぐも」。」はもう少しで月を、白銀の頭蓋骨を吞まうとして居る。

「もう、閉めてもいい？」

妻は、寒さうにさう言つた。

彼はその言葉で初めて我に歸つたのか、手を洗はうと身を乗り出した。その瞬間であつた。

「や、大變！」

「え？」

「犬だ！」

「犬？」

彼は即座に手早く、戸締りに用ゐた竹の棒を引つつかむと、力任せに、それを庭の入口の方へ投げ飛した。彼の目には、もんどりを打つ竹ぎれからす早く身をかはして、いきなりそれを目がけて飛びかかると、その竹片「やぶちゃん注…「たけぎれ」。」を啞へたまま、眞しぐらに逃げて行く白犬が、はつきりと見えた。尾を股の間へしつかりと挟んで、耳を後へ引きつけ、その竹片に噛みついた口からは、白い牙を露して、涎をたらたらと流しながら、彼の家の前の道をひた走りに走つて行く。月光を浴びて、房房した毛の大きな銀色の彪犬「やぶちゃん注…「むくいぬ」。」、その織るやうな早足、それが目まぐるしく彼の目に見える。それは王禪寺といふ山のなかの一軒の寺の犬だつた。その形は明確に細密に、一瞬間のうちに彼には看取出來た。

「狂犬だよ！」

彼は自分の犬どもの名を慌しく呼んだ。呼びつづけた。其處らには居ないのか、犬どもは彼の聲には應じなかつた。妻には何事が起つたのか、少しも解らなかつた。併し、夫のさうするままに、彼の妻も聲を合せて犬の名を呼んだ。その甲高い聲が丘に飮した。七八度も呼ばれると、重い鎖の音がして、犬どもは、二足とも同時に、いかにものつそりと現はれた。さうして鎖をぢやらんぢやらんと言はせながら身振ひして、主人の不意な召集を訝しく思ひながらも、彼等は尾をちぎれるほどはげしく振り、鼻をくんくんとならした。

月は雲のなかに吞まれてしまつた。

彼は妻の手から燭臺を受け取るや否や、それを、犬どもの方へ差し出したが、一時に風に吹き消された。直ぐに、ランプに灯をともし代へて見たが、彼の犬には別に何の變事もないらしかつた。

「ああ、愕いた。俺はうちの犬が狂犬に噛まれたかと思つた」

彼は寢牀に這入つたが、妻にむかつて、今見たところのものを仔細に説明した。彼の妻は最初からそれを否定した。いかに明るくとも月の光で、そんなにはつきりと見える筈はない。それに王禪寺の犬は、なる程、狂犬になつたのだ、けれども、もう一週間も十日も前に、そのために屠殺された。その時、お絹が、

「だから、お宅の犬もお氣をおつけなさい」

とさう言つた。その事は、その時彼の女自身の口から彼に話した筈だつた。——妻は事を分けて、宥めるやうに彼に説明するのであつた。しかし彼は王禪寺の犬が氣違ひになつた話などは聞いたこともないと思ふ。

「犬の幽霊が野原をああして驅けまはつて居たのだ。さうして、さういふ靈的なものは俺にばかりしか見えないのだ……。」……憂鬱の世界、呻吟の世界、靈が彷徨する世界。俺の目はそんな世界のためにつくられたのか——憂鬱な部屋の憂鬱な窓が憂鬱な廢園の方へ見開かれて居る。彼はそんな風に考へた。俺の今生きてゐるところは、ここはもう生の世界のうちでは無く、さうかと言つて死の世界でもなくその二つの間にある或る幽冥の世界ではないか。俺は生きたままで死の世界に彷徨してゐるのであらうか……ダンテは肉體をつけたままで天界と地獄をめぐつたと言ふならば……。少くとも、少くとも俺が今立つて居る處は、死滅をその底にしてその方へ著しく傾斜して居る坂道である……

「やぶちゃん注…『佐藤春夫 未定稿『病める薔薇 或は『田園の憂鬱』』(天佑社初版版)(その17)」を参照されたい。」

* * * * *

その翌日——雨月の夜の後の日は、久しぶりに晴やかな天氣であつた。天と地とが今朝一甦(よみが)へつたやうであつた。森羅萬象は、永い雨の間に、何時しかもう深い秋にも化(かは)つて居た。稻穂にふりそそぐ日の光も、そよ風も、空も、其處に唯一筋纖絲

「やぶちゃん注…『せんし』。」のやうに浮んだ雲も、それは自づと、夏とは變つて居た。

すべては透きとほり、色さまさまな色ガラスで仕組んだ風景のやうに、彼には見えた。彼はそれを身體全部で感じた。彼は深い呼吸を呼吸した。冷たい鮮かな空氣が彼の胸に眞直ぐに這入つて行くのが、いかなる飲料よりも甘かつた。彼の妻が、この朝は毎日のやうに犬どもを繋いで置けなかつたのも無理ではない。それはよい處置であつた。遠い畑の方では、彼の犬が、フラテもレオも飛び廻つて居るのが見られた。百姓の若者がレオの頭を撫でて居た。音無しいレオは、喜んでするに任せて居る——太陽に祝福された野面や、犬や、そこに身を踴めて「やぶちゃん注…『かがめて』。」居る働く農夫などを、彼はしばらく恍惚として眺めた。日は高い。この景色を見るために、何故もつと早く目が覺めなかつたらうと、彼は思つた。縁を下りて、顔をば洗ふと「やぶちゃん注…新潮文庫版を参考にするならば、ここは「洗はうと」である。」庭を通ると白い犬が昨夜啞へて行つた筈の竹片は、萩の根元に轉がつて居た。彼は思はず苦笑した。それは、併し、寧ろ樂しげな笑ひであつた。

「やぶちゃん注…底本では以上の段落の冒頭の一字空けがないが、特異的に一字空けた。無論、新潮文庫版でも一字下げになっている。」

井戸端には、こぼれた米を拾はうとして——妻はわざわざ餘計にこぼしてやつたかも知れないと彼は思つた——雀が下りて居た。今までつひぞこで見たこともないほど澤山

で、三四十羽も群れて居た。彼の蹻音に愕かされると、それが、一時に飛び立つて、そこらの枝の上に逃げて行つた。逃げたりなどはしなくてもいいのに。その柿の枝には雀とは別の名も知らぬ白い顔の小鳥も居た。その時彼は鳥に説教した聖フランシスを、思ひ出した。彼の家の軒端からのぼる朝の煙が、光を透して紫の羅「やぶちゃん注」：「うすもの」のやうに柿の枝にまつはつた。雨に打ち碎かれて、果は咲かなくなつて居た薔薇「やぶちゃん注」：くどいが、「さうび」である。」が、今朝はまたどこどこに咲いて居る。蜘蛛の網は、日光を反射する露でイルミネエトされて居た。薔薇の葉をこぼれた露は、轉びながら輝いて蜘蛛の網にかかると、手にはとる術もない、瞬間的の寶玉の重みに、網は大様にゆれた、露は絲を傳うて低い方へ走つて行く、ぎらりと光つて、下の草に落ちる。それらの月並の美を、彼は新鮮な感情をもつて見ることが出来るのであつた。

水を汲み上げようと繩つるべを持ち上げたが、ふと底を覗き込むと、其處には涯知らぬ蒼穹を徑「やぶちゃん注」：「わたり」。「三尺の圓に區切つて、底知れぬ瑠璃を平靜にのべて、井戸水はそれ自身が内部から光り透きとほるもののやうにさへ見えた。彼はつるべを落す手を躊躇せずには居られない。それを覗き込んで居るうちに、彼の気分は井戸水のやうに落着いた。汲み上げた水は、寧ろ、連日の雨に濁つて居たけれども、彼の静かな気分はそれ位を恕すには十分であつた。

妻の用意した食卓についた時には、彼の心は平和であつた。食卓には妻が先日東京から持つて來た變つた食物があつた。火鉢の上には鐵瓶が滾つて「やぶちゃん注」：「たぎつて」。居た。さうして、陰氣な氣持は妻の言つたとほりいやな天氣から來たものだつた――と、彼は思つた。彼は箸をとり上げようとして、ふと、さつき井戸端で見た或る薔薇の答の事を思ひ出した。

「おい、氣がつかかなかつたかい。今朝はなかなかいい花が咲いて居るぜ。俺の花が。二分どほり咲きかかつてね、それに紅い色が今度のは非常に深い落着いた色だぜ」

「ええ、見ましたわ、あの眞中のところに高く咲いたあれなの？」

「さうだよ。一莖獨秀當庭心「やぶちゃん注」：新潮文庫版を参考にすれば、「一莖獨り秀でて庭心に當たる」と訓読する。」――て奴さ」彼はそれからひとり言に言つた。

「新花對白日「やぶちゃん注」：同前で「新花 白日に對す」と訓読する。」か、いや白日は可笑しい。何しろ彼等は季節はづれだ……」

「やつと九月に咲き出したのですもの」

「どうだ。あれをここへ摘んで來ないかい」

「ええ、とつて來るわ」

「さうして、ここへ置くんだね」彼は圓い食卓の眞中を指でとんとん「やぶちゃん注」：新潮文庫版では、この「とんとん」に傍点「ゝ」が打たれてある。」たたきながら言つた。妻は直ぐに立上つたが、先づ白い卓布を持つて現はれた。

「それでは、これを敷きませう」

「これはいい。ほう！ 洗つてあつたのだね」

「汚れると、あの雨では洗濯も出来ないと思つてしまつて置いてあつたの」

「これや素的だ！ 花を御馳走に饗宴を開くのだ」

樂しげな彼の笑ひを聞きながら、妻は花を摘むべく立ち去つた。

彼の女は花を盛り上げたコップを持つて、直ぐ歸つて來た。少し芝居がかりと見える不自然な様子で、彼の女はそれを捧げながらいそいそと這入つて來た。それが彼には妙に不愉快であつた。彼自身が、人惡く諷刺されて居るやうに感じられた。彼は氣のない聲で言つた。

「やあ、澤山とつて來たのだなあ」

「ええ、ありつたけよ。皆だわ！」

さう答へた妻は得意げであつた。それが彼にはいまひましかつた。言葉の意味の通じないのが。

「なぜ？ 俺は一つでよかつたんだ」

「でもさうは仰言らないのですもの」

「澤山とでも言つたのかね……それ見ろ。俺は一つで澤山だつたのだ」

「ぢや外のは捨てて來ませうか」

「いいよ。折角とつて來たものを。まあいい。其處へお置き。……おや、お前は何だね――俺の言つた奴は採つて來なかつたのだね」

「あら、言つたの言はないのつて、これだけしきあ無いんですよ！ 彼處「やぶちゃん注…新潮文庫版では「あすこ」と振る。」には」

「然うかなあ。俺は少し、底に斯う空色を帶びたやうな赤い荅があつたと思つたのに。それを一つだけ欲しかつたのさ」

「あんな事を。底に空色を帶びたなんて、そんな難しいのではないわ、それやきつと空の色でも反射して居たのでせうよ」

「成程、それで……？」

「あら、そんな怖い顔をなさるものぢやない事よ。私が惡かつたなら御免なさいね。私はまた、澤山あるほどいいかと思つたものですから……」

「さう手軽に謝つて貰はずともいい。それより俺の言ふことが解つて貰ひ度い……一つさ。その一つの荅を、花になるまで、目の前へ置いて、日向へ置いてやつたりして、俺はぢつと見つめて居たかつたのだ。一つをね！ 外のは枝の上にあればいい」

「でも、あなたは豊富なものが御好きぢやなかつたの」

「つまらぬものがどつさりより、ほんとうにいいものが只一つ。それがほんとうの豊富さ」

彼は自分の言葉を、自分で味つて居るやうに沁み沁みと言つた。

「さあ、早く機嫌を直して下さい。せつかくこんな朝なのに……」

「さうだ、だから、せつかくのいい朝だから、俺はこんな事をされると不愉快なのだ」

彼は、併し、そんなことを言つて居るうちにも、妻がだんだん可哀想になつて居る。さうして自分で自分の我儘に氣がついて居た。妻の人差指には、薔薇の刺で突いたのであら

う、血が吹滲んで居る。それが彼の目についた。併し、そんな心持を妻に言ひ現はす言葉が、彼の性質として、彼の口からは出て來なかつた。寧ろ、その心持を知られまい、知られまいと包んで居る。さうしてどこで不快な言葉を止めていいやら解らない。それが一層彼自身を苛立たせる。彼は強ひて口を噤んだ。さて、その花を盛り上げたコップを手に取上げた。最初は、それを目の高さに取上げて、コップを透して見た。緑色の葉が水にひたされて一しほに縁である。葉うらがところどころ銀に光つて居る。そのかげにほの赤い刺も見える。コップの厚い底が水晶のやうに冷たく光つて居る。小さなコップの小さな世界は縁と銀との清麗な秋である。

彼はコップを目の下に置いた。さうして一つ一つの花を、精細に見入つた。其處にある花は花片も花も、不運にも皆蝕んで居る。完全なものは一つもなかつた。それが少し鎖まりかかつた彼の心を掻き亂した。

「どうだ、この花は！ もつと吟味をしてとつて來ればいいのに。ふ、みんな蝕ひだ」

彼は思はず吐き出すやうにさう言つて仕舞つたが、又、妻が氣の毒になつた。急にその中の最も美しい荅を一本抜き出すと、彼は言葉を和げて、

「ああ、これだよ。俺の言つた荅は。それ、此處にあつた！ 此處にあつた！」

彼の言葉のなかには、その言葉で自分を和げて、妻の機嫌をも直させようとする心持があつた。けれども、妻は荅へようとはしないで、黙つて彼の女自身の御飯を茶碗に盛つて居るのであつた。彼は横眼でそれを睨みながら、妻の額を偷視た「やぶちゃん注…ぬすみみた」。このコップを彼處「やぶちゃん注…新潮文庫版によれば、「あそこ」。」へ、額の上へたたきつけてやつたなら。いや、いけない。もともと自分が我儘なのだ。彼は仕方なく、寂しく切ない心をもつて、その撮み「やぶちゃん注…つまみ」。上げた荅を、彼自身の目の前へつきつけて眺めだした。……その未だ固い荅には、ふくらんだ横腹に、針ほどの穴があつた。それは幾重にも幾重にも重つた荅の赤い葩「やぶちゃん注…「はなびら」。」を、白く、小さく、深く蕊まで貫いて穿たれてあつた、言ふまでもなくそれは蟲の仕業である。彼は厭はしげに眉を寄せながら尙もその上に荅を視た。

はつと思ふと、彼はそれを取り落した。

その手で、す早く、滾つて居る鐵瓶を下したが、再び荅を撮み上げると、直ぐさまそれを火の中へ投げ込んだ。——荅の花片はぢぢちと焦げる……。そのおこり立つた眞紅の炭火を見た瞬間、

「や！」

彼は思はず叫びさうになつた。立ち上りさうになつた。それを彼はやつと耐へた——ここで飛び上つたりすれば、俺はもう狂人だ！ さう思ひながら、彼は再び手早に、併し成可く沈着に、火鉢で焼けて居る花の荅を、火箸の尖で撮み上げるや、傍の炭籠のなかに投げ込んだ。彼はこれだけの事をして置いて、さて、火鉢の灰のなかをおそるおそる覗き込むと、其處には何もない。今あつたやうなものは何もない。愕き叫ぶべきものは何もない。彼は灰の中を掻きまはして見た。底からも何も出ない。水に滴らした石油よりも一層早く、

灰の上一面をぱつと眞青に擴がつた！と彼の見たのは、それは唯ほんの一瞬間の或る幻であつたのであらう。

彼は炭籠の底から、もう一度荅を拾ひ出した。火箸でつままれた荅は、焼ける火のために色褪せて、それに眞黒な炭の粉にまみれて居た。さて、その莖を彼は再び吟味した。其處には彼が初めに見たと同じやうに、彼の指の動き方を傳へて居る莖の上には花の萼から、蝕んだただ二枚の葉の裏まで、何といふ蟲であらう——莖の色そつくりの青さで、實に實に細微な蟲、あのミニアチュアの幻の街の石垣ほどにも細かに積重り合うた蟲が、莖の表面を一面に無數の数が、針の尖ほどの隙もなく、裏み覆うて居るのであつた。灰の表を一面の青に、それが擴がつたと見たのは幻であつたが、この莖を包みかぶさる蟲の群集は、幻ではなかつた——一面に、眞青に、無數に、無數に……

「おお、薔薇、汝病めり！」

ふと、その時彼の耳が聞いた。それは彼自身の口から出たのだ。併しそれは彼の耳には、誰か自分以外の聲に聞えた。彼自身ではない何だか「やぶちゃん注…ママ。新潮文庫版では、「何だかが」」、彼の口に言はせたとしか思へなかつた。その句は、誰かの詩の句の一句である。それを誰かが本の扉か何かに引用して居たのを、彼は覺えて居たのであらう。

彼は成るべく心を落ちつけようと思ひながら、その手段として、目の前の未だ伏せたままの茶碗をとつて、それを靜かに妻の方へ差し出した。その手を前へ突き延す刹那、

「おお、薔薇、汝病めり！」

突然、意味もなく、又その句が口の先に出る。

彼はやつと一杯だけで朝飯を終へた。

妻はしくしくと泣いて居た。「嗟！また始まつたか」と心のなかで彼の女の夫に就て呟きながら。さうして食卓を片附けつつ、その花のコップをとり上げたが、さてそれをどうしようかと思惑うて居た。あの蝕んだ焼けた荅は、彼が無意識に捲り碎いたのであらう——火鉢の猫板の上に、粉粉に裂き刻まれて赤くちらばつて居た。彼はそれらのものを見ぬふりをして見ながら、庭へ下りようと片足を縁側から踏み下す。と、その刹那に、

「おお、薔薇、汝病めり！」

フェアリー・ランドの丘は、今日は紺碧の空に女の脇腹のやうな線を一しほくつきりと浮き出させて、美しい雲が、丘の高い部分に小さく聳えて末廣に茂つた木の梢のところから、いとも輕輕と浮いて出る。黄ばんだ赤茶けた色が泣きたいほど美しい。何時か一日のうちに紫に變つた地の色は、あの緑の縦縞を一層引立てる。そのうへ、今日は縞には黒い影の絲が織り込まれて居る。その丘が、今日又一倍彼の目を牽つける。

「俺は、仕舞ひには彼處で首を縊りはしないか？彼處では、何かが俺を招いてゐる」

「馬鹿な。物好きからそんなつまらぬ暗示をするな」

「陰氣にお果てなさねばいいが」

彼の空想は、彼の片手をひよつくりと擧げさせる。今、その丘の上の目に見えぬ枝の上に、目に見えぬ帶をでも投げ懸けようとするかのやうに……

「おお、薔薇、汝病めり！」

井戸のなかの水は、朝のとほりに、靜かに圓く漾へられて居る「やぶちゃん注：」「たたへられてゐる」。それに彼の顔がうつる。柿の病葉が一枚、ひらひらと舞ひ落ちて、ぼつりとそこに浮ぶ。その軽い一點から圓い波紋が一面に靜にひろがつて、井戸水が揺らめく。さうしてまたもとの平靜に歸る。それは靜で、靜である。涯しなく靜である。

「おお、薔薇、汝病めり！」

薔薇の叢には、今は、花は一つもない。ただ葉ばかりである。それさへ皆蝕ひだ。ふと、目につくので見るともなしに見れば、妻は今朝の花を盛つたコップを臺所の暗い片隅へ、棚の片わきへ、ちよこんと淋しく、赤く、それを隠すやうに置いて居る。それが彼の目を射る。

「お前はなぜつまらない事に腹を立てるのだ。お前は人生を玩具にして居る。怖ろしい事だ……。お前は忍耐を知らない」

「おお、薔薇、汝病めり！」

裏の竹藪の或る竹の或る枝に、葛の葉がからんで、別に風とでもないのに、その唯一枚だけが、不思議なほど盛んに、ゆらゆらと左右に揺れて居る。さうしてその都度、葉裏が白く光る――それを凝と見つめて居ても……。彼を見つけた犬どもが、いそいそ野面から飛んで歸つて、兩方から飛び継る。それを避けようと身をかはしても……。どこかの樹のどこかの枝で、百舌が、刺すやうにきりきり鳴き出しても……。渡鳥の群が降りちらばるやうに、まぶしい入日の空を亂れ飛ぶのを見上げて……。明るい夕空の紺青を仰いで……。向側の丘の麓の家から、細細と夕餉の煙がゆれもせず靜に立昇るのを見ても……

「おお、薔薇、汝病めり！」

言葉がいつまでも彼を追つかける。それは彼の口で言ふのだが、彼の聲ではない。その誰かの聲を彼の耳が聞く。それでなければ、彼の耳が聞いた誰かの聲を、彼の口が即座に眞似るのだ。――彼は一日、何も口を利かなかつた筈だつたのに。

犬どもは聲を揃へて吠えて居る。その自分の山彦に怯えて、犬どもは一層はげしく吠える。山彦は一層に激しくなる。犬は一層に吠え立てる……。彼の心持が犬の聲になり、犬の聲が彼の心持になる。暗い臺所には、妻が竈へ火を焚きつける。妻が東京へ引き上げたいといふ氣持は、たしかにこんな時に彼處で養はれるに違ひない。何處から歸つて來た猫が、夕飯の催促をしてしきりと鳴く。ぱつと火が燃え立つと、妻の顔は半面だけ眞赤に、醜く浮び出す。その臺所の片隅では、薔薇のコップが、暗「やぶちゃん注：」「やみ」。のなかでぼつりと浮び出して来る。その薔薇は、蝕ひの薔薇は煙がつて居る！

彼はランプへ灯「やぶちゃん注：新潮文庫版では「火」。をともしようと、マッチを擦る、ぱつと、手元が明るくなつた刹那に、

「おお、薔薇、汝病めり！」

彼はランプの心へマッチを持つて行くことを忘れて、その聲に耳を傾ける。マッチの細い軸が燃えつくすと、一旦赤い筋になつて、直ぐと味氣なく消え失せる。黒くなつたマツ

チの頭が、ぽつりと畳へ落ちて行く。この家の空気は陰氣になつて、しめつぽくなつて、腐つてしまつて、ランプへ火がとらなくなつたのではあるまいか。彼は再びマツチを擦る。

「おお、薔薇、汝病めり！」

何本擦つても、何本擦つても。

「おお、薔薇、汝病めり！」

その聲は一體どこから來るのだらう。天啓であらうか。預言であらうか。ともかくも、言葉が彼を追つかける。何處までも何處までも……

「やぶちゃん注… [「佐藤春夫 未定稿『病める薔薇 或は『田園の憂鬱』」](#)（天佑社初版版）[（その18）](#)を対照されたい。マニアックな注もしてある。

本篇を以つて本作は終わっている。

なお、[底本には、最後に佐藤春夫自身による「改作田園の憂鬱の後に」がある](#)ので、本文中に附帯して以下に電子化しておいた。幸い、ネット開始の古い頃には、よくお世話になつた[「網迫の電子テキスト校正@Wiki」](#)の[こちら](#)に新字の電子化があつたので、それを加工データとして使用させて戴いた。ここに御礼申し上げる。

以下は新潮文庫版にも載るが、そこではかなりの段落分けが行われてある。私は無論、底本通りで電子化する。段落の頭の字下げがないのはママである。最後のクレジットは大正八（一九一九）年五月一日である。底本では全体が二字下げであるが、引き上げた。」

改作田園の憂鬱の後に

「田園の憂鬱」の作者自身が、その改作を凡そ了つた晩に、その終に、自分と讀者との爲めに書く。本書冒頭以下の五章は、今からちやうど三年前の五月の作で、同じ六月、雑誌「黒潮」に『病める薔薇』の題で掲載された。この部分は同年十二月に全く改作した。別に同年九月の作である『續病める薔薇』約五十枚がある。それは兼ねての約束であつたにもかかはらず、雑誌「黒潮」の編輯者から、その採録を拒絶された。その原稿を自分は遺棄してしまつた。それ故本書のなかにはそれは收められて居ない。それは勿論、惜しむに足るほどの値はない。第六節以下、即ち本書の大部分は、去年の二月三月の作である。それには發表されなかつた原稿『續病める薔薇』に書かれた同一の材も雜つて居る。併し、全部改めて書かれたものである。同じ去年九月、雑誌「中外」に『田園の憂鬱』として掲載されたものがそれである。その不十分な作品である理由で、自分はその時までその發表を躊躇したのである。當時、書肆天佑社が自分の第一著作集を出版する計畫があつて、

その頁数の都合からこれを同集のなかに収録したいと言った。その著作集『病める薔薇』には、改作された『病める薔薇』が『田園の憂鬱』と一つに連續して『病める薔薇』或は「田園の憂鬱」といふ二つの題を持つて、未定稿と斷つたままで収録した。今茲「やぶちゃん注」…「こんじ」。今年。新潮文庫版では、「ここ」と平仮名で表記変更されている。」、三月四月、自分は同書に憑つて「やぶちゃん注」…「よつて」。先づ可なり多くの誤字脱字を改訂する傍「やぶちゃん注」…「かたはら」。別に約二萬二千字の字数を加へた。二つの新しい斷章をも設けた。それは殆んど各頁に行き涉つての増補で、或は單に字句の創正であり、併しより多くの場所は更に的確精細な描寫と、内容的なりズムの整調とを期し努めたつもりである。而も、もともと今日から見て落筆「やぶちゃん注」…戯れの落書き。」を誤つたものがあつたが爲めに、一度不完全に表現されてしまつたものは、今更これをどうすることも出来なかつた。書き足りない部分には無く、反つて書かれて居る部分で、作者をして全く堪へ難いやうな氣持を起させるやうな箇所は、自分をただ徒らに愧ぢしめるのみであつた。冒頭からの五十頁ほどは、(前述の如く最も舊く書かれた部分であるが、)その最も著しい例である。そんな部分を私は唯そのままにして置いた。それを改めることは全くの無意味だから。それは、不完全ながら、をかしいながらも、それ自身がそのままで持つてゐる或る有機的な組織を徒らに毀つ「やぶちゃん注」…「こぼつ」。ばかりであつて、それを改めることによつて或は様子、の、い、い、ものにはする代りに、それに脈動してゐる或る物を得て傷け「やぶちゃん注」…「きずつけ」。勝ちである「やぶちゃん注」…「得て」は「得てして」に同じ。」。それは決して藝術に忠實な所以ではない。より忠實な者はこんな場合に寧ろ全部を抹殺すると同じ意味で、全部をそのままに生かして置くであらう。

『田園の憂鬱』或は「病める薔薇」は、ともに自分の外的な事情のために、あまりに未定稿のままで、しかも斷片的に發表されたものであつたが爲めに、自分は、最初敢てこれをいくらかでも完全に改作して見ようなどと考へもしたやうなものの、一度書かれてしまつたものをつつ突き返すやうな事は——その可否は別として——今更らながら全く豫想外に、自分には不可能であり、不愉快な仕事でもあつた。さう痛感した時、自分は出来るだけ直ちにそのペンを投げ出した。自分はもうそれ以上の不愉快を忍びたくはなかつたから。自分が、最初にはもつと面目を一變するかも知れない程度での改作を志しながら、敢てそれを存分には遂行しなかつた所以である。かうして、本書改作『田園の憂鬱』或は「病める薔薇」が出来た。いつまでも二つの名を負はされたこの一篇は、いつまでも不完全でつぎはぎであるらしい。それでも未だしも、改作した方がよくなつた(?)と、作者はあやふやな自信をもつてさう考へる。けれども他の人人がそれを見て、無駄だつたと言ひ、又故もなく過去の作品に戀戀として居るものとして笑止がつてくれなければ幸である。とにかくにも、作者は以後、本書をもつて定本としようとする! 『病める薔薇』或は「田園の憂鬱」は、もし事情が許したならば第一の機會に於てこれ位に纏めて發表するのがほんとう「やぶちゃん注」…ママ。」であつた。それが作者の當初の企てでもあつ

た。

雑誌「中外」に掲載された『田園の憂鬱』が、未定稿のままで、比較的江湖に迎へられ且つ文壇諸家の一瞥をも得たことは、年少無名の作者にとつて望外の光榮であつたと言はなければならぬ。けれども同時に、自ら省みて、それがさまざまな事情で、又さまざまな意味で、まことに喘ぎ喘ぎに綴り合されたもので、心ゆくまでにそれを書き遂げる機会を逸して、自ら親しく體驗し、且つ比較的久しく心にあつた作品としては、その或る世界――それは争ふべくもなくつまらない、が併し、そこに暫く私が住まなければならなかつたところの或る世界のアトモスフィアは、この作品で再現された時には、情けないほど稀薄な、この無いものになつて居るのを感じる。私の *Anatomy of Hypochondria* は到底ものにはなつて居ない。さうしてそれはいくらか増補された今でも依然としてさうである。しかも今ではもうこれ以上にそれをどうするといふ氣持にもなれないのを、愚痴にも、多少遺憾に思ふ。この書が（――多辯にも、つい自家一個の所感をまで披瀝してしまつた序に、もうしばらく多少の氣恥しさを堪へて書きつづければ、）この書が、近く新に稿を起さうと用意してゐる『都會の憂鬱』が、或は作者自身満足出来る程度に書かれるやうなことがあつた場合、その時に、その微かな伴奏としてそれほど邪魔をすることもない姉妹篇としてでも、せめては役立つてくれればいいと自分は願ふ。

一九一九年五月一日

佐藤 春 夫

「やぶちゃん注」:「アトモスフィア」atmosphere。「氣圈」・「特定の場所の空間」・「特定の場面・場所の雰囲気」・「環境」・「気分」の意。

「Anatomy of Hypochondria」「ヒポコンドロリア（心気症）の解剖学」。同精神疾患については、「佐藤春夫 未定稿『病める薔薇 或は『田園の憂鬱』』（天佑社初版版）（その7）」の「ヒポコンデリヤ」の私の注を参照されたい。

「都會の憂鬱」登場人物と犬も一緒に「田園の憂鬱」の完全な続編。翌大正一一（一九二二）年に『婦人公論』誌に連載され、翌年に単行本として刊行された。底本では、この後に続けて所載されている。

なお、今回の電子化に際して、「佐藤春夫 未定稿『病める薔薇 或は『田園の憂鬱』』（天佑社初版版）」のブログ版の方は、全部について、正字化不全を新たに修正しておいた。

佐藤春夫 改作 田園の憂鬱 或は病める薔薇 正規表現版 完